# 題名の無い本編

黒企画

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
題名の無い本編

【Ｎコード】
Ｎ３３０８Ｑ

【作者名】
黒企画

【あらすじ】
現在より遠い未来の地球。
能力者と呼ばれる特殊な力を持った者達がスィールズという謎の遺産を賭けて戦うことになる。一方は守るために。そしてもう一方は壊すために。
だが、その戦いは意外な方向へ向かい…？
地球の存亡と運命を賭けた長い戦いが始まった。
※本作はオリジナルの作品です。外伝も掲載しておりますので、お時間がありましたら併せて読んでいただけると幸いです。

## 本作に関する注意や前置き

いくつか本作を読んで頂くにあたり、注意事項や前置きがございます。

1．はじめに

本作は私ともう1名で書いた作品です。著作は当然ながら私ともう1名にあります。

なにか承諾等が必要な行為があるのならば私に連絡していただいた上で、暫しのお時間を頂くことになりますのでご注意下さい。

また今更ですが、本作はフィクションであり、実在する人物や団体、製品名、国家や企業・宗教などなどと本作で登場する全てのものに関して、一切の関係はございません。

2．作品について

非常に多くのパロディ（パクリ）が存在します。

高校生の時代に自由気ままに書いた小説だったこともあります。

そして、それを手直しすることも今のところはしません。気に入らない方は読むことを止めることをオススメします。

3．書き方

小説の形態とはいうものの、本作では

キャラ名　「　台詞　」

という形式をとっております。

これは当時書く際に、いちいち誰が喋ってるかを文章中で判断さ

せたりするのは面倒ということで取られた措置ですが、話が進むにつれて登場人物が膨大になり、結果として書いてる本人達ですら、これがないと把握出来ない感じなので正しかったのではないかと思います。

掲載する、ということになり、これらを書き直すことも考えましたが、テキスト量が多く、また台詞も多いことから編集作業を断念し、そのままにすることにしました。

4．表現

残虐性のある内容や、不愉快な表現、発言等が存在します。
これは掲載するにあたってある程度は修正していく予定ですが、あえてそのままにすることも考えられます。よって、こういった表現が苦手・嫌いな方は読むことをお止め下さい。

5．長さ

かなり長いです。
３０ページの大学ノート（Ｂ５横書き）換算で、約１８冊分が存在し、まだ完結していません。
正直、終わらせられるかどうかがわかりません。
そのつもりで読んでもらえると幸いです。

6．外伝との関連

本作に登場する二人の人物に関して、既に外伝が存在し、掲載しております。
退魔幽遠記については、本作が始まる時間より数年前の話。
光の聖女については、ＩＦの世界の中で発生した話となります。

どちらも本編に直接の関係性はあまりないので、別々に楽しんで頂ければと思います。

## 登場人物紹介～初回簡単編～（前書き）

本項目は、本作序盤に登場する重要人物の紹介です。
ぶっちゃけていうと、書き始め当初はサブキャラは兎も角、主要キャラは以下のキャラだけで話が完結していく予定でした。予定でした。大事なことなので２回（ｒｙ

## 登場人物紹介～初回簡単編～

キャラＮｏ．００１
エルド・シェンプート（１８）　ＡＢ型
フェンドクル大学　体育学科に所属

少年っぽい顔立ちの割にすらっとした筋肉と高い背丈。
近所の女子高校生に大人気。ちなみにおば様にも人気。
少々、引っ込み思案なところがあり、本人は改善しようと頑張っている。

能力『土』
攻守ともにバランスの良い能力を持つ。
土や岩などに干渉し、局所的に地震も起こすことが出来る。
また土や岩などの硬度も改変することが出来る（能力の混め具合で硬度が決定）

キャラＮｏ．００２
メッチェ・カルナーク（２４）　Ａ型
ＭＢ社勤務　営業担当

所謂エリートコースを歩んできた青年。
良い所の生まれでお金には不自由しない生活をしている。
常識的な性格で、誰にでも優しい。

能力『風』
主にスピードと能力の制御バランスに優れている。
風を打ちつけての攻撃や、竜巻、カマイタチなどの攻撃などバリエーションが豊富。

キャラＮｏ．００３
アルベルト・レナンジェス（２１）　Ｏ型
Ｆ１レーサー

１９歳で最年少賞金王を取得。それからほぼ負け知らずの一流レーサー。
荒っぽい性格かと思いきや、意外と面倒見が良い。
モテモテの割には奥手。しかもむっつりである。

能力『火』
攻撃力に特化した能力を持つ。
任意に発火させることも消化させることも可能。
爆発もある程度操ることが出来る。

キャラＮｏ．００４
ルーシア・アスクリエッタ（１７）　Ｂ型
アクチュエス女子高等学校　２年生

人懐っこく明るい性格。頭の回転が速い割にはドジなところが目立ったりする。
頭は良いが感覚で理解することが多く、理屈で説明するのが苦手。
過去にとあることがあり、現在一人暮らしである。

能力『光』
守備力に長けた能力だが、その特殊性から使い方によっては万能性も高い。
光を利用した幻影や迷彩なども使用できる。

キャラＮｏ．００５
宮下　博史（１８）　Ａ型
専門学校生

読書とアニメと漫画が趣味。意外と人当たりのいい性格、ではあるのだが、
話せる内容がアニメや漫画なことが多く、友人は多くない。
しかし頭はそこそこ良く、話さないだけで意外と知識量が多い。

能力???
本編が始まってすぐわかることでしょう。

キャラＮｏ．００６
竜堂　奈々（２１）　Ａ型

ヴァルキュリアス大学　文学部

大人しく神秘的な雰囲気をもつ天然箱入り娘。芯は強く行動派。
常識を知っているのか知らないのか微妙な線が多い。だが本人はいたって真面目。
家は極道を営んでおり、組員１０００人を抱える大所帯である。

能力『水』
全てにおいて平均的な能力を持っている。
特筆すべき点がないが、逆に特にこれといった弱点もない。
治癒力が他の能力よりも優れており、血流も操作出来る。

キャラＮｏ．００７
ジョナサン・キャオ・マイロード（２０）　通称「キャオ」　ＡＢ型
無職

その独特なリーゼントと時代のずれたマフラーなど色々目立つ人物。
性格は気分屋でお調子もの。早とちりが多いが責任感は強い。
中国拳法っぽいものを学んでおり、それなりの腕前。ちなみに女性にはもてない。

能力『気』
自身の能力を強化するものが多い。
また人体の機能を操作することに優れている部分もあり、治癒な

ども可能。
特殊能力として、能力の全てを開放することで自らを超強化することができる。

キャラＮｏ．００８
ロディマス・コンボイ（３２）　通称「ロディ」
バイカー歴２０年

１２歳の頃から無免許でバイクを乗り回す。最近はトラックにも凝っているようだ。
グラサンとバンダナ、そしてくわえタバコがトレードマーク。
性格は良くも悪くもまっすぐで熱血直情型。そしてバカである。

能力『怪力と身体の硬化』
よくわからないが、本人曰く、ともかく怪力と身体が無敵になるらしい。（ロディ談）
ちなみに無敵ではないが。
能力は能力であるのだが、本人の思い込みではないか？という説もある。

キャラＮｏ．００９
ユフィ・キサラギ（１８）　Ｏ型
フリーター

機械いじりが大好きな変わった少女。コンピューターにも強く、

ハッキングなど
非合法な技術にもかなり精通している。性格は竹を割ったような性格でハッキリしており、
感情に素直な子である。ボーイッシュな格好を好む。

能力『サイコキネシス』
サイコキネシスという分類をされているが、一般的に認識される超能力を物凄く強化
したものを使用できる。また、サイキックパワーを物体化、またはエネルギー化して
武器にしたり攻撃したり、といった使い方も出来る。

キャラＮｏ．０１０
ベート・バンデッド（２１）　Ｂ型
ただの不良

三度の飯より喧嘩が好きな男。その凶悪な顔や雰囲気から他人が見ただけで避ける
ほどであるが、女や子供には甘い。が、まず女・子供が寄ってこない。
実は猫が大好きであるが、猫も近寄ってこないのでがっかりしている。そしてバカである。

能力『獣人化』
見たまま狼男になることが出来る。
変身時は筋力などが大幅に上がるが思考能力は低下。（ただでさ

えバカなのに）
また大幅な再生能力ももち、長時間の戦闘が可能。

キャラＮｏ．０１１
ゴルディアス・Ｄ・ビッグマン（３３）　Ｂ型
修理工（なんでも屋）

無口であるが、普段は優しく穏やかな街の修理工として生活。
それとは裏腹に任務となればどんな破壊活動も虐殺行為も行う。
彼に敵対したものから「デストロイヤー」という称号をつけられる。

能力『重力』
重力を使った圧縮や衝撃などの攻撃を主体とする。
防御にはあまり優れていないが、その能力は破壊者の名を通り越して凄まじい。
重力をかけるだけでなく、０やマイナスにすることも出来る。

キャラＮｏ．０１２
ミルティア・オザクルーナ（２７）　Ａ型
ピアニスト

世界にその名が轟くほどの超一流ピアニスト。その美しい容姿も有名な理由の１つで
あるが、実力においても彼女の右に出るもの、その候補すらいな

い。
少々キツいもの言いが目立つが、ロマンチストだったりもする。
あと酒が大好き。

能力『音波』
音波を使った精神攻撃を主体とする。
音波をそのまま衝撃波として利用することも可能。
音楽を利用して不特定多数の人間の行動を操ることも出来る。

キャラＮｏ．０１３
ディース・ラムレッド・グォーゼル（２５）　ＡＢ型
医者

医者ではあるが本人にあまり医者としてのやる気はない。
どちらかというと本業は暗殺者としてであり、その能力を駆使して、ありとあらゆる
依頼をこなす。性格は冷徹で目的のために手段を選ばないタイプ。

能力『氷』
氷を弾丸状にして射出したり、相手を氷付けにするなどの直接的な攻撃手段が多い。
物質だけでなく、空間を凍らせることも出来る（一種の結界となる）。

キャラＮｏ．０１４
フォボス・ケープフィアー（１７）　Ｏ型
高校生（詳しい設定が無かった…ｏｒｚ）

能力者であることを鼻にかけていて、自分が他人と違う存在であることに優越感を持つ。
能力者以外を見下しており、一般人がどうなっても気にしない。
本人は紳士を気取っており、能力者・一般人問わず、女性（年齢帯は限定）には優しい。

能力『原子』
実は詳しくは正しくないという話ではあるが、その実際については究明されていない。
空気中の原子などを操ったり、自らを原子に分解して移動するなど、かなり謎の多い
能力を持っている。物体と物体を融合させるような行為も理論的には可能とされる。

キャラＮｏ．０１５
マッド・ヴォルキア（４５）　Ｏ型
アクチュエス市　市長

市民の信頼も厚く、市の治安維持や財政管理もしっかりと行う人物。
曲がったことが嫌いで自ら鍛えたその肉体で戦うことも辞さないパワフル市長。
その昔、暴力に支配された街をその自慢の肉体で救ったとか。ち

なみに娘はいない。

能力『雷』
雷を落とす、というよりは電気の力を溜め込んで戦うタイプの能力。
放出も可能であるが、溜め込めば溜め込むほど肉体のパワーも増す。
電力を多く取り込むことで、触れただけでダメージを与える肉体にもなる。

キャラＮｏ．０１６
シド・ハイウインド（２１）　Ａ型
Ｓ・Ｗ社勤務　社長のボディガード

プライドが高く自意識過剰だが、それを補ってあまりあるほどの強さをみせる。
戦いが、というより殺しが好きで、無残に死んでいく人間を殺すことで愉悦に浸る。
相方のミリアとは長い付き合いだが現在は彼女を道具としてしかみていない。

能力『破壊の波動』
重力や衝撃とは違った部類の能力で、破壊するためだけの波動。
その他の使い道はなく、ただただ破壊することのみに効力を発揮する。

キャラＮｏ．０１７
ウォン（本名不明　年齢不明　血液型不明）
Ｓ・Ｗ社　社長

覇王となるべくして生まれてきたような男。知力も高く、あらゆる武を修めたといわれる。
目的の為なら手段を選ばないどころかわざわざ身も凍るような恐ろしい手段を選択して
相手を完膚なきまでに叩きのめす。喜びはなく、単に必要な行為だったと認識している。

能力『倍返し＆予知』
最大５秒先の未来が見える能力（常時）。
意識しようがしまいが自動的に攻撃をカウンターする倍返しの能力。
元々もっている武術の能力。高い知力。そしてこれらの能力が彼を無敵へと育てた。

キャラＮｏ．０１８
ミリア・Ｆ・ジーナス（２４）　０型
Ｓ・Ｗ社勤務　社長秘書

物腰の優しく繊細な女性。シドとは幼少の頃からの付き合い。
自分達のしている行為を嘆きつつも、シドのために、シドが心配であるためにその身を

悪に染めていく。昔の優しかった頃のシドに戻って欲しい、と心の奥底では思っている。

能力『治癒』
治癒に特化した能力を持つ。
但し、その能力をフルに活用することで、その回復力を限界を超えて強めて、
相手の細胞を破壊しつくすことも可能である。

## ０００　リティール（前書き）

やや見切りで発車しました。

## ０００　リティール

リティール。

その名は地球という名の惑星に始めて建国された統一国家の名前だ。

西暦も２１００年を越えようとしたある日、世界規模の大地震が起こった。

その災害規模はすさまじく、地球人類の７０％以上を減らす程の大惨事であった。

またその地震が原因となり、大陸の形が大きく姿を変えた。殆ど１つの大陸になってしまったのだ。

復興は困難を極めた。復興するにも人手が足りない。大陸移動による気候の変化で食料の確保も難しくなった。意思疎通も言語の違いという壁によって上手くいかず、更に大陸が統一されたことによって異民族間の争いも絶えないようになっていた。

そうやって荒廃した世界は更に荒んでいった。

結局、その状態が１００年以上も続いた結果、更に１５億近くの人間が減ってしまった。地球上に暮らしていた６０億以上いた人間が、たった５億人程になってしまったのである。

次第に人々は自らの存亡の危機を感じたのか、はたまた争いに疲れたのか、復興と再生に向けた活動が本格的に始まった。

そうしてようやく人類が元の暮らしを取り戻しかけた頃には元の国などの事は忘れてしまっていた。

言葉も今までの言葉から新しく世界共用語が作られた。

大震災からおよそ２００年程が過ぎた時、かつて東京と呼ばれたいたであろう大地を中心に大都市が形成されていた。

そしてそこを中心に「リティール」という国家が生まれたのである。

厄災を経て、ようやく人類がひとつになったのであった。

そうして更に幾許かの時を経て…そんな大地震の記憶も遠い過去のものになったころ。

人々は平穏に暮らせる日常が当たり前になった。

これはそんな平穏を取り戻したリティールで発生した、最悪かつ最後の、そしてその歴史全てを、その運命を賭けた戦いの記憶の物語。

## ００１　青年の死

リティール　ロムディート区の南部に位置するエルティア。
そのエルティアの街の一角で一人の青年が本を読みながら歩いていた。

本の題名は「正義と悪」である。

青年「ふーっ。やっぱり難しいな、この手の本は。それにしても正義と悪か…」

彼の名は宮下博史。
今年で１８歳を迎えた専門学生である。
ちなみにその学校とはＣＧデザイナーを養成する専門学校だ。

博史「さてと、家に帰らないとな」

彼は道をふらふらと散歩しながら本を読むのが趣味だった。
周囲からすれば危なっかしい上に迷惑ではあるのだが、徐々に回りがそれに慣れはじめていって、この周辺で博史の読書歩行は結構有名になっている。そのためか、本を読んでいる彼の進路を空けたりと色々気を使ってくれている。
本人はあまりそれを感じていない、というのはあまりよろしくない部類の認識力ではある。

博史「たまには違う道でも使うかな？」

ふと、いつも通らないルートを使って家に帰ろうと思い立った。
大体はお決まりのルートを通って、お決まりのルートで帰る。と

いうのが常であったが、なんとなくこの日は目の前の薄暗い路地を通りたくなったのだ。
生まれてこの方、この路地だけは必要が無かったので通ったこともなかった、ということを今更ながらに思い出して苦笑した。
博史「まだこの辺で全く知らない道っていうのも面白そうだ」
まさかこの年齢になってもまだ探検心があることに驚きを隠せない。
博史「ちょっとワクワクだね」
思わず声に出して言ってしまった。

その道は暗く、何故かとても静かだったが嫌な感じはない。
そもそもこの辺りの治安はかなり良い方で、運が悪くてもカツアゲ程度だろう。通り魔のような最悪なケースはここ何十年も起こっていない。

そういった経緯もあって、博史は何事も恐れることなく気楽にその路地へと入っていく。
暫くまっすぐ進んでいくと、薄暗い路地の片隅で男が一人、壁を背に腕を組んで立っていた。
その格好は明らかに一般人とは異なり、背も高くスラっとした外見に装飾の激しいコートのようなものを着込み、銀髪で整った顔立ちはどこかの高級ホストの人間のように思わせる。
しかし博史はそれを特に気にせず、歩みを進めていった。

ところが。

？「宮下博史、だな？」

男はごく短く、小さく低い、でもハッキリとわかる声で一言、そういった。

はて？と訝しげに首を傾げた博史だったが、「ハイ」と簡単に答えた。

？「そうか」

男はそういうと黙り込んだ。

博史は何故、この男は自分の名前を知っているのか？と不思議に思ったが、暫く待っていても何の反応もなく、男の方も黙り込んだまま下を向いているので特に用はないのだろう、と思い、再び歩みを進めようとした。

その刹那、

博史「ぶぐるはぁぁっ！！」

何が起きたのか博史には理解出来なかった。

だが彼は理解する必要も判断する必要もなかった、いや、出来なかった。

その一瞬で、彼の瞳からは光が失われ、その命の鼓動は消え去っていたのだった。

？「他愛も無い。殺気も闘気も見抜けず、ただの一撃で死亡、とはな。ふん、所詮はスィールズ・ガーディアンなんてのはただの名前だけか？　…いや、まだ目覚めていなかったのかこいつは。　まぁ

いい、任務は完了だ。」

男はそういうと、静かに歩き出した。

博史はその頃、既に物言わぬ魂の無い肉と化していたのだった。

## ００１　青年の死（後書き）

いきなり主要キャラが死ぬ不具合。

## ００２　少女とオジサン（前書き）

最初はスパンが短いものが多いです。

## ００２　少女とオジサン

リティール　ロムディート区南西部　ラクーン。
その大都市のハズレにその店はあった。
バイクストア「デッドウルフ」。
文字通り（？）バイクを販売することから修理までこなす。大して大きくもなく小さくも無く、特徴もない地味な店だ。その店の店長（といっても一人しかいないのだから当然だが）であるロディマス・コンボイは今日も店前でせっせとバイクをいじくっていた。

ロディ「う～む。少しスプリングが緩いな」

ロディはスパナを拾い、グリグリとボルトを締める。

ロディ「ようし、完璧だぜ」

ロディはニヤリと笑い、大してかいてもいない汗を拭う素振りをしてから店内へと入る。
油まみれになった軍手を脱ぎ捨て、オンボロＴＶにスイッチを入れる。今時殆ど見かけない、というより存在自体が貴重なブラウン管ＴＶの画面にニュース番組が映し出される。

『と、いうことです』
ＴＶから流れるリポーターの声。ロディはその声を聞きながらコーヒーを沸かし始める。
『次のニュースです。今日午後１５時頃、リティール　ロムディート地区南部で１８歳の男性が何者かに殺害されるという事件がありました。亡くなったのは専門学校に通う宮下博史さんで警察は殺人事件と見て…』

ロディ「ロムディート区南部ぅ？かぁ～、全く物騒だなぁ、すぐそこじゃねぇか」

ロディはそう言って。先程入れた生温いコーヒーをグイっと飲み干す。

？「物騒なのはアンタの顔じゃないの？オジサン」

ロディの背後から聞きなれた女の、いやガキの声。

ロディ「なんでぇ、ユフィか」
ユフィ「なんでぇ、はないでしょ！なんでぇは！！」

ムッとするユフィ。
ユフィ・キサラギ。3年前にロディと知り合い、それ以来の付き合いである。
ユフィはロディを＜おもろいオッサン＞として認識し、
ロディはユフィを＜ケツの青いガキ＞として認識している。

ロディ「で、なんか用か？」
ユフィ「ハイ。コレ！」

ユフィは何かが入った紙袋をロディに突き出す。

ロディ「あ？なんだコリャ？」
ユフィ「ロディがこの間、私に頼んだバイクの部品よ！買ってきてあげたんでしょ！」
ロディ「おお、そうかそうか、ガハハ！スマンスマン、忘れてた。」
ユフィ「まったく…このオッサンは…」

ゲラゲラと大声で笑うロディに呆れるユフィ。
だがこんなやり取りはいつものことであった。

ユフィ「もぉ…次は自分で行ってよね。バイク屋なんだから、部品くらい自分でなんとかしなさいよ！」

そういって右手をズイっとロディに突き出す。

ロディ「あん？なんだよ？」

ロディはとりあえずその手を握って握手する。

ユフィ「ちっがーう！！お金よ！部品代！私が立て替えてあげたんだから、ちゃんと返してよ」

握手する手を振り払いながら起こるユフィ。

ロディ「おお！部品代か！ああそうか！ガハハハハハ…ハ……ない」

ユフィ「・・・・ハァ～～～。ま、そうだろうと思ったけどね。」

再び呆れるユフィ。

ロディ「…ところでよ、おめぇ」

今更ながらにロディはユフィの服装がいつもと違うことに気が付く。

いつものユフィはまるで少年のような格好をしているのだが、今日は女の子らしく、上から可愛らしいキャップ、クリーム色のセー

ター、少し短めのスカートにタイツ、そしてミドルカットのブーツ、背中には可愛らしいナップザックまで背負っている。

ロディ「そんなカッコしてドコ行くんだ？」
ユフィ「んふっ！よくぞ聞いてくれました！」

　ユフィはニコニコしながら、スカートのポケットから一枚の紙を取り出す。

ユフィ「ジャーン！」

　ロディに取り出した紙を見せ付けるユフィ。

ロディ「あん？なんだこりゃ？映画のチケットか？」

　サングラスをズラして紙に顔を寄せるロディ。

ユフィ「違うわよ、コンサートのチケットよ！」
ロディ「コンサート？」
ユフィ「そう！超々大物ピアニスト！ミルティア・オザクルーナのコンサートチケットよ～ん！」

　ユフィはそういってクルクルと踊りながらチケットにキスする。

ユフィ「このチケットを手に入れるのにどれだけ苦労をしたことか…。自由席なのに…全然とれなくて…ああ嬉しい！」

　スリスリとチケットに頬ずりをするユフィ。

ロディ「ミルティア・オザクルーナねぇ・・・・・・・・・・・・・・

・・知らん」

ロディの発言にユフィの時が止まる。

ユフィ「・・・・・・・ハッ！？何！？今、知らんとかって」

ロディ「そんなん知らんわ」

そういってタバコを取り出し火をつけるロディ。

ユフィ「信じらんない！今をときめく、あのミルティア・オザクルーナを知らないなんて！」

ロディ「悪かったな」

ユフィ「はぁ。こんなオジサンに自慢しに来た私がバカだったわ」

ロディ「自慢しにきたのか、本当は」

付き合ってられん、とばかりに店内にあるバイクのエンジンを吹かし始めるロディ。

ユフィ「それじゃ、私コンサートに行くから。ロディはサブ・キタジマの歌でも聴いてれば？」

ユフィはそういうとテクテクと店を出て行くのだった。

ロディ「・・・・・サブ・キタジマねぇ…。・・・・・・・小作が木を切る～～ってか？」

それはイクゾー・ヨシだ。

## ００３　少女と少年と悪人

―ミルティア・オザクルーナ　コンサート会場―

開場まで三時間前。それだというのに辺りは人、人、人。
さながらアリの行列のような長い列が出来ていた。

ユフィ「うわぁ、凄い人。まだ開場まで三時間もあるのにぃ～」

ユフィは人ごみの中、ウロウロと自分が並ぶ自由席の列を探す。

『自由席のチケットをお持ちのお客様はこちらの列にお並びくださ～い』

会場スタッフらしい男が簡易マイクとスピーカを片手に叫んでいる。

ユフィ「あ。あの列ね」

そのスタッフの声から自らの並ぶ列を発見したユフィは急いで駆け出す。

ドンッ！

ユフィ「キャッ！」

駆け出した途端、ユフィは一人の少年とぶつかり、ドタッと尻餅をついてしまった。

ユフィ「いたー…」

予想外の事態とお尻の痛さに顔を歪ませるユフィ。

？「ごめんよ、ケガはないかい？」

少年がユフィに手を差し伸べる。

どうやら彼がぶつかった相手のようだ。

どこかの学校の制服をきている。チョット変わった髪形をしているが、悪くないどころかどちらかというとイケてる感じのする顔立ちである。

ユフィは少年の手を取ると立ち上がった。

？「ボクとしたことが余所見をしてしまっていてね」

ユフィ「いえ、いいんです。それじゃあ」

？「ちょっとまって！」

先を急ごうとするユフィの手を少年が掴む。

ユフィ「はい？」

？「ミルティア・オザクルーナのピアノを聴きに来たんだろう？」

ユフィ「えぇそうですけど…」

？「ボクもそうなんだ。お互い自由席同士みたいだし、どうだい？二人で？」

ユフィ「あの…その…」

唐突な申し入れにテレるユフィ。

？「おっと、自己紹介がまだだったね。ボクの名前はフォボス。フ

ォボス・ケープフィアー。デルターナ高校の3年さ。君は？」
ユフィ「あの…私はユフィです。ユフィ・キサラギです。」
フォボス「ユフィ・・・・・・・いい響きだね」

ニコリと笑うフォボス。

ユフィ「あは、その…ありがとう、ございます…」

容姿は可愛らしいとかなんだと褒められたことがあるユフィだが、その名前を褒められるパターンは初の経験であり、なんだか誇らしくもあった。

男性との色恋沙汰ということに対して全くといっていいほど免疫がないユフィ。加えてそこそこの美形な少年に名前を褒められたという未体験の状況に困惑すると共に、かなりテレてしまっていた。

既にフォボスの顔をまともに見ることも出来ていない。

ポンッ！

そんな中、ユフィは突然、後ろから誰かに肩を叩かれる。

ユフィ「はい？」

あまりの突然のことだったので全くの無警戒で振り向くと、そこには信じられない悪人ヅラをした男がいた。

ユフィ「キャアッ！」
？「キャア！じゃねぇだろ！このアマ！！」

身長１９０ｃｍはあるであろう金髪で黒い皮ジャンを着た男がユフィに話しかけていた。
よく見ると、それはユフィの見知った顔であった。

ユフィ「なんだ、ベートか。脅かさないでよ」
ベート「別に脅かしてねーよ」

ムッとするベート。
彼はベート・バンディット。
ユフィとは幼少の頃からの腐れ縁である。

ユフィ「ところでベート、アンタこんなところでなにしてんのよ？」
ベート「何ってオメェ、コンサートに来たに決まってんじゃねぇか」
ユフィ「はぁ？ベートがピアノを聴きにきたなんて信じらんないわ。大方、他人から巻き上げた財布にチケットが入ってたんでしょう。そしたら日付が今日。ヒマだからいくか、そんなとこかしら？」
ベート「ち…違うわい！オレ様をナメるなよ！」

何をどうナメているのかわからない上に激しく動揺しながらムキになっているベート。
明らかにユフィの推測する内容が事実であることを証明していた。

ユフィ「じゃあ誰のコンサートか言ってみなさいよ」
ベート「な、何！？」

ドキっとするベート。

ユフィ「あれぇ？言えないのかなぁ？」

イヤラシイ目でベートを眺めるユフィ。

ベート「言える！え～と…ほら、アイツだよ！あの男！」
ユフィ「男？今日のピアニスト女の人よ？」
ベート「・・・そ～だった！女！女！」

慌てて訂正するベートだったが、正直もう充分だった。

ユフィ「もういいわ。こっちがハズカシイもん」
フォボス「あ～。オホン」

ユフィとベートの漫才？を黙ってみていたフォボスは、そろそろ思い出して欲しいとばかりにわざとらしく咳払いをする。

ベート「あん？」

やっとフォボスの存在に気が付くベート。

ベート「なんだ？このスカした野郎は？」
フォボス「初対面の相手にイキナリそんな事を言うなんて失礼な奴だな」
ベート「失礼で悪かったな」
フォボス「悪いに決まってるじゃないか。まあ君みたいな人間に礼儀なんてものはないのかもしれないけどね」

フッと笑うフォボス。

ベート「・・・テメェ。喧嘩売ってんのか？」
フォボス「さぁどうですかね」

ベートが強い不快感を全身で表現するも、サラっと受け流すフォボス。
そして激しく静かに睨み合う二人。
ユフィ「ち、ちょっとベート、やめなさいよ！フォボスさんも、お、落ち着いてください！！」
慌てて止めに入るユフィ。
フォボスはわからないが、ベートの喧嘩っぱやさとその強さは知っているつもりである。
仮に喧嘩になった場合、フォボスの身がどうなるかがわからない。
フォボス「・・・・・・・フン。不愉快だな。二度と君の顔は見たくない。失礼するよ。それじゃあユフィさん、今日は日が悪かったようですが、そのうちにまたお会いしましょう」
別れ際にフォボスはベートに一睨みおくると、そのまま人ごみの中に消え去っていった。
ベート「ケッ！コシヌケ野郎が！」
悪態をつきつつも、相手が逃げたと判断して勝ち誇るベート。
ユフィ「ちょっと！アンタ！なにやってんのよ！フォボスさんを怒らせて！もうサイテー！」
だがベートの行動に関してユフィは偉くご立腹のようで、怒りは危険領域だ。
ユフィが本当に怒るとベートはかなり困ったことになる、というのは過去に何度も経験済みであったから、こうなるとベートは下手

に出ざるをえなかった。

ベート「だってよ～～～。むかつくぜ、あのヤロー！」
ユフィ「昔っからいっつもそうなんだから！！」
ベート「わ～ったわ～った！悪かったよ、ゴメンよハイ」

物凄く適当に謝るベート。
だがこれ以上を求めてもあまり意味が無いどころか労力の無駄であることもユフィはわかっているのであった。

ユフィ「全く反省の色が見えないわよ。・・・・・・・・・ふぅ仕方ない。この際ベートでもいいや、一緒にいきましょう」
ベート「ちっ、しゃーねーなー。付き合ってやんよ」

仲がいいのか悪いのか。
二人は列に並び、ゆっくりと動きながら場内へと足を運ぶのだった。

## ００３　少女と少年と悪人（後書き）

フォボスの高校設定がこんなところにあるとは…。

## ００４　少女と野獣とコンサート

―ミルティア・オザクルーナ　コンサート会場内―

場内は人でごった返していた。
それもそのはずだ。あれほどの並んでいた人数が全てこの会場に集まっているのだ。それなりに広いコンサートホールとはいっても限定された閉鎖空間である室内ではかなり窮屈に感じてしまう。

ユフィ「うわぁ…。流石に凄い人ね。やっぱり一流の人のコンサートって感じがする」
ベート「全くよ！この人間どもはどっから沸いてんだよ！邪魔だってのによ！」

ベートが少し大きく荒っぽく言う。
その声に気が付いた他の客が一斉にベートへ顔を向ける。そしてすぐ逸らす。

ユフィ「ベート！他の人が見たら怯えるでしょ！少しは大人しくしなさい」
ベート「あっ！ほれユフィ。あそこまだ空いてるぞ。特等席じゃねぇか」

ユフィに怒られる前に話を逸らそうと、何か適当な話題を探していたベートの目に空いている席が見つかったのは幸運であった。
見つかったのはステージ前から４列目の中央辺りの席である。

ユフィ「あ、ほんと。ベート、早く行くよっ！」

上手く話の流れが変わってほっとしつつ、駆け出したユフィを追うベート。

ベート「まてよ、コラ！なにはしゃいでんだ」

本来、音楽を聴きにきているのだからホール内に居さえすれば場所はあまり関係ない。この際、最後尾であっても座って落ち着いて聴けるのであれば問題はなかった。だが、やはり演奏者が美人であることや、その美しい演奏姿にも定評があったこともあってか、ステージ上が見れる場所が空いているならばそれに越したことはない。

席に辿り着くと早速、手に提げたバックを席に置きつつ、ふうっと息をつくユフィ。

ユフィ「良い席ね。ベートお手柄よ。…でもなんでここだけ空いてたのかしら？」

ベート「俺様の日頃の行いが良いからだろう」

ユフィの疑問にベートが自信満々、といったように答える。

ユフィ「アンタねぇ…。それ、本気でいってんの？だとしたらシャレにもならないわ」

ベート「あんだとぉ～！！」

ユフィ「さてとベート。アンタはここで席を取って待ってて。私は飲み物でも買ってくるわ。いい？ぜ～ったい、大人しくしてるんだからね」

そういうとさっさとホールの出口へ向かって走っていってしまった。

ベート「あっ、おい。ユフィ」

軽くあしらわれたベートは釈然としないまま、だが仕方なくそのまま椅子にどっかりと座る。

と、そこへ二人組みのいかにもチンピラ、ゴロツキといった風の男がやってきた。

チンピラA「おい、俺の席が取られてるぞ」
チンピラB「へっ、ちょっと痛い目みたいらしいぜ」

彼らもまた一般人からみたら相手にしたくない雰囲気と風貌を持っていた。
空いていた席とはつまり、彼らが罪も無い一般人を脅して確保した場所であり、その一部始終を知っていた回りの人間はその席へ座ることは出来なかったからなのである。

一般人が座ろうとすれば、周りの人間がそれとなく注意をしてきていたが、今回はベートがいた。はっきりいってベートもチンピラも周りの人間からみたら「絶対に関わりたくない人間」に分類される。だから誰もこの事を伝えなかった。いや、伝えられなかった。

チンピラA「さてと、おい、兄さんや。そこは俺たちの指定席なんだけどよ」
チンピラB「勝手に座った代金は高くつくぜぇ？」

ベートの後ろから二人組みがそう声をかける。
ベートは、というとあまりのヒマさとユフィの言いつけを守るという両方を考えた結果、あまり良い考えが浮かばずボーっとしてい

たこともあって、その声に気が付かない。
それはこの二人にとっては幸運だったといえる。

無視されたと思ったチンピラ達。一気に実力行使に出ようとチンピラBがベートの肩を掴む。

チンピラB「おい、兄さん。聞こえてんだろ？あぁん？」
ベート「あ”？」

何事かと振り向くベート。
眠気もあってか眉間にしわを寄せるような顔、他人がみたら不機嫌そのものであるような顔で振り向いた。

チンピラA・B「！？」

一瞬で硬直するチンピラA・B。
彼らもこの界隈で色々と無茶をしている者達であったから、ベートの存在やその伝説。そして強さを知っていたし、大体の容姿や格好も知っていた。
だからこそ、自分達が誰に喧嘩を売ろうとしていたか、という無謀さを一瞬で理解する。

ベート「何の用だ？」

ベートのほうはチンピラたちの事を知らない。そもそも強い奴か自分と関わりのある人間しか覚えられないベートが、いちいち街の弱い人間にしか強く出れないような小物を、街で見かけた程度の人間を覚えているはずがなかった。

チンピラA・B「す、すいませんでした。人違いです」

ベートが最初のこちらの台詞に気が付いていなかったことを悟ると、触らぬ神に祟りなしとばかりに逃げるようにその場を去っていった。

そこに入れ違いでユフィが戻ってくる。

ユフィ「どうしたの今の二人？」
ベート「さぁ？わかんねぇよ」

そんなやり取りを合図のようにホールが暗くなり始める。
コンサートの開始時間である。

ユフィ「あ、始まるよ」

しっかりベートの分まで飲み物を買ってきたユフィは、ベートの分を渡すとそそくさと自分の席に座る。何故か身だしなみを整えたり、キリっとした座り方になっている辺り緊張しているのだろう。

徐々にステージの幕が上がっていく。
広いステージの上にはたった一つ、ピアノが一台置かれているだけ。
眩しいスポットライトもそのピアノだけを照らしている。

やがて幕が完全に上がると、コツコツコツ、とステージ上を誰かが歩く音だけが響く。
暫くするとその足音の主がスポットライトの隅に現れる。
今回のコンサートの主役であるミルティア・オザクルーナの登場である。

ミルティアは一礼すると早速ピアノに座り、静かに、ゆったりと鍵盤に手を添える。
わずかな間の後、その音はゆっくりと静かに、だが確実にホール内に広がっていく。

静かな湖畔を想像させるような旋律が流れ始める。
その旋律は想像させるだけではなく、情景にあわせるかのように聴く人の心まで静かに穏やかに、そして清らかに洗い流してくれているかのような旋律だった。

たった数分の間で会場は既にミルティアの虜だった。
演奏の腕だけではなく、その演奏に込められた感情や、その楽曲の背景なども正確に再現しつつ、彼女なりの解釈が加えられて更に素晴らしい進化を遂げた音楽は、誰が聴いても非の打ち所の無い素晴らしい芸術であった。いや、むしろ芸術の枠すら超えるとも表現しても誰も疑うことなく肯定するであろうものだった。

コンサートの時間は５０分。
その５０分は永遠とも一秒とも思えるものであった。
だが誰もが、その演奏が終了しても拍手をしなかった。観客全員が心を奪われて演奏が終わったことにすら気が付いていないのだ。

ミルティアもそれがわかっているのか暫くは演奏が終わったままの体勢から動かない。
充分に3分ほど経過してから、ミルティアはゆっくりと身体を動かしていき、椅子を引いて立ち上がろうとする。
その椅子が地面と擦れるわずかな音をきっかけに観客は我に返って演奏が終わったことを知った。

パチパチパチ　と小さな拍手が始まると一瞬で大雨が起こったか

のような凄まじい数と音量の拍手がミルティアを賞賛する。
その拍手を受けてミルティアが一礼すると、音も無く幕は閉じていった。

まさに夢のような時間であった。

アナウンス「本日はご来場、誠にありがとうございました。本コンサートはこれにて終了となります。」

ユフィはしばらく席に座ったまま感動の余韻に浸っていたが、ふとベートの存在を思い出して横を見る。彼ならば「たいしたことなかったぜ」とか言いながら、感動して半泣きのユフィをからかうの決まっていたはずなのに、何の反応もなかったからだ。

ユフィ「ベート？」

ベートは泣いていた。明らかに目から涙がぼろぼろと落ちている。が、ユフィに視線に気が付くと慌ててその涙を拭った。

ベート「た、大したことねぇ、とか思っていたがなかなかうめぇじゃねぇか」
ユフィ「何言ってんのよ！アンタ、凄い感動してたじゃない」
ベート「バッ、バカヤロウ！これは目にゴミが入ったんだよ、それもこんな大きいのが！あんなピアノ如きで俺様が泣くなんてありえねぇ」

明らかに嘘である。誰が見ても丸判りである。

ユフィ「ふ～ん・・・・。本当かねぇ～・・・・。まっいいや。そう

いうことにしておいてあげる」
ベート「信じてねぇな、このアマ」
ユフィ「ほら、いいからご飯でも食べに行きましょう。約束どおりベートのおごりで」

そういって走り出したユフィ。

ベート「おいコラ！！誰がいつそんな約束したんだ！」

叫びながら追いかけるベート。

そんな二人を遠くから見つめるフォボス。
だがそのフォボスの姿は、人が瞬きするよりも早く、その場から消えていた。

## ００４　少女と野獣とコンサート（後書き）

書き終わったら投稿する。そんなペースでやってます。

## ００５　スラム街の惨劇（前書き）

手直ししたい部分が多すぎるが…。
全部に手をつけるなんて俺には…出来ない！！

## ００５　スラム街の惨劇

―リティール　クエンペスト区中央部　スラム街―

男「ハァッ、ハァッ、ハァッ」

男は必死の形相でただ闇雲に、入り組んだスラム街の中を走っていた。

その身体からは大量の脂汗。顔は恐怖に歪んでいる。右手にはこれでもかとしっかりと握られたマシンガンらしき銃。

男は必死に逃げる。途中、廃材などで足や身体を傷つけてしまうがその程度は気にしない。というか気になるはずがなかった。ただ逃げることしか頭にないのだから。

その走る男の後をゆっくりと、だが確実に追っていく一つの影。

男「だ…だれか！！　…たす…たすけてくれぇ！！！」

男は何度も後ろを振り返り叫びながら、迷路のような街を走り続けた。

男「だれか！だれかぁ～～！！」

スラム街は無人といってもいい。

いや、人はいる。だがこの男に救いの手を差し出すような愚か者はここにはいない。

右へ…左へ…男は自分を追う影から逃げた。

しかし、４つ目の角を曲がったところで男の足が止まった。

男「そ・・・そんな・・・い・・・いき・・・」

行き止まり。男は袋小路に入っていたのだ。

コツッ・・・

静まり返ったスラムに靴の音が響く。
男はビクっと身体を反応させ、ゆっくりと振り返る。
男が走ってきた角、そこから1つの影がゆっくりと大きくなってくる。

コツッ　コツッ　コツッ

男「ひ・・・ひ・・・」

着実に近づいてくる足音。それは男にとって死の音であるといっていい。
その音に男は怯え、ガチガチと歯を鳴らし始める。

影はついに角を曲がり、男の前にその姿を現す。
その影はまだ若い青年だった。月明かりに影の男の銀髪が美しく煌き映えた。

男「く・・・くるなっ！」

男は震える手でマシンガンを構えた。だが、銀髪の青年はまるでそれが目に入らないかのように男に迫る。

男「う・・・うわあああああああ！！」

ガガガガガガガガガガガガ！！
男の手にしているマシンガンが火を噴いた。

だが、次の瞬間、

チュイーン！チュイン！

マシンガンから放たれたはずである弾は、全て青年の目の前で見えない何かに阻まれたかのように弾かれた。

男「な・・・なんで！なんで当たんねぇんだよう！ひ・・ひぃ！」

そう叫びながらも男はマシンガンの引き金を引いたまま撃ち続ける。

ガガガガガガ！

だが、やはり青年にその弾は届かない。
そして男にはその青年を取り巻く球状の波動は見えない。

ガチッ！ガチッ！！

男「ひっ！？」

男は声をあげた。

ガチッ！ガチッ！

何度もトリガーを引く。

だが・・・弾はもう出なかった。

青年「クックック・・・どうやら・・・・・・・ゲームオーバーみたいだな」

青年はニィっと笑うと、ゆっくりと男の目の前へと迫っていく。

男「あひ・・・・！ヒィ！！」

男は壁を背にズルズルと尻餅をついた。

男「た・・・助けてくれ！！も、もうアンタらS・W社にはたてつかねぇ！！か、金もやる！！この街からも出て行くから！！」

男は泣きながら青年に命乞いをする。

青年「・・・・・・・」

青年はただ無言で、恐怖に震え、命乞いをする男を見下ろす。

男「お願いだ！こ…殺さないで！！殺さないでくれぇ！！！」

男は青年の足に情けなくしがみ付く。まるで犬のように。

男「オ…オレが死んだら…。娘が…娘が悲しむんだよぉ！一人っきりのムスメがぁ！頼むよ！！ま、まだ一人で生きていけるほど大きくもないんだよぉ！！」

その言葉を聞いて青年はスウッと笑みを浮かべた。

青年「・・・そうかい・・・それじゃあ・・・」
男「た・・・助けて、くれるのか?!」
男は青年の目を見つめた。冷たい青い目だった。
青年「後から娘も送ってやるよ」
男「え?」
青年「　死ね　」

ドンッ!

青年の目の前で男の頭は粉々に吹き飛んだ。
壁や地面、辺り一面に血や脳髄が広がっていく。
青年は男に手を触れていない。しかし男の頭は砕け散った。
青年「ク…ククククク。クハハハハハハ!」
青年は笑いながらその場をゆっくりと歩き去る。そのままスラム街の大通りへと出る。
大通りにはおよそスラムには似つかわしくない、その一台だけでスラムの土地の半分近くが購入出来る程の最高級車が、エンジンをかけたまま停止していた。
ガチャリ
運転席のドアが開き、美しい女性が青年の前に姿を現す。
女性「ご苦労様、シド。ケガは・・・」

パシッ！

女性「あっ！」

シドと呼ばれた銀髪の青年は、その女性の右ホホをひっぱたいた。

シド「ふざけるな。オレがたかだか数百人のマフィアにキズつけられると思っているのか？」

シドは女性を睨みつけた。

女性「・・・そうね・・・。ゴメンなさい・・・」

シド「フン。まぁいい・・・。ミリア、さっさと車を出せ」

ミリアと呼ばれた女性は後部座席のドアをあけ、シドを乗せると自らは運転席へと乗り車を走らせ始めるのだった。

運転中、シドもミリアも喋らない。

車はスラムを抜けて、都市部へと入っていく。

静かな車内。

いつものことであったが、今日はそれほど長く続かなかった。

トゥルルルル　トゥルルルル

運転席横の車内電話がコール音を鳴らす。

ミリアは運転しながら左手でその電話を取る。

ミリア「はい・・・・・ええ。今代わるわ。」

ミリアは後部に座っているシドに受話器を手渡す。
シド「誰からだ？」
ミリア「フォボスからよ」
相手を確認したシドはゆっくりと受話器を耳に当てる。
シド「オレだ」
フォボス『どうもフォボスです。どうでした？仕事の方は？』
シド「問題ない。これでこの都市（まち）でS（ウチ）・W社に歯向かうクズどもはいなくなった」
シドは言いながらウィンドウ越しに流れる都市（まち）のネオンを眺めた。
フォボス『さすがですね』
シド「フン。世辞はいい。お前の方はどうだった？」
フォボス『予想的中ですよ。ミルティア・オザクルーナはボクらと同じ使命をもった同志でした』
シド「そうか」
フォボスのもたらした報告にシドはニッと笑った。
フォボス『それから・・・』
シド「なんだ？」
フォボスはふとユフィとベートの事を思い出した。妙に何かが引っ掛かる。だが…。
フォボス『いえ、なんでも』
シド「フォボス…隠し事はしないことだ。死にたくなければな」

フォボス『本当に・・・なんでも』
シド「・・・・・・・まぁいい。引き続き残りの同志の捜索を続けろ」
フォボス『はい。それじゃあシドさん、また』

そこで通話が切れる。
電話を終えたシドは無言でミリアに受話器を差し出す。
後ろを見ないでそれを受け取ったミリアが慣れた手つきで元の位置に戻す。

ミリア「シド、もうすぐ本社よ」
シド「そうか」

短く答えたシドは再びウィンドウ越しに外のネオンを眺めるのだった。

## ００５　スラム街の惨劇（後書き）

今までの投稿でノート１０ページ分。
このペースでいくと単純計算で最新話まで２４０回か…。
意外と短い…のか？

## ００６　スラムの医師

場所は再びスラム街へと移る。

シド達がここを離れて数十分ほどの時間が経過した。

男「やれやれ、やっと去ってくれましたか。同志とはいえ…少しばかりやりすぎですね」

男は辺りを見回す。

何十という人間が手に武器をもったまま倒れていた。ある人間は頭がなく、ある人間は右半分しかなく、ある人間は上半身がなく、ある人間は頭しかなかったが。

男「シド・・・とかいいましたね、あの青年。何か…おかしい…。まぁ今はいいでしょう。とにかく、今はまだ見つかる訳にはいきませんからね」

そこまで言ってから、ふと顔を空へと向ける。

男「フフフ。ウォンとて万能ではないでしょう？どちらが利用されるか、これからが勝負です。私の目的のためにも」

一人、そう呟く。

そして彼は音もなく歩き始める。

スラム街、といってもここは彼にとって住み慣れた街であった。

スラム街の常識は当然のこと、どこにどのような人間が集まっていて、どのような勢力が構成されているか、どういった関係が築か

れているか、どの全てを把握している。

彼は慣れたように感覚でスラム街の中を進んでいく。

細い道を進んでいくと、スラム街ではそれなりに立派な部類に入る建物が目の前に見えてくる。

その建物には大きな看板が出ていた。

『外科内科精神科　その他　グォーゼル医院」

と書かれている看板だ。

規模としては町医者よりも小さい。

スラム街で個人が所有する建物としては立派ではあったが、一般的な家屋と比べてもかなりボロが目立つ。

誰が見ても医者としては成功していないと判断できる見た目だ。

そんな病院とは名ばかりの建物に男は躊躇なく入っていく。

そう、ここは彼の家だった。

そして彼はこの病院の医院長であり、唯一の医者であった。

医者として儲かっていない。そんなことは彼も重々に承知している。

腕は良い。お世辞ではなくても業界ではトップクラスと言える腕前だった。

と、過去形にしなければならない。

彼は現在のところ医術で日々の糧を得て暮らす、という選択肢を捨てているからだ。

そんな彼の儲かっていない病院であっても、何故か看護婦が一人住み込みで存在していた。

彼が病院内へ入ると、その唯一の看護婦が出迎える。

看護婦「おかえりなさい、ディース先生」

ディース「あぁ、ただいま。ミント」

男はディース・ラムレッド・グォーゼル。

若くして天才と呼ばれた医療の技術を棄て、このスラム街での生活を始めた男だった。

一方、ミントと呼ばれた女性。

本名はミント・フルフラット。

年こそ２０に近いものの、その幼さの残る顔立ちや仕草はこのスラム街で生きている人間だとは到底思えない雰囲気をもっていた。

彼女はこのグォーゼル医院に住み込む、ただ一人の看護婦であるが、正式な訓練を受けた看護婦ではない。

彼女がここに住む込んでいる理由はディース、ミント共に違う見解から存在していた。

丁度2年ほど前になる。

ミントは当時１７歳。

事故で両親が他界し、その他諸々の不幸が重なり、人生に絶望しながらも生きようと足掻くも、どうにもいかず行く充てもなくなっ

た。まだ一人で生きていけるというには幼すぎる、というほどの年齢でもなかったが、充分とはいかなかった。
そんな状況で彼女は一人、泣くじゃくりながら街を彷徨っているうちに、ここスラム街へと迷い込んでしまった。

１７歳で美貌や体型も人並み以上はある女性。そして平和な生活を送ってきた彼女は、この街の住人にとってはただの無防備な自殺志願者のようにしかみえず、また襲う気がある人間にとっては鴨がネギをしょってきたような餌としての要素を充分以上に兼ね備えた存在だった。

間も無く5人ほどの集団に襲われたのも、もはや必然であるといえる。

彼女は必死に逃げた。
しかし、平和な環境で何一つ不自由なく暮らしてきた彼女にとって、この街での逃亡は想像以上に過酷だった。
そしてとうとう捕まった。
光るナイフを押し当てられ、これからどのような行為が行われるか。
ＴＶや雑誌で得た知識や想像力を働かしてみれば、それは想像するに難しくなく、また実際にその想像からそれほど外れてはいない出来事が待ち受けているのは明白な未来であった。

しかし、彼女は奇跡的にもその運命には導かれなかった。
たまたまその場を通りかかったディースに、その運命を変えてもらうことになったのだ。

以来、恩人ということを逆に押し付けられたような格好で住み込

みの看護婦兼家政婦のような形で、ここで一緒に暮らしているのである。

最近は、スラム街での常識や最低限の身を守る術も習得した。料理や洗濯、そして必要なものの買い物も、特に指示を出さなくても必要な時に必要な量買ってきてくれている。

男の一人暮らしはそういった部分で不精になりがちではあったし、現にディースの生活能力はそこまで高くなかったから、どうでも良さそうな部分や後で出来ることは後に回しがちではあったので、ディースとしては正直に言って助かる部分は多かった。

だが、問題はない訳ではない。

彼は過去に一人の女性と結婚を誓い合った。が、不幸な事故から死別していた。それ以来、女性を避けるように生きてきた。嫌いな訳ではない。苦手な訳でもない。だが、彼の心に住む女性は今のところずっと一人のままなのであったから、他の女性がそこに入ってくる、という事態を避けたかったのである。

しかし彼は冷徹ではあったが、ミントを無条件で投げ出す、という選択肢をすぐさま取れるほど非道でもなかった。

ある程度時期と状況が落ち着いた時、なんらかの形で別れようと考えていた。

ミント「夕飯出来てますよ。あと今日もお客はなしです。」

ミントはそういったものの、そんなことは言われなくてもディースには判っていた。

というのも、ミントが来て以来、この病院にお客が入ったことは

一度も無い。
治療をする場面は何度かあったし、ディースが医者としての腕を振るう機会や、ミントが看護婦として働く機会もあったが、正規の客であった試しは一度もない。というか、そのほぼ全てが無償に近い。
それも単にミントの人の良さが産んだ状況である。

ディース「そうですか。それで、電話の方は？」
ミント「はい。二件。名前はいつもの場所に。」
ディース「わかりました。電話が終わったら食事にします」

そういってディースは自分の部屋である書斎に入る。
そこで机の上に置かれたメモに目を通しつつ、もはや恒例になっている番号へと電話を掛ける。

ディース「もしもし、私ですが」
男『おお、ディースか。今日はな…』
ディース「はい、ええ。・・・わかりました。明日ですね、問題ありませんよ。それでは」

電話の男はいつもの依頼をディースに伝える。

依頼、それは仕事の依頼だ。
仕事の依頼といっても医者としての仕事ではない。
ディースが現在、生計を立てている仕事、それは『暗殺』であった。

通称『氷の暗殺者』。
捻りのないネーミングセンスだが、これが業界に広まっている彼の通り名である。

彼自体はこの名前になんとも思っていないのだが、いちいちそれを道場の看板かのように扱って腕試しをしてくるような輩や、この名前のせいで余計な戦闘を増やす事実などを考えると歓迎出来ない状況ではある。
無論、この名前だけで退いてくれる相手もいるのだが、そういった手合いは正直相手をしてもしなくても労力としては変わらないのだから困りものである。

この暗殺者としての仕事をしていることは、同居者であるミントも知っている。
無論、初めてその事実をミントが知った際には泣いて反論されたが、彼の目的や経緯を話した上で説得を試みたところ、渋々ながら承諾したのである。納得しなければ追い出す、という条件が一番効果があったように思える。

依頼を受けたディースは書斎を出ると食卓へ向かう。

ミント「また…お仕事？」

いつまで経ってもミントは仕事に対して話を切り出す際に変な間を置いて話し出す。
それはミントがこの仕事を嫌っていることに関係しているのは百も承知であった。

ディース「えぇ、明日。夜には戻ってきますよ。場所も遠くないですからね」
ミント「気をつけてくださいね」
ディース「わかっています」
ミント「大丈夫だとは思いますけど…。っと、冷めないうちにご飯にしましょう！」

ミントは気分を変えるかのように明るく切り出す。
そしてまた、いつものように他愛もない話をしながら夕食を食べ始めるのである。

## ００６　スラムの医師（後書き）

今回は短め。
次回更新との続き物という形になりますが、一緒にするとなんか不恰好なのでディースとミントの紹介回という感じです。

## ００７　竜堂奈々（前書き）

予定より遅れましたが第７話です。

## ００７　竜堂奈々

ーリティール　フランベルジュ特区　二番街　バルキュリアス大学構内ー

フランベルジュ特区。超一流の政界や財界の人々が住む特別区域であり、特区とされる所以でもある。

そんな特区の中にあるバルキュリアス大学。

無論、大学としては超一流であり、在学する生徒の卒業後は政治家や弁護士、科学者、文豪、一流アーティストなど、どれも一流、または華々しい生活を送ることになっている。

在学中はあらゆる施設で特別な扱いを受けることが可能であり、一般の人間が一生かかってもお目にかかれない機材を使った実習なども受けることが出来る。

そんな名門中の名門、一流の中の一流の学校へ通う一人の女性がいる。

名前は竜堂奈々。

年齢は２１歳。落ち着いた雰囲気と優しく礼儀正しい人柄。優秀な成績。そして綺麗な黒髪とその容姿。超、というほど美人ではないがそこがかえって人気の出る要素であり、大学の中でも上位にランクインされる美女として認識されている。

本人は全く気にしたことは無い。

しかし、家が極道を営んでいるという事情があり、男性が寄って

くることは殆どなく、寄ってきたとしても1～2日でその姿を消している。誰が消しているかはわからないが、曰く組長とその取り巻き50人ほどに囲まれるといった噂が現在の最有力説である。
そのせいか、未だに色恋沙汰の一つもまともに経験していなかったりする。

彼女の親友曰く、「それはそれで今後がおもしろい」とニヤニヤしながら語っている。

彼女にはもう一つ、一般の人では到底ついていけない秘密を持っていた。
それが「水を操る能力」である。

所謂、超能力であるのだが、一般にいう念動力や透視、テレパシーといったようなものではなく、それとはかけ離れた能力であり、俗な言い方をすれば「魔法」といってしまっても過言ではないものであった。

この能力に特に名前は決まっておらず単に＜能力＞と呼称されていた。

竜堂家では代々この水の能力を受け継いでいる家系であり、生まれた子供が男であろうと女であろうと最初の子供にその能力と家督を受け継ぎ、今日まで続いてきた家である。
そして奈々もつい一ヶ月ほど前にその能力の全てを受け継いだ。

何故、そのような能力が受け継がれているのか？という正確な理由は誰も知らない。だが、あるモノを守るため。ある人を守るため。という伝承は聞いている。

しかし、つい最近、その守るべき人は死んだ、という話を父から聞いていた。

―じゃあ、もうこの能力はいらないものなのかしら？―

そう思ったものの、すぐに

―いえ、でもまだ必要なもの―

と思い直す。

何故そう思ったのかはわからない。

必要だ、と何かが訴えかけてきたようなそんな不思議な感覚だった。

―っといけない、講義中だった―

ふと現実に意識を戻すと、こちらに注目が集まっているところだった。

丁度、教授にでも指されたのだろうか？

奈々「えっと…」

教授「竜堂くん、先程から呼んでいる。貴女の実家からのご連絡だそうです。」

教授の視線を辿っていくと、事務の女性が急いで！という感じで手招きをしている。

実際、授業中に実家から連絡があることなど今まで数えるほどしかなく、そのどれもが緊急の件であった。

奈々は急速に意識を切り替えると、荷物は何も持たずに飛び出していく。

事務員「竜堂さんね。お父様がお倒れになった、という連絡を受けました。至急実家へお戻りなさい」

事務員と顔を合わせるなりそう告げられた。
その瞬間にお礼をいう間もなく、走り出す奈々。

普段は能力を使った肉体強化などは封印しているのだが、今回の事態は今までの中で最大最悪の事態であったから、躊躇なく使用して走る。

大学のアイドル、竜堂奈々が人間とは思えないスピードで構内を駆け抜けていった、というのは後の伝説となる。

大学を出ても足を止めずに走り続ける。
普段歩きで大学まで３０分ちょっと。この強化状態で走り続ければ3分とかからないだろう。
ついでにこの状態でなら利用できるショートカットも最大限に利用することにした。
具体的にいうと垣根を飛び越えるものだ。

今日はロングスカートを履いていたため、そんなことをすれば大きくスカートがめくれ上がって中が見えてしまうだろうが、今はそれを気にしている余裕は無い。

思い切り飛ぶ。

やはりスカートがふわりと舞い上がり、その足、ふとももだけでなく、更に上の部分も露になるが、ざっと見る限り回りには誰もいないので内心安堵する。

そのまま走り続けると、公園に辿り着く。ここを抜ければ、この速度であと1分もかからない距離まできている。

だが、その公園の中心に長身の丸眼鏡をかけた男が立っていた。

―こんな時間にこんなところで？―

一瞬疑問が掠めるが、今はそれどころではないと無視して走り去ろうとする。

しかし、その男がすれ違い様に口走った言葉をはっきりと聞いてしまった。

男「　お父様は、残念でしたね　」

ズサーッ、という音と土煙とともに奈々の勢いは止まった。

奈々「貴方…何者？」

奈々は男の一挙一動をじっくりと監視する。

男「私ですか？私はディース・ラムレッド・グォーゼル。とある依

頼であなた方お二人を殺すように言われてましてね。今しがた、片方の依頼は終わったところですよ。」

その台詞に奈々は驚愕する。

奈々「倒れたって…まさか、貴方が！？」

ディース「フフフ。では、理解もしたことでしょうからもう一つの依頼。完了させていただきましょうか」

そうディースが言うや否やこぶし大ほどの大きさの氷が中空に現れ、奈々に向かって一直線に飛んでくる。

奈々「これは！？」

奈々はかろうじて避けるがそこへ新たに氷が飛んでくる。

ディース「避けられませんよ」

奈々「避けられないなら！！水牙！！」

奈々の生み出した水の牙が飛来する氷を打ち砕く。

ディース「ほぉ。なるほど。既に能力を継承していたのですね。貴女のお父上はその攻撃だけで息絶えてしまいましたから少々手ごたえがなさすぎたことが疑問でしたが…。しかし、その程度で引き下がるわけにもいきませんので」

そういってマントを翻すかの動作を行うディース。

それに合わせるかのように細かい氷が入り混じった強い風が辺りを襲う。

奈々「くっ、なんなの！？これは・・・」

奈々の目には１８０度どこを見回してもディースの姿が映っていた。

幻影術の類であるというのはすぐにわかるが、わかっただけでは対処しようがない。

奈々「どれが本物？」

ディース「そのまま幻影に迷って死になさい」

殺気が膨らんでくる。

奈々「だったらこうするまでよ！水龍陣！」

奈々の周りに水が集まり、その水が柱となって先端から龍が現れると、そのまま龍が奈々の周りをぐるぐると回り始める。龍に飲み込まれた幻影が次から次へと消えていく。

ディース「なかなかやりますね」

間も無く幻影が破られ本体が現れるが、そこに向けて龍がその口から超高圧の水を放つ。

ディース「さすがにあれをまともに防ぐのは愚策でしょうね、で、あれば」

迫る水流に慌てず右手をかざす。

ディース「この程度で押せている、などと思わないことです」

ディースの右手から薄い霧のようなものが発せられたかと思うと、それに触れた水がたちまち凍りつく。

奈々「なんですって！？」

水龍が全て凍りつく。

そしてディースが指を弾くと、全ての氷が粉々に砕け散った。

ディース「本来、こういう手は相手との力の差が大きくないと出来ないんですが…。まぁこれが今の実力差、ということですね」

全く余裕の表情を見せるディースに対して、奈々はどうすべきを考えていた。

奈々にとって能力者との対決は始めての経験であり、今まで戦ってきた悪霊や異形の生物などとは根本的に戦い方が違う。基本的な戦闘の心得は一緒ではあったが、実戦ではその状況を体験したことがあるかないかは大きなアドバンテージである。

明らかに奈々と敵対するディースはその道を何度も通っている人間だった。

そして追い討ちをかけるように絶対的な能力差をみせられた。

奈々自身、自分の能力には少々の自信を持っていたし、父から全ての能力を受け継いだことでちょっとやそっとのことでは負けることはない、とすら思っていたのだが、いきなりの強敵を前に為す術がなくなっている。

ディース「さて、今度こそ、覚悟していただきましょうか」

ディースが迫る。

じりじりと下がる奈々。

そこに。

フォンフォンフォンフォン

フランベルジュ特区の特殊警察隊が騒ぎを聞きつけてやってきていた。

ディース「ふぅ、ちょっと遊びすぎたようですね。時間切れになってしまいましたか。まあ、またどこかでお会いしましょう。それまでその命は預けておきます。」

そういうなり、彼はその姿を消すように去っていった。

奈々「一体…なんなの…」

全く訳がわからない。

父が何故殺されなければならないのか？そして何故、私まで狙われるのか？

数々の疑問が浮かんでは消える中、徐々に大きくなってきたサイレンの音に我に返ると、すぐさま当初の目的を思い出す。

奈々「そうだ！お父様！！」

奈々は再び走り出した。

奈々が家に着くと、竜堂家は大変な騒ぎになっていた。
奈々が帰ってくるのを発見した家政婦が急いで屋敷の中へ、と手を引く。

そして待っていたのは父の遺体であった。

奈々「お・・・とう・・・さ・・ま・・・・・・」

ガクリと膝を突く奈々。
その様子を悲痛な気持ちで眺める使用人や家政婦、そして組員達。

使用人「奈々様、お気を確かに…」
奈々「ええ、わかっているわ」
使用人「それと奈々様。翼様からこれを預かっております」

使用人が差し出してきたのは父の筆跡で書かれた手紙であった。

奈々「これはお父様の？」
使用人「そうです。つい先日、翼様より『私に何かあったらこれを奈々に渡せ』ということでお預かりした手紙にございます」

奈々はその手紙を受け取ると急いで内容を確認する。

〜　奈々へ

皆を残して先立つ私を許して欲しい。
きっと私は、これが読まれる頃には誰かに殺されているのだろう。
奈々よ、悲しむ気持ちはわかるが嘆いている暇はない。
恐らくもうすぐ、いやもうすでに始まっているのだ。戦いが。

同じ能力を持つ仲間を見つけるのだ。そして共に戦え。
お前なら、お前の力なら自分と同じような反応をもう見つけているはずだ。
そしてジョナサン・キャオ・マイロードという人物を探せ。
お前の助けに、そして全てを教えてくれるはずだ。
私にはこれ以上、お前にしてやれることはない。
後は・・・頼んだぞ。

奈々「ついに…始まったっていうの？」

語り継がれてきた守るモノの為の戦い。それが始まった。
その為に、むしろその為だけにこの能力は存在していたといっても過言ではない。
いつか、そしてそろそろ来る、と思われた戦いがいよいよやってきたのだ。

奈々「お父様…」

翌日、父である竜堂翼の葬儀が行われたが、奈々は参加しなかった。
奈々が次に父の亡骸の前に立つのは全てが終わってからだ、と決めたからである。家の他の者はその意見に誰も反対しなかった。むしろ翼様に良く似ておられる、と血は争えないものという認識を一層深めたのである。

そうして彼女は身支度を整えるとすぐさま家を出た。

―私と同じ能力を持った仲間を見つける…―

その仲間がどのくらいいるのか？そして見つけて誰と戦うのか？
一体何を守るのか？

何一つ明確ではないが、それを紐解く手がかりがジョナサン・キャオ・マイロードという人物であるという。

奈々は改めて覚悟を決める。
涙は昨日に置いてきた。
今は踏み出す勇気だけが必要だったのである。

そうして奈々は長い戦いの第一歩を踏み出した。

## ００７　竜堂奈々（後書き）

ようやく既に外伝で登場している人物、竜堂奈々が登場しました。
そしてようやくバトル展開が少しずつ出てくるようになります。

## ００８　姿無き暗殺者（前書き）

すみません、遅れました。
生活費を稼いでいたら時間がなくなっていた！！
という訳で８話目です。

## ００８　姿無き暗殺者

リティール　クェンペスト区中央部　スラム街

キィッ！

一台の車が寂れた道路の真ん中に音を立てて止まる。
ドアを降りて出てきたのは一人の少年。フォボス・ケープフィアーだった。

フォボス（ふぅ…あれからシドさんの命令でスラムを捜索しているが…）

フォボスは車に寄りかかる。

フォボス「今日も手がかりなし。シドさんの勘も当てにならないな。同志どころか敵の影も無い。」

フォボスはシドがほんの少し、スラム街で自分達に似た力の波動を感じたというので、あれ以来、任務の合間に少しずつ捜索を続けていたのである。
だが、既に幾度もの捜索を経ても進展はなかった。フォボス自身も口にしているように同志どころか敵になるような存在も発見できない。それどころか先日のシドの騒動のせいで、仲間だと思われているフォボスに対して人が現れてくれるようなことがない。あったとしても怯えすぎて話しにならなかった。

フォボス「そろそろココでの捜索も切り上げるべきですかね」

軽くため息をつくかのようにそう呟きながら車に戻ろうとしたその時、サイドミラーにキラリと光るナニかを見つけた。

フォボス「なんだ？」

一瞬で振り向き、そしてすぐその迫る物体に危機を感じて大きく車から距離をとる。

まさにその瞬間、フォボスの横を何かがすり抜けていった。

バゴン！！

その光は大きな音を立てて、車に着弾し、ドアに大きな穴を空ける。

フォボス「狙撃！？」

そう言った瞬間、　パキッ…パキッ！！バキッバキッ！！

目の前でナニかが命中した車がみるみるうちに凍り付いていく。

一瞬で車の氷の彫像が出来上がった。

フォボス「何！？凍りついた・・・だと！？」

ハッとして振り返るフォボス。

その予想を裏切ることなく、更に３つの光がフォボスに照準を合わせて迫ってくる。

フォボス「くっ！」

横っ飛びして転がるように避けるフォボス！

ガン！ドゴ！ゴガァッ！！

的を外した光は地面のアスファルトにめり込んだ。

フォボス「これは…飛んでくる光の正体は…」

パキパキパキッ！　パキィッ！！

あたり一面のアスファルトが凍りつく。

フォボス「間違いない、氷だ！！」

言って先程、氷が飛来してきた方向をみる。キラッ・・・光が１つ、２つ・・・キラッキラッキラキラキラキラキラ・・・。いくつもの氷が飛来してくる！

フォボス「ちぃっ！！」

完全に後手に回ってしまった状況に舌打ちしつつ、全力で走り出す。

それを追うかのように氷は次々とアスファルトに突き刺さり、辺りを氷の世界に変えていく。

ガシャアアァァァン！！

フォボスは無人の店のショーウィンドウをぶち破って店内へ逃げ込んだ。

フォボス「ハァハァ・・・。敵か味方かわからないが…。明らかに敵意のある攻撃をされている。ボクがこのスラムを調べていたからなのか？そうなると、やはりこのスラムに能力者がいる、というの

は間違いないということか…」

シドの勘は正しかった、と認識を改めて今後どうするべきか、そしてこの状況について頭の中を整理するフォボス。

そしてふと思い当たる。

フォボス（　！　まてよ…攻撃してくる、ということは自分の存在を他人にバラすことに？がる…今までのように姿を見せなければ良かっただけなのに攻撃を仕掛けてくる…ということは…）

ガシャアアン！　ガシャアアン！

まだ割れていないショーウィンドウも破りながら、再び氷の弾丸が店内まで飛び込んできた！

フォボス（間違いない！）

フォボスは店外へと飛び出し、再び走り出す。

ドガン！バキン！

まるで火山弾のように無差別に、そして恐るべき速度と連射性をもって氷の弾がフォボスを襲う。

フォボス（コイツ！！）

ビシッ！！

一発の氷がフォボスの肩をかすめる。痛みを感じる間も無く傷口

が凍りついた。

フォボス（ここで確実にボクを始末するつもりだ！！）

ドゴォ！ガキィン！

降り注ぐ氷をかわし、フォボスはビルの陰へ隠れる。

フォボス「はぁ…はぁ…。い、痛みを感じない…。キズを負ったというのに…」

フォボスは凍りついた自分の肩を見る。

命中した肩はざっくりと切れ、幸い骨には損傷がなかったものの、普通ならかなりの出血を伴うケガであった。

凍り付いているのだから、冷たいという感覚があってもよさそうなものだったが、痛覚どころかそういった感覚まで麻痺してしまうほどであるようだった。

フォボス（一瞬で、カスっただけでこれとは…。一体、どんな温度ならこんなことが出来るんだ！？）

そんなことを思っている間にも、隠れているはずのフォボスの目の前に氷がマシンガンのように降り注いできた。

フォボス「くっ！？」

慌てて走り出したものの、この不利な状況に焦りを隠せない。

フォボス（見えている！ヤツはボクの動きが見えている！！ドコだ！？ドコにいる？）

ガキィン！ドガァン！

おおよそ氷が降ってきたとは思えないような音を立てて次々と降り注ぐ氷弾。

フォボスが走りながら、自ら走ってきた道を振り返るとそこは一面の銀世界だった。

キランッ！

遠くの空が光った。

スラム街の外、超高層ビルの立ち並ぶ都市の空。

ビシッ！

一発の氷がフォボスの右腕を掠める。

右腕を代償にしながらもフォボス　相手の狙撃ポイントを確認することに成功した。

フォボス「くっ、超高層ビルからボクを狙撃しているのか！？」

キラン！キラン！

フォボスの頭部を狙った容赦の無い正確な狙撃。

だが体勢を崩しながらもかろうじてフォボスはそれをかわす。

氷はマトを失い、フォボスの背後の看板に突き刺さり、そして瞬時に凍りつく。

フォボス（くそっ！！これじゃあ闘いようが無い…距離が遠すぎる！…とにかく今はなんとか逃げなければ…）

フォボスの能力は遠距離、ましてや超遠距離の狙撃を行う相手とまともに戦うには相性が悪すぎた。彼の能力がまだ発展途上にあり、そのすべてを使いこなせていないとはいえ、この距離では分が悪すぎる。

フォボスは一先ず身の安全を確保する方法を模索し、辺りを見回す。

闇雲に逃げ回っていては体力が持たない。冷静に状況を整理し、狙撃している相手から逃れるか、相手を倒すかの選択をしなくてはならないと考えていた。

焦るフォボスの目に、マンホールが入ってくる。

フォボス「マンホール…下水か！」

フォボスはマンホールを能力を使って蹴り破り、そのまま下水道へと飛び降りた。

―　同時刻　某ビル屋上　―

「ほう、下水に逃げ込みましたか」

男はスッと眼鏡の位置を直す。

「頭を使ったようですが無駄ですよ。絶対にしとめます。今見つかるわけにはいかないんですよ。このディース・ラムレッド・グォーゼルの目的を果たすためにね」

ディースは遠く、下方に見えるスラム街を見下ろしたまま、静か

に笑みを浮かべた。

## ― スラム街　地下下水道 ―

フォボスは汚水の流れる下水道をコツコツと歩いていた。正確には濡れた足場であったこともありピシャピシャであるが。

長年手入れも入っていない場所のようで、あちこちにネズミが這い回り、汚物の固まったものや汚水などで、下水道は表現しがたい悪臭が漂っていた。

フォボス（くそっ！！このボクがこんな汚らしい下水を歩くことになるなんて！！）

地上での逃走劇と、下水を歩き回っているせいもあって、フォボスの着ていた学生服はぼろぼろで、ズボンは汚水があちこちに付着している。

肩と腕の氷はうっすらと溶けてきているのか、水が垂れるようになってきていた。それと共にじわじわと痛みと冷たいという感覚も戻ってくる。

フォボス「シドさんの勘は当たっていた。だが、これは同志なのか、それとも…」

そういって壁にどっと寄りかかる。

背中が更に汚れてしまったが、ここまで汚れているのだから今更気にする必要もない。それに座り込む訳にもいかなかったので、寄りかかりでもして休まないと体力が持ちそうにないということもあ

った。

フォボス（それにしても氷での狙撃とは…。単純だが…それ故に対策が難しい。能力自体もかなり強い。）

まぁボクほどではないけどね。と、フォボスは本気で思っていたのだったが。

フォボス（とにかく、あの遠距離だ。仮に同志であったとしても探索能力が低いのならばこちらが同志であるかどうかもわからないだろう。逃げるにしろ、戦うにしろ、一度近づいて敵か味方かの判別をしないことにはシドさんに報告なんて出来ない。役立たずの烙印を押されたくはないからね…。まぁ味方であれば話は早いから…、そうであることを祈るしかない）

呼吸を整えながら、下水を抜けるか一度ここでやり過ごすかを真剣に検討し始める、が。それもすぐに終わった。

ガゴオオオオオオン！！ドシャアアッ！
ドゴオオオオオオオン！！バシャアアッ！

何かが落ちてきたような凄まじい音が下水に響き渡る。
ハッとして、音の下方向を見る。
音は二回。
そして、遠くに見える光の差した天井の２つの穴。

フォボス「なん・・・だと・・・！？」

その事実から思い浮かぶ可能性を考える。
フォボスの頬を一筋の汗が伝う。

パキッ！パキキキキキ！！

下水の水が凍り付いていくのが見えた。

フォボス「まさか！？地面を突き破ってきただと！？」

その声を合図にするかのように、

ドゴォォォォォォン！！バシャァァァァァ！！

今度はフォボスのすぐ横の天井が崩れ、大きな氷塊が落ちてきた。

フォボス「この下水ごと攻撃を仕掛けてきているのか！？」

フォボスは考える暇もなく一気に走り出す。

バゴォォォン！！ドバシャァァァン！ドゴォォォン！！バシャァァン！

フォボスの背後には次々と地面を突き破った氷塊が落ち、そして周辺を凍りつかせていく。

フォボス（なんて攻撃だ…。この状況…少しマズイな）

フォボスは少しマズイと内心で表現していたが、それはプライドの問題でそう表現したのであって、現実の状況は最悪と言っていい。そしてそれはフォボスも感じている事実であった。だが、彼はそれを思いもしないようにしている。それがフォボスのフォボスたる所以であったからだ。

走り続けるフォボス。
この状況では、狙撃手の射線がわからないため、下水に降りたのはかえって失敗と言わざるを得ない。

ドゴォッ！ドゴォ！ドゴォッ！

フォボスの前方に３つの氷塊が落ちてくる。いや、正確には地には落ちず、地表より少し浮いていた。
３つの氷塊は自らが開けた天井から射す光で幻想的な輝きを放っていた。

フォボス（なんだ？・・・浮いている？）

ドゴォッ！ドゴォ！ドゴォッ！

今度は背後の天井を突き破り、３つの氷塊が落ちてきた。
前方のものと同じように、完全に落ちきらず、微妙に浮いている。

フォボス（しまった！？）

氷塊がククっというわずかな動きをみせる。まるで標的を見据えるかのように、フォボスに対して方向を定めたように見えた。

フォボス（挟み撃ちか！！）

そう思った瞬間、静から動に転じる氷塊。
つい先程まで静かに幻想的な光を放っていた氷塊が一瞬で凄まじいスピードをまとい、フォボスに向かって突進してきていた。

フォボス（かわせない！？　イケるか？今の能力で・・・）

能力で生み出されたものとはいえ、氷である。
炎や風などの実体のないものは難しいかもしれないが、氷は確固たる物体であるため、彼の能力で対処出来る可能性はあった。だが失敗すればタダでは済まない。しかし、現状は四の五の言っていられる状況でもなかった。

一瞬で覚悟を決めたフォボスは、能力に精神を集中させる。

フォボス「はあああああっ！！」

シュワアアアアアアンン！！

フォボスの叫びと同時に、目に見えない何かが辺りを吹き抜ける。
するとフォボスの周りにいたネズミや害虫はみるみる溶けて…いや、消滅していく。
まるで風に吹かれた砂のようにサアッと消えていったのだ。
同時にフォボスに迫った6つの氷塊も、同様に一瞬で掻き消えていた。

フォボス「土壇場でどうにか上手くいったか…。ふぅ・・・どうやらまだ成長の余地は充分にありそうですね、ボクの能力は」

自らの能力の高い有用性と、強力なチカラを改めて認識し、フッと笑うフォボス。
だが、その笑いも自らの能力に対する高揚感も長くは持たなかった。

ガガガガガガガガガガガガガガガアアアアアン！！！

フォボス「なっ！？」

フォボスの頭上の天井を突き破り、無数の氷弾がフォボスに降り注いできた。

フォボス（しまった！？ハメられた！？）

ディース（かかりましたね）

フォボスは６つの氷塊が囮であることに気が付く。

時を同じくしてディースは笑みを浮かべる。

本命はこの氷弾であった。

氷弾は氷塊に比べて威力が劣る。そのため、さすがに地面を突き破るにはそれなりの時間と手間をかける。氷塊は威力は勝るものの、コントロールはやや大雑把にならざるを得ないし、連射するには大きくチカラを使ってしまう。

ディースは６つの氷塊を囮に使い、それらが地面を突き破る轟音などを利用して、その間にフォボスの頭上の地面を氷弾で削り、氷塊が防がれるなどした場合、一気に頭上から氷弾を打ち込んでトドメを刺す準備をしていた。

仮に氷塊でトドメをさせればそれでよし。氷塊が囮だとバレてもリスクはない。強いて言うならこちらの能力を使った分が無駄になるというところだが、そもそもかなり遠距離からの攻撃であるから、最悪、ディースが能力を使いすぎたりして逃げることになっても充分に余裕をもって行動が出来た。

そして結果はディースが予想した通り、フォボスが氷塊を退けて、その油断した隙を狙うことが出来たのである。

無数の氷弾が降り注ぎ、辺りを破壊し、氷付けにし、そしてフォボスも傷つけていく。

なんとかとっさに能力で身体をカバーすることに成功したものの、氷がぶつかるという物理的な衝撃に対して完全に威力を殺すことは出来なかった。しっかりとガード出来ていれば、一発の威力が低い分、ダメージはかなり軽く出来たはずだったが、気を緩めていたせいで本来の防御性能の半分も出し切れていない。氷付けにならない、ということと、即死しないというだけまだマシというような状態であった。

バキッ！！

フォボス「ぐあああああっ！」

避けることも、ガードも間に合わなかった氷弾がフォボスの頭に直撃する。

フォボス「うぐっ！」

フォボスは数m吹っ飛び、氷付けになった汚水の上に倒れこんだ。能力のガードがあるおかげで頭が吹っ飛ぶような事態にはならなかったが、頭部は傷つき、そこから流れ出た血が額へ、そして頬へ。ダラダラと流れはじめる。

フォボス「く・・・う・・・ハァッ！ハアッ！」

普通なら脳震盪でも起こすか気絶してもおかしくないような衝撃だったが、なんとか気合で持ち直し、四肢に力を込めてグッと立ち上がる。

フォボス「くそっ、やってくれる・・・」

フォボスは激痛に顔を歪めながら、ギリッと歯をかみ締める。

フォボス（このボクがここまでいいようにやられるなんて…くそっ！！面と向かって闘えば絶対に負けはしないのに！！くそおっ！！）

フォボスはその怒りを能力に向けて自らの守りを固める。
そして頭部の激痛と全身がズキズキと痛む状態で、満足に走れてはいないものの、それでもなんとか走りながら氷弾を逃れる。

ドゴオオオオン！！バシャアア〜〜〜ン！！

その移動をディースも察知してか、更なる後詰めとして氷塊を落としてくる。

フォボス（トドメをさすつもりか！！）

氷塊が地面を突き破る音が徐々に大きくなっていく。
それは少しずつフォボスの死期を知らせる音かのように、徐々に、徐々に近づいてくる。

フォボス（逃げ切ってみせる。絶対に。この事をシドさんに知らせるために・・・。そして何より・・・ボクをココまでしたヤツに相応の報いを与えてやる！敵なら真っ先に殺してやる！もし味方だったとしても…使命が終わった後に…殺してやる！ボクのこの手で…絶対にな！！）

怒りに燃えるフォボス。

冷静にトドメを刺しにかかるディース。

勝利の女神、または運命の女神はどちらに微笑をかけるのか。
この時、二人は、それぞれの未来の姿など想像すら出来ていなかった。

## ００８　姿無き暗殺者（後書き）

バトル展開は戦いモノの小説での読みどころの１つであるはずですが、非常に苦手です。
今回のパートもメインは私ではなく、もう一人の著者によって書かれたものです。
掲載にあたって説明不足なところなどを私のほうで補足・修正しています（それでもまだ不足しているところはありそうです）。

これから徐々にバトルパートも増えていきますし、登場人物の増加や能力の増加などに伴い、過激になっていくので、こんな文章ですがご期待いただければと思います。

## ００９　原子を操る能力（前書き）

第９話で本パートを７０％近く書き直しました。
原本を書いた時代が高校生だったとはいえ…ちょっと無茶がありすぎました。

## ００９　原子を操る能力

次々と降り注ぐ氷弾。それらは徐々に、獲物を追い詰める狩人のように、フォボスのいる場所に近づいてきていた。

フォボス（居場所がわかっているにも関わらず、ゆっくりと着弾点を近づけてくるなど…なぶり殺しにでもするつもりか！？明らかに遊ばれている…くっ！！）

ディースとしては、フォボスの能力がわからない以上、うかつに勝負を一気に決めるような真似をして未知の能力で反撃される可能性に足を突っ込むのは、あまり良い手段であるとは判断出来ず、今のところ反撃の可能性がなかった従来の手段を取り続けた上で、心理的・肉体的に追い詰めて確実にトドメをさせるようにすることが望ましいと考えていた。

この方法の欠点は時間がまだ少し掛かってしまうことと、逆に追い詰めることにより、窮鼠猫を噛む、といった状況を生み出してしまう可能性が出てくることではあったが、距離のアドバンテージと、氷塊を消しさったフォボスの未知の能力が連発できるものではない以上、最悪でも負けない戦いにすることは可能であると考えていた。

だが実際にディースはそのように考えていても、肉体的にも精神的にも追い詰められている上に、まだ見ぬ相手に対して怒りと憎悪の感情を強く抱いているフォボスとしては、姿を一切見せず、一気にトドメを刺しに来ることもしない敵が自分を過小評価し、彼曰く、『ナメた戦いぶり』をしているようにしか思えない。

フォボス（ふざけやがって！このボクを見下しやがって！！）

今、フォボスの心は怒りと憎悪だけで満たされていた。だが、それとは別に冷静な感情が語りかけてくる。

『どうすればいい？』

フォボスはプライドが高く、尊敬するウォンとシド以外は自らより下の立場の人間、能力者だと考えているような少年だった。それは彼が元々能力に目覚める前の家庭環境がそうさせた部分もあったし、能力に目覚めてからはその能力の特殊性と強さによって増長させてきたといえる。

しかし彼はそういった部分を抜かせば非常に優秀な部類に入る人間だった。感情を隠さない幼さはあるものの、感情に振り回されているように見えながらもその間、内心では物事を冷静に判断出来ていた。

彼を知るものは『それ故に性質が悪い』、と評価する。

フォボスは感情を顔に出してはいたものの、短気になることはせず、痛む身体に鞭を打ちながらも氷弾から逃げるようにして走り出す。

何をするにしても一度、距離と時間が必要になる。そう考えた結果だった。

フォボスは走りながら、生き残るために必死に考える。

どうすれば生き残れるか？どうすれば相手に一矢を報いることが出来るか？

考えた結果、良い案は浮かばない。

考えてみればこのスラムで遠距離からの狙撃による正確な攻撃と

いうのはこちらの位置情報を常に把握している。尚且つ、明らかにスラムの地理を理解していると考えられる。　つまり、体勢を立て直すような隙が出来るような場所にいかせてもらえないことは明白なのである。これは逃げるようなルートも選ばせてもらえないということが容易に想像できる。
　実際、今まで逃げてきたルートを思い返せば、初撃から足である車を潰し、その後もスラムの奥へと誘導するように攻撃されていたように感じられる。

　フォボスの選択肢は最早、どうにかして敵の攻撃を止めるか、敵を葬り去るしか残されていないのである。

フォボス「氷塊の時に発生した効果を一定時間だけでも制御できれば…」

　フォボスの能力、それは原子を操作する力である。
　この世界を構成する要素として原子という単位が存在するのは周知の事実である。フォボスはこれを自由に操作することが出来るのだ。基本的な操作事項は分解・結合・消滅である。その中でも難易度が高いのは消滅。先程、氷塊を消し去ったのは消滅の力である。

　氷塊を崩すだけであれば分解という手段もあるが、分解はある程度時間が掛かってしまう。原子レベルからの分解であるために、対象が大きければ大きいほど、結果に？がるには時間が掛かってしまうのだ。
　氷塊にしても氷弾にしても、速度が凄まじい。その速度のせいで時間のかかる分解では、分解が成立する前にこちらに届くことも考えられたし、氷弾は氷塊よりも更に早く小さくため、分解する原子を把握する前に仕留められてしまう。

その為、分解という手段は現状では取れなかった。

消滅の場合、原子そのものを消し去るから、物体がなんであろうとも関係がなく、大きさも関係ない。ただ分解に比べて発動してしまえば効果が一瞬であるし、発動さえさせれば分解よりも手間が掛からない。反面、制御が難しく、一歩間違えば自分ですら消滅してしまう可能性があった。加えて能力を使う際に消費する体力や精神力が分解と比べてかなり大きい。無駄には使えない。

フォボス『炎でも生み出す能力であればこの場を切り抜けるのは難しくないだろうが…単純すぎる発想だな…ん？』

その単純すぎる発想に、フォボスの中で何かが引っ掛かる。

そして瞬時にその回答に至ることが出来た。

フォボス『原子を操る…ということは出来るのか？』

可能性としては出来ると考えるが、前例がない試みがこの土壇場で上手く使用出来るのか？そしてそれはこの現状を打破する手段になり得るのか？やってみないとなんともいえない博打といえる内容であった。

フォボス「賭けてみるか…」

フォボスはそう言い聞かせるように呟く。

賭けというものの、彼自身は自分の才能と能力に絶対の自信があった。だから失敗する不安というものはない。

フォボスは持てる残りの全力を、その博打の準備に賭けた。

走りながら能力を集中し、その制御に回す。

フォボス『・・・・・・・・・出来たか！！』

思いのほか簡単に、そして短時間で出来たことに少々驚きつつも、フォボスは自らの咄嗟の思いつきと、それを実行した自身の能力を高く再評価した。

フォボス『ハハハッ、やはりボクは常人とは違う。このチカラがあれば…無敵だ！』

フォボスが自画自賛する間に、氷塊と氷弾がもうあと少しのところまで迫っていた。

だが、既に準備を終えたフォボスに最早焦りはなかった。

フォボス「さあ、反撃開始だ！」

フォボスがその手を氷の群れにかざす。

特別、目に見えるような効果はない。だがそれは確実に効果を示していた。

ジュウウウウウ

焼けるような音が聞こえる。

その音を聞いてフォボスは成功を確信する。

既にフォボスの視界の先は揺らいでいて、陽炎が立ち上っている。

その陽炎が立ち上るエリアに氷弾や氷塊が突入すると、瞬時に溶けて消えた。

フォボスはそのエリアの拡大と維持に能力を回す。

フォボス『維持も拡大もそこまで苦ではない…。氷はとにかく凌げたか。あとはこの隙に…』

そういってフォボスはようやく得た時間とチャンスを無駄にしないために、次の策を考えるのであった。

一方、ディースは少し遅れてその異常を察知していた。

ディース「これは…氷が届いていない…？打撃で壊しているような感じはありませんね…。やはり相手の能力がわからない、という状況は戦いになる前になんとかしないといけませんね」

如何に戦いに慣れているディースとはいっても、何も情報がなければ場当たり的な対応が多くなってしまう。無論、その対応が下手をうつ可能性は、今までの蓄積された経験と磨かれた技術と能力で限りなく少なくなっているが、未知の能力をもつ相手との戦いでイレギュラーな可能性を考慮しなければならないのはリスクが高い事項であるといえた。

ディース「このまま見逃すことは避けたい事態でしたが…。少し慎重すぎたのが私のミスですね。一度退くことにしましょう。プランも立て直さないといけません」

ディースは決着を即時つけなかったことに対して素直にミスと認める。

一時退却する隙をついて相手に逃げられ、自分の存在が発覚する、というのは現状では非常に避けたい事態ではあったが、このまま戦

って再起不能になる可能性も考えられないことではない以上、プランを変更して目的を達成することに決めた。
元々、運悪く早期に見つかってしまう可能性も考慮して多数のプランを用意していたディースにとって、この状況は悪い出来事ではあったが、最悪であることはなかったから変更する決断は素早かったのである。

ディースはそうした判断に意識を割いていた。そしてその時間、わずか数秒の間にフォボスを見失ったことに気が付く。

ディース『やれやれ…ここにきて私が動揺してしまっているようですね…。一度のミスだけならまだしも、二度のミスを犯すとは…』

そう思いながらも足は早々にこの場を立ち去ろうと歩き出す。

１０数歩、彼が歩みを進める。

ドォォォォォォォォン！！

爆音が先程まで彼がいた位置に響いた。

その数秒後に、狙撃手の彼から見れば獲物であった少年、フォボスが立っていた。

フォボス「こうも好き勝手にこのボクがやられるとは…。貴方が同志であるというのは残念でなりませんね」

フォボスは怒りに顔を歪めながらそう言った。

同志だから殺せない、そういう意図で言った台詞ではあったが、先程の爆発は殺すつもりの威力があった。フォボスにしてみれば、それで死んでも事故で済ませるつもりであったから。

ディース「今の爆発は…貴方の仕業でしたか。同志…というのは私にはわかっていましたよ。攻撃出来る範囲の能力者探索は可能ですからね」

淡々とディースは言った。

彼の言う能力者探索とは、能力者の波長を調べるようなものである。

どんな能力者であるかはわからないが、能力者であるかどうか、その能力者が自らの波長と同じものであるかどうかがわかる、という程度のものである。

能力者は全てこの能力を保有している。だがその範囲は能力者それぞれで違い、広範囲を探索出来る者もいれば、近寄らないとわからない者もいる。今回はディースは前者であり、フォボスは後者であった。

フォボス「同志とわかっていた…だと！？それならば何故攻撃をしたんだ！！」

自分に散々苦渋を舐めさせた相手であることもさることながら、同志とわかっていながら攻撃した事実に対して淡々と語るディースの態度にフォボスは怒りを露にした。

ディース「それは私が謝罪しなければならないようですね。ここでこうして話し合いをしている以上は」

フォボス「どういうことだ？」
ディース「前に来ていた…貴方の仲間でしょう？銀髪の青年です」
銀髪の男と言われれば一人しか思い浮かばない。
フォボス（シドさんのことか）
ディース「彼がスラムの掃除をしている様子を拝見していましたが…。あれはどうも話がわかる男と判断できませんでした。あの暴れようでしたからね。」
フォボスはその場に居合わせてはいないが、別の現場でシドの狂気とも言える暴れぶりはよく知っている。確かにシドをみたのが暴れている現場だけであるのならば、理性的な会話が出来る相手に見えるか？と問われると難しいと感じてしまう。
ディース「ですから仲間であると思われる貴方もそのクチなのかと思いましてね。先手必勝という手段を取った結果です。」
フォボス「勘違い、ということか？」
ディース「はい。」
フォボス「しかし同志であれば攻撃をする必要はない。今までのように隠れていればよかったんじゃないか？」
当然の疑問をフォボスは口にする。
ディース「私は同志として、その使命の達成に協力します。ですがプライベートなこともあって現状は協力することが難しい。暫くの時間を頂きたいのです。」
ディースの返答は、全くフォボスの疑問に対する答えになってい

なかった。

フォボス「それとこれがなんの関係がある？」

ディース「先程の話に戻りますが、私は貴方達が理性的な話に応じる集団ではなさそうだ、と判断していました。そんな集団に勧誘された時、私が個人的な事情で同行することを拒否した場合、殺される、という可能性を考慮しない訳がありません」

ディースがどこまで暴力的かつ短絡的な集団を想像していたかはわからないが、単にシドが暴れまわる現場だけを見て、その背後の集団全てを同じような狂気を持つ人物と判断したのであれば、確かにその可能性を考えるだけの余地はあった。

フォボス「・・・ひとまず事情はわかった。完全に納得した訳じゃない。この件は報告させてもらうぞ」

ディースの話を全て鵜呑みにする訳にもいかなかった。はっきりとはいえないが、ディースには隠していることが多数ある、そんな感覚をフォボスは持っていた。

ディース「いいでしょう。ですが一つだけお願いを伝えてください」

フォボス「・・・・・・なんだ？」

ディース「私はすぐには貴方達と行動を共にすることは出来ません。私の用事が終わりましたらこちらから出向かせていただく、と」

フォボス「いつ終わる？」

ディース「そうですね…。早ければ一ヵ月半、遅くても三ヶ月以内には」

現在予定している計画を記憶から呼び出すフォボス。

ディースから告げられた期間、ディースがいなくても支障はない

と判断出来る。元々、その程度の期間が能力者探索に割り当てられていたこともある。

フォボス「わかった。伝えてやる」

ディース「助かります。改めて今日の非礼はお詫びします」

そういって頭を下げるディース。

はっきりいってその程度ではこの屈辱を受けた借りを返すほどには至らなかった。

が、今この場でそれをどうこういって話をこじらせることは避けたいところであった。

既にフォボスの体力は限界に近くなっていたのである。まだ少しばかりの余裕はあるとはいえ、戦闘行為になるようなことがあれば１０分と持たない。

ディース「ところで…先程の私の攻撃を無効化したお手並みはお見事でした。あそこまで綺麗に無効化されたのは初めてですよ。どのような手段をとったのですか？」

その言葉に当然だ、とばかりに鼻を鳴らすフォボス。

ディースの問いに答える義理はなかったのだが、同志であるということと、見事なお手並みという言葉に自尊心をくすぐられた結果、答えた。

フォボス「ボクの能力は原子を操る。だから原子を振動させることで空気の温度を上げて高熱の空間を作っただけだ」

原子という言い方、原子を操るという言い方をしているが、実際にフォボスが操れるものは原子に限定されない。分子や素粒子とい

ったものも扱うことが出来る。原子といっているのはフォボスが最初に操れる具体的なモノの名前がそれであったからであり、その後、実際に原子だけが能力の対象ではないと気が付いても、それらをまとめてなんという表現、用語にしたらいいのか散々迷った結果、結局は原子という言い方に統一していた。

ディース「ほう。それだけの能力を持っているとは…私では一筋縄でいく相手ではなかった、ということですね」

フォボス「当たり前だ、ボクの能力が完全になれば誰よりも強くなれる。お前程度なら簡単に殺せるようにな」

フォボスはそういいながら自分でも無意識のうちに口の端に笑みを浮かべた。

ディース「それはなんとも頼もしい。貴方が同志で助かりました。」

フォボス（フン、本当に命拾いしたな…。）

フォボスは自分の今の状態を棚に上げて、心の中でそう思っていた。

ディース「それでは、私は戻ります。何か特別な連絡があればスラムで医院を開いていますからそこにきてください」

そういうとディースは足音も無く、その場から去っていった。

フォボスはそれを見届けるとゆっくりとその場に座り込んだ。

フォボス「少し…休んでから報告に行こう」

それから実にたっぷり6時間ほど彼はその場で熟睡してしまって

いたのだった。

ディース（まだまだ坊やですね。多少おだてた程度で自分の能力のタネを簡単に明かしてしまうとは…。私は氷を撃ち出していただけに過ぎないというのに。確かに貴方の能力は強力ですが…。闘いとはそういった能力の優劣だけで決まるものではありません。次に闘う事になれば…死ぬのは貴方ですよ。油断しないことです、フォボス・ケープフィアー君）

## ００９　原子を操る能力（後書き）

原本では核熱を利用する感じで書いてあったのですが、原子などを操れる、とはいっても常時自分の周りに核熱を用意するというのはあまりに突拍子もない。
昔の私はどう思ってその展開を良しとしたのか…。

正直、熱振動による解決も、実際問題としてどうなのか？とか思ったりもしましたが、核熱よりは現実的に無理のない話にはなったんじゃないかな、と思います。

## ０１０　デストロイヤー（前書き）

ようやく１０話達成です。
だんだん加筆修正が多くなってきました。
中盤に行く頃にはなんか別物になっていそうな気がします。

## 010　デストロイヤー

ロムディート区　とある所。

森林と巨大な壁に囲まれた広大な土地。
この場所は公式的には地図に載っていない。そしてそもそも森林や、その中に建物があることも「ないこと」になっている。

この場所はＳ・Ｗ社に次ぐ大会社であるＪ・Ｊ社の社長、ジョルノ・ジョバーナの屋敷である。
表向きは単なる総合商社であり、経歴に不振な点や現在に渡るまで目立った汚職など（稀に社員の横領事件などが発覚していたが）発生していない清廉潔白な会社として世間には認識されている。
販売する商品の性能は他社と比較するとやや落ちる点は見受けられるものの、アフターサポートなどの信頼性では他社を大きく引き離してトップに立っている企業である。
そんなＪ・Ｊ社であるが、裏では到底表の事業内容が想像つかないようなものを生産・取引している。
その主力商品は「デッド・ラウンド」と呼ばれる、所謂、麻薬である。デッド・ラウンドは非常に依存性が高い。禁断症状を引き起こしてもなお、デッド・ラウンドを投与しないと全身から血が噴出し、それでも何故か死には至らず、禁断症状による精神的な苦痛と、血が飛び出した傷による痛み、肉体的な増強による身体の激痛などで苦しんで苦しみぬいた挙句、ようやく死に至るという恐ろしいものである。
この麻薬は一般人に流通するようなものではないから、一般人はこの麻薬の存在を知らない。この麻薬の効果が一般向きではないからでもある。
効果は「強力な催眠効果と、人間の限界性能を引き出す」といっ

たものだった。
容易に想像できることであるが、これは軍隊やテロ、宗教といった分野で大変人気のある麻薬となっていた。何しろ催眠で難しいとされている死ぬことそのものを指示出来るほどに強制力の強いものであるからである。
稀にお金とヒマを持て余した富豪が、街の少女などに飲ませて奉仕させる、といった話もあるくらいのものである。当然、その少女は飽きられれば棄てられ、そして悲惨な末路を迎えている。

このような麻薬を生産・販売するのがＪ・Ｊ社の真の顔である。
その他にも兵器や武器は勿論、身寄りのいない子供の売買までしている。
表向きに存在する企業は『裏の稼業の副産物』に過ぎなかった。

このデッド・ラウンドが販売軌道に乗ってから、ジョルノは大きなチカラを手にしていた。
一説にはこの時のジョルノの一声で簡単に兆単位のお金が動き、国レベルが傾いたり、新たに興されたりするような影響度があったという。

だがこれは彼の不幸でもあった。
そんな薬が出来てしまったが為に、出来たからこそ得たチカラであったが、それは大きすぎた。

それは彼の死期を早める結果にしかならなかった。
そして、今、その死期が『文字通り』ゆっくりと近づいてきていた。

「まだか！まだ侵入者を始末できんのか！？」

限られた者しかその存在を知らない巨大な屋敷の、更に限られた者しか知らない地下シェルター。

そこにジョルノ・ジョバーナはいた。

２０名ほどの精鋭を集めた彼直属のボディーガードが見守る中、ジョルノはイライラとシェルター内を歩き回っている。

ジョルノ「くそっ！ウォンめ！！あの青二才がぁぁっ！！このワシに牙を向くとは・・・」

ジョルノは激昂しながらギリギリと歯を噛み締める。

彼は部屋の往復を繰り返しながら、時折大声を上げて指示を飛ばし続ける。

そう、彼は今、窮地に立たされていた。

ージョルノ邸　巨大庭園ー

「第一部隊！大丈夫か！？応答せよ！！」

黒服の男がマシンガンを片手に、胸元につけた小さなマイクに叫ぶ。

『ガガッ！！　だ、ダメだ！わ・・・わからない！！何が起きているのか！！浮いて・・・つ、潰れて・・・に、に、人間じゃ・・・ないっ！！ヤツは！！ヤツはっ！！ひっ！！！ギャアアアアアア！　ブシャァァァァッ！　ブツッ』

イヤホンからは悲痛な返答があったと思った途端、怯えた声と共に通信は途絶した。

「やられたのか！？２００人からなる第一部隊が…」

通信を担当していた男は愕然としていた。

２００人、と一口にいうものの並みの２００人ではなかったはずだ。軍隊レベルと同様、またはそれ以上の訓練を潜り抜けてきた猛者たちであったし、装備も軍隊を超えるレベルのものが至急されているはずだ。黒服の下に着込んだ防弾ジャケットは最新モデルのショットガンのゼロ距離射撃すらも防ぎきれるもののはずである。もっとも、凄まじい衝撃は伝わってしまうし、その結果、内臓破裂などで死亡する可能性は否定出来ない。しかしそもそもゼロ距離射撃を受けてしまうような状況を作り出すほど愚かな人間はここにはいないはずだ。

（だが・・・ここは大丈夫だ！俺達の第二部隊は３００人で構成されている。『たった一人』の敵にやられることはない。相手も消耗しているからな。・・・屋敷に侵入、いや・・・生きて帰れることも出来ないだろう。）

黒服の男はそう思っていた。

だが現実は非情である。

「う・・・うわ・・・」

「うわあああああ」

「な、なんだコレ、おいっ！」

庭のあちこちから声があがった。

その声を耳にし、振り向いた黒服の男が見たものは…宙に浮かぶ仲間達の姿だった。

「な、なんなんだ…？浮いてる？一体…」

自分達に起こっている出来事が全く理解できず呆然とする男達。
次の瞬間、

グシャッ！
メキ！メキ！ベチャアッ！

宙に浮いていた男達は鈍い音と共に、潰れ、飛び散った。

「うわあああああああっ！？」

鍛えた屈強な男達は情けない悲鳴をあげる。
不可解な出来事、そしてそれを理解出来ないうちに、唐突に撒き散らされた大量の死。目の前で起こっている事実とその惨劇の内容。
どんな強固に身体を鍛え上げても、この事態は彼らをもってしても恐怖を覚えるしかなかった。

そして、その雪のように舞い散る人間だったものの成れの果ての中、ゆっくりと、ゆっくりと近づいてきていた。

その近づいてくるモノが何なのか？それを判断するよりも早く、本能で黒服は叫んでいた。

「うてっ！！うてええええええっ！！」

あらん限りの声を振り絞って叫ぶ。

ガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガ

数百人から放たれた銃弾は数千以上。そしてマシンガンから放たれている銃弾は更に秒が経過するごとに増加していく。

だがその弾が、本来期待される威力を発揮することは無かった。

あたらなかった、というより届かなかったというべきだろうか。

放たれた弾は全て、相手に当たる前に地面に落ち、生き物のように地面に埋まっていく。

撃っても、撃っても…それは全て地面に吸い寄せられるかのように落ちていく。

その間にもソレは近づいてきていた。

はっきりと姿形がわかるころには、かなり大きい屈強な男であることがわかった。

「アレはまだか！？」

出番はないと思われたものを呼び出す。

言った瞬間、すぐにそれはけたたましいキャタピラ音と共に現れた。

対人相手には出番はなかったはずの５台の戦車である。

戦車は素早く配置につくと、照準を侵入者に合わせる。

「よ、よしっ！う・・・」

撃て！そう言おうとした。

しかし、

ドギャアアアアアアア！！

潰れた。５台の戦車が突然、何の前触れも無く、握りつぶされた紙くずのようにいとも簡単に潰れてしまったのである。

「え！？え！？」

それがその男の最後の言葉と見た光景だった。
戦車が潰れてその一瞬後には、侵入者の周りにいた１５０名以上の男達も、同じように潰れて飛び散っていたのである。

―　ジョルノ邸　地下シェルター　―

自らの護衛の精鋭も前線に出し切ったジョルノ。
侵入者はまだ始末できていない。
ここに到着されるのも時間の問題になっていた。

最初は激昂していたジョルノであったが、今はただただ、身に迫った恐怖を感じながら震え、それでもまだ余裕を保とうと、葉巻を吹かしていた。

バタン！！

大きな音と共にジョルノのいた部屋の扉が開かれる。
入ってきたのはジョルノの部下の黒服である。その顔は恐怖に歪み、顔色は真っ青である。

黒服「ジョ、ジョルノ様！だ・・・ダメです！！に・・・逃げ・・・

」

グシャアッ！

突然、黒服の首と足が胴体にめり込む。

突然の事態に呆然とするジョルノ。

その口から葉巻が零れ落ち絨毯を焼くが、気にしていられる状況ではなかった。

潰れた黒服から少し遅れて、行き場を失った大量の血が中空を舞う。

そのままそれを浴びてしまうジョルノ。

ジョルノ「ひ、ひひ・・・・・・・・！！く・・・来る！来る！来るぅぅ！！」

見たことも無い死に方をした黒服。そして１５００人もの兵隊に引けをとらないはずのガード達をたった一人に突破された事実。

双方共に受け入れがたい現実だが、受け入れられないジョルノにとって悪夢とも思える状況だ。

故に彼は既に壊れかけていた。

そして・・・、ゆっくりと一人の男がジョルノの前に姿を現した。

ジョルノ「き、貴様！！ウ・・・ウォンの手先だな！！」

かろうじて残った正気を総動員して、ジョルノが男に問う。

男「・・・・・・・・」

男は黙ってジョルノを見据える。細い細い目で。射抜くように。

ジョルノ「フフフ・・・ハハハハハハ！！正気か？ここには何もないと思っているのか？もう私しかいない、そう思っているのか？こ・・・ここまで貴様がこれたのも運が良かっただけの話なんだぞ！！」

男「・・・・・・・」

ジョルノの言葉に男は答えない。反応すらしていない。

ジョルノ「俺を殺せば地下にある緊急用の爆薬が爆発する！」

その言葉にも動じない。

だがジョルノはその沈黙を別の意味に解釈していた。

ジョルノ「そうか、ハハハハハハ！怖くて声も出ないか！？そ、そうだ！貴様の名前を聞いておいてやろう。運が良かっただけとはいえ、少しは出来るようだしな！光栄だろう？殺されるヤツの名前を覚えてやるといっているんだ！名誉なことだろう？え？さぁ！言ってみろ！さぁ！」

この状況を冷静に判断できていない、最早狂っているとしか思えないジョルノの発言に対して、男は暫く沈黙していたが、静かに一言答えた。

男「・・・・・・・デストロイヤー・・・・・・・」

## ０１０　デストロイヤー（後書き）

世界観とか設定がわかりづらいことが多々あるような気がします。ノートには走り書きのＭＡＰとかがあったりして補足されていますが…。

設定などの補足などは今後、修正時に追加していくか、別途機会を設けるかもしれません。

## ０１１　Ｊ・Ｊ社の終焉とその影響（前書き）

なんか前回の区切りが中途半端だった…。

## 011　J・J社の終焉とその影響

ジョルノ「フ、フフフ、ハハハハハハハハ！大層な名前だな。デストロイヤー、だと！？そんな過ぎた名前は今ココで沈めてやるよ！！」

笑いながらジョルノはポケットから短い棒のようなものを取り出し、それを握ると先端に仕込まれたスイッチを押した。

ガシャン！ガシャン！ガシャン！
ガガガガガガガガガガガガガガガガ！

シェルターの壁や天井、床が開いた、と思った瞬間、そこに現れる大口径のガドリングガン。

ジョルノが対人用の最終防衛として設置していたものである。対人用にしては不釣合いな口径は強力な装甲を着込んでいる場合などを想定したものであったが、生身の男相手に向けるには不釣合いなシロモノであった。

男「・・・・・」

男が何かを呟いたような声が聞こえたが、ガドリングガンの音が大きく聞き取れない。

ジョルノ「死ねよ！死ね、死ねしねしねしねしねねねねねねえぇ～い。ヒーッヒッヒッヒ」

ガドリングが十字砲火のように放たれる中、その音の中で狂ったように叫ぶジョルノ。いや、事実もう狂っていたが、この絶対的ピ

ンチをこれで脱したという喜びもあってか、輪をかけておかしくなっていた。

カラカラカラカラ

何十秒間撃ち続けただろうか。弾が尽きていた。
部屋にはもうもうと白い煙が立ちこめ、男の生死は未だ確認できていない。

ジョルノ「ヒィッ、ヒィッ、フ、フハハハハハ！ハーッッハッハッハ！大層なクチ聞きやがってよ！結局はこのザマか！！最後に笑うのはこの俺様なんだよ。このボケがぁっ！このＪ・Ｊ社に一人で乗り込んでくること自体が無謀でバカなことだったんだ。飛んで火にいるなんとやらだな！」

男「一体誰のことだ？」

ジョルノの勝利を確信した台詞に、どこからともなく声が聞こえた。

ジョルノ「ひっ！？」

煙の中から声は聞こえていた。

ジョルノ「そ、そそそそそ、そんな！生きているわけが無い！ににに人間じゃない！！」

煙が一瞬で風に吹かれたように掻き消える。
そこに男はキズ一つ無くたっていた。
同時に確認できた、信じられない光景。

ジョルノ「！？な、ななななんだコレは！？」

男の周りには、先程放たれたはずの弾丸が、全てふよふよと浮いていたのである。

ジョルノはあまりの現実離れした事実に思考がついていかない。

ジョルノ「これは夢だ、そうに決まっている！こ、こんなことが現実にあるわけが無い！！そうだ！現実にウォンの青二才如きに簡単にやられるわけがない。ハハハハハッ！！悪い夢だ！なんという悪夢だ！ならば目覚めたら真っ先に潰してやる！私にこんな悪夢を見せるウォンもろとも、Ｓ・Ｗ社など叩き潰してくれるわ！！！」

最早、ジョルノは夢と現実の区別もつかないほどに取り乱していた。正確には、現実を認めたくないがゆえの現実逃避であったが。

男「さらばだ」

何の感情もなく、短く言い放つ男の声を合図に、浮いていた弾丸たちは一斉にジョルノをその射線に捉える。

ジョルノ「これは夢、夢、夢、夢、悪夢なんだ！」

男が手を振り下ろす。と、同時に、弾丸がジョルノに向けて射出される。

ジョルノ「これは夢！Ｉｔ，ｓ　Ｍｙ　Ｄｒｅｅｍ！ただ悪いだけの夢なんだぶるげはっ！！！」

何千、という弾丸がジョルノに殺到し、粉微塵になるジョルノ。

裏の世界を支配してきたジョルノのなんとも無残な最期であった。
男は軽く目をつぶり、心の中で黙祷を捧げる。
可哀相という感情はないが、命を奪ったことに対するこの男のけじめのようなものだった。
そのまま男は携帯を取り出すと電話を掛ける。

男「私です。任務完了」
ウォン「ゴルディアスか。ご苦労だった」
ゴルディアス「一度、報告に戻りますか？」
ウォン「いや、その必要は無い。自宅に戻って休みたまえ」
ゴルディアス「了解」

短い報告と確認事項だけを終わらせて、ゴルディアスは携帯を切る。
そして廃墟と化したジョルノ邸をゆっくりと後にした。

次の日、Ｊ・Ｊ社が経営不能となる。
全ての決裁権が社長であるジョルノに集中していたことや、ジョルノの顛末と誰がその制裁を下したか知る上層部の人間が一人残らず逃げてしまった為だ。
そして、それを当然のように利用したＳ・Ｗ社が、全ての事業を受け継ぐ形で奪う。
その社会的影響と混乱は大きく、大手は無論のこと、中・小企業、分野の違う職種にまで大きな波紋をもたらしていた。

バークレイ区の中央部に存在するＭ・Ｂ社。
極めて普通の一流企業である。

それなりの歴史と、それなりに質のいい商品。裏の稼業もなく、清廉潔白というまでほどに綺麗な会社ではなかったが、世間一般的には普通の一流企業という認識を持たれている大企業である。

そのＭ・Ｂ社は今、かなりの混乱状態にあった。

その原因は主にこの会社がＪ・Ｊ社の受注をメインに動いていたことにある。

既にＪ・Ｊ社の事業を引き継ぐと発表したＳ・Ｗ社から早々に、

『Ｍ・Ｂ社との取引・契約の全てに関して、白紙撤回とする』

という宣言がなされていた。

これはこれから入る収入全てが撤回されたと同時に、今まで投資した全てが無駄になったことになる。無論、Ｍ・Ｂ社は抗議したが、『Ｍ・Ｂ社の契約全てはＪ・Ｊ社と為されたことである。Ｊ・Ｊ社との間にかわされた契約はＳ・Ｗ社の事業となる全てに適応されない』として、それを退けた。

この状況により、Ｍ・Ｂ社は一夜にして会社存続の危機に立たされていた。

そうして下された結論は、大規模なリストラである。

そのリストラ対象の中に、メッチェ・カルナークがいた。

メッチェは２０歳にしてＭ・Ｂ社に入社した。既に１９歳で大学を卒業するという優秀な成績を修めていたため、あっさりと入社が可能であったのだ。入社後の彼の働きぶりは素晴らしいの一言であった。加えて人格面でも評判が良く、人望を広く集めていた。そんな彼が今回のリストラの対象となったのは、一番の理由として「上層部の不安と恐れ」である。

今回のリストラにはそれなりの役職に就く者でも、それだけの能

力が無いと判断されたものも多く含まれる。こうなると、当然空いた役職に誰かを当てなければならないのだが、メッチェほどの能力を持つものが、そうした混乱の中を利用して上層部に食い込んでくるのは、能力的にも人望的にもそう遠くない話になるのは明らかであった。

通常であれば、優秀であるのだからいずれは会社を引っ張る存在として、と考えていた部分もあったが、場合によっては明日にも自分が引きずりおろされる立場になるかもしれない、と考えた人間がいる。そうした人間達の工作により、メッチェに叛意がある、というような話を広め、リストラの対象とさせることに成功したのである。

彼の同僚や、彼を知るものはそのことに対して抗議をしたが、メッチェはそれを受け入れあっさいと退職することを告げてしまった。

これはメッチェがフランベルジュ特区のはずれに、それなりの豪邸といえる家をもつような富豪であったことが原因の1つであった。

彼は早いうちに両親を亡くし、親族もなく、兄弟もいなかったことから、遺産をそのまま相続することになった。その相続額は贅沢をしないのであれば2代は楽に暮らせるだけの金額であった。

メッチェがそれを利用して楽な生活に入らなかったのは、何かに「頼る」ことが嫌いであったという性格にある。必要であればそれらを使うことに抵抗も躊躇もないが、単にあるから、という理由で与えられただけのお金に手をつけるのは、彼には耐えられなかった。従って、メッチェは出来る限り、自分の力で稼いだお金で生きていくようにしていた。

そうしてある程度、自分なりの蓄えも出来てきた矢先にこの事件であった。

―これからどうするか…―

最後の出社、といっても私物整理くらいだったが、を終えて自宅への帰路についていたメッチェは今後のことをどうするかと思案していた。

―！？―

メッチェは急に不思議な違和感というか、妙な感覚に捕らわれる。言い表せない不思議な感覚に戸惑い、危険を感じたような気がして、直後に察知した気配の方向に振り向きながら蹴りを放つ。

バシッ！
「キャッ！」

メッチェが放った蹴りは受け止められていた。
同時に女性のびっくりしたような声が聞こえたので慌てるメッチェ。

メッチェ「すまない、大丈夫か？」
女性「随分ですね。いきなり女性に蹴りで挨拶だなんて…」
メッチェ「申し訳ない。何か妙な違和感を感じてな…」
女性「フフフ、大丈夫です。それより、貴方がメッチェ・カルナークさんでいいのかしら？」

急に自分の名前を出してきた女性に、メッチェは不信感を覚えるが、不思議とその考えはすぐ霧散してしまうのだった。

メッチェ「そうだが…君は？」
女性「私の名前は竜堂奈々。スィールズの件、と言ってわかりますか？」

奈々と名乗った女性のその言葉。
『スィールズ』
その名称に、メッチェは驚きつつも、もうきたのか、と納得してしまう。

メッチェ「君は…そうか。とにかくここではなんだからな。入ってくれ」

メッチェは先程感じた不思議な感覚が、馴染み深くもあるが、他人のものであるということに気が付き、内心で納得する。
ひとまず奈々を家に招きいれ、話を聞くことにした。

メッチェ「ただいま。すまないがお客だ。お茶を2つ頼む」
執事「わかりました」

メッチェが自宅に入ると、出迎えたのはもう長い間、この家の殆どを取り仕切ってきた老年の執事だった。帰ってくるなりのメッチェの言葉に落ち着いて対応する。

広いとはいえないが、立派な応接室に案内され、ソファーに腰掛ける奈々。
間も無くして、背広を脱いだメッチェがやってくる。
ほぼ時を同じくしてお茶が届けられた。

奈々とメッチェはお茶を一口。喉を潤すと早速本題に入る。

メッチェ「さて話を聞きましょう。と、いっても先日のガーディア

ンの死亡と何か関係があるのでしょうが。そして貴方のお父様の件も含めて」
奈々「ええ…。話が早いのは助かります。本来、私達ガーディアンは、個別にそれぞれのスィールズを守るという目的を持っている、というよりそういうものだと感じています。ですが、私達に敵対する目的を持つものは、かなり早い段階から組織を持ち、計画に基づいた行動をしているように思われます。これに個別で対応していては各個撃破されてしまうだけ。こちらも早いうちに仲間と合流して対抗する手段を持たないと全滅してしまうわ」

奈々の話に神妙な面持ちのまま、耳を傾けるメッチェ。

メッチェ「それで私のところへ？」
奈々「そうです。私の家から一番近いガーディアンの反応がここだったものだから」
メッチェ「話は理解しました。そういうことなら協力するのに拒否する理由もありません。ですが、未だガーディアンとして目覚めていない者もいる可能性があります。彼らに対してどのように説明をするつもりです？」

ガーディアンとして能力が覚醒すると、個人差はあるようだが能力自体の使用が可能になることと、ガーディアンとしての使命を自覚するようになる。使命も単にスィールズを守らないといけない、というものから、もっと深い情報まで知る者といったように差が発生する。
無論、そもそも能力に目覚めなければ、ただの一般人でしかなく、こんな話をしたところで「漫画の見すぎじゃないのか？」と頭を疑われるだけである。
奈々「リーダーとなる存在。その方がいれば、そういった問題は解

決するとお父様が遺してくれた資料には記述されていました」
メッチェ「リーダー・・・か。ということは、これから貴方の探索を頼りに探していくことになるのかな？」
奈々「ええ。リーダーとなる人物の名前はわかっています。ジョナサン・キャオ・マイロードという名前です。聞き覚えはありますか？」
メッチェ「いや、残念ながら。とりあえず、探索には協力するさ。一緒に探そう」
奈々「よろしいのですか？会社や生活などは…」
メッチェ「ああ。確かに団結の必要はある。むざむざ死にたくは無いしな。丁度都合よく、なのかな…。会社は解雇されたところだ。家族もいない。渡りに舟だったのかもしれないな」
奈々「そうですか…。兎も角、ありがとうございます」

奈々はメッチェの事情を深くは聞かず、ただ礼とばかりに頭を下げた。

メッチェ「いいって。それより、次の反応とかはわかっているのか？」
奈々「次に近いのはアクチュエス市ですね」
メッチェ「探索範囲が広いな…。よし、車があるからそれでいくとしよう。」

そういうとメッチェは執事に車の準備をさせる。

奈々「メッチェさん…」
メッチェ「どうした？」

いそいそと準備を始めるメッチェに奈々は質問を投げかける。

奈々「貴方は…スィールズが何なのか、ご存知ですか？」
メッチェ「いや…。ただそれが全て破壊された場合、人類の存続が危ういとしか・・・」
奈々「私も同様の情報しか持っていません。しかし…一体それが何なのか。何故、私達が守らなければならないのか…」
メッチェ「……さあな…。ただ、俺達はそれを守るためにこんな能力を持っている、というのは確かな事実だな」
奈々「そうですね…」

そういって奈々は窓から外を眺める。
窓の外では木々が穏やかな初夏の風にその身を任せ揺られていた。
それはこれから起こる事など何一つ想像させないかのように、穏やかで静かなものであった。

## 011　J・J社の終焉とその影響（後書き）

ようやくガーディアン側がぼちぼちと動き始めました。
そしてスィールズとは一体何なのか？
能力者たちとの関係は？この闘いにどんな影響を持ってくるのか？
相当長い先にいずれぼちぼちと明かされていきます。

## 012　会合（前書き）

遅くなりました。
その割には短めです。

## 012　会合

―アクチュエス市　市民ドーム　ミルティア・オザクルーナ　ワールドツアーＦａｉｎａｌ―

広い舞台の上に存在しているのは、ライトアップされた一台のピアノと、ミルティアの一人だけ。

彼女が弾く幻想的でなんとも形容しがたい美しい音色が、今終わりを告げた。最後の小節を弾き終わると、静まり返るホールの中、静かに立ち上がったミルティアが一礼する。

パチパチパチパチ　ワァァァァァァ！！

小さな拍手が、一瞬の後に豪雨のような音に切り替わる。

一万人以上の観客が、ミルティアに向かって惜しみの無い賞賛の拍手を向けていた。

『ミルティア・オザクルーナ　ワールドツアー。年始から始まったこのツアーもココ、アクチュエス市民ドームで、本日で終了を迎えることになりました。』

場内にアナウンスが響き渡る。

まだ鳴り止まない拍手と、アナウンスの中、舞台上に花束を持った男が現れる。

『今、このツアーの終了を祝して、アクチュエス市市長のマッド・ヴォルギアさんから、ミルティアさんへ花束が贈呈されます』

マッド・ヴォルギアは、ゆっくりとミルティアに近づいていく。

お互いが握手できる距離まで近づくと、丁寧に花束を手渡した。

ミルティア「ありがとうございます」

その瞬間、再びドッ！っと会場から拍手が起こった。

握手を交わす、ミルティアとマッド。

更に拍手と喝采の音量は上がっていった。

マッド「あとで楽屋の方に伺わせてもらう」

ミルティア「ええ」

去り際に小さくマッドが呟いた。ミルティアもそれに小さく返事する。

そのままマッドは舞台袖に静かに去っていった。

その後、ミルティアはマイクをスタッフから受け取って最後の挨拶を始めた。

ミルティア『・・・みなさん、今日は私の・・・』

ミルティアはそのままいつも通り、会場の観客に向けての挨拶と感謝を述べて、拍手を浴びながら、舞台を後にしたのだった。

―ミルティアの楽屋―

コンコン

控えめなノックの音。

ミルティア「どうぞ」

ガチャリと音がして、控え室の扉が開く。
現れたのはマッド・ヴォルギアであった。

ミルティア「お座りになって」
マッド「ああ」

ミルティアに薦められるまま、適当な椅子に腰をかけるマッド。

マッド「我々の同志が、ついに全員揃ったそうだね・・・」

余計な会話を挟まず、本題に触れるマッド。

ミルティア「ええ。最後の一人はディース・ラムレッド・グォーゼル。クェンペスト地区のスラム街で医者をしている人らしいわ。一応、連絡も取れているそうよ」

マッド「一応、というのは？」

ミルティア「その人、変わり者らしくて。時期がきたら自分から参加するって話らしいわ」

マッド「ほう・・・。油断しないことだ。そのような怪しい男、同志とはいえ信用できるかどうかわからんのだからな」

ミルティア「わかってるわ」

マッド「・・・ところで・・・」

一旦話題を切り替えるようにマッドが言葉を続ける。

マッド「君はやはりウォンに付くつもりかね？」

マッドが険しく鋭い目でミルティアを射抜く。

ミルティア「・・・ええ・・・それがなにか？」

ミルティアも目を逸らさずに、正直に答える。

マッド「ウォン。やつはチカラで全てを手に入れようとする。・・・そう、悪魔のような男だ」

ミルティア「・・・・・・」

マッド「麻薬・・・暴力・・・歯向かうものには死を・・・。ヤツのやり方は許せん・・・ヤツは危険すぎるのだよ・・・」

マッドは自分の感情を持て余すかのように立ち上がり、そして窓際へと歩く。

マッド「もし・・・もし、私がヤツと同志でなければ・・・」

ミルティア「・・・同志でなければ？・・・」

マッド「・・・同志でなければ・・・私はっ！！」

『それ以上は言わない方がいいですよ』

突如、二人以外誰もいないはずの室内に声が響く。

マッド「？！」
ミルティア「！！・・・・・・この声、フォボス君ね」
ミルティアは辺りを見回しながら、声の主を当てる。
フォボス「ココですよ」
シュワアアッ　と、まるで炭酸が昇るかのように床から光の粒が現れ、そしてそれは人の形となり、実体化しき、フォボス・ケープフィアーがその場に出現したのであった。
ミルティア「また成長したみたいね。アナタの能力」
フォボス「ええ、まぁそんなことより・・・」
フォボスはギッとマッドを睨む。
フォボス「市長さん。アナタの正義感には感心しますが・・・まだS・W社に、ウォンさんに歯向かう気ですか？」
マッド「ヤツの・・・ウォンのやり方は許せん。絶対にな。・・・全てが済んだその時は・・・」
マッドが右手を突き出し、ゆっくりと手だけを上に上げていく。
マッド「私のこの手でウォンを倒す」
静かにはっきりとそう言いながら、手を拳に握る。
フォボス「・・・・・・・」

そんなマッドを見つめるフォボス。

フォボス「・・・・フッ、ウォンさんを倒す？フフフッ、相変わらず笑わせてくれますね市長さん」

フォボスはそういうとソファーに腰をかける。

フォボス「ですが・・・市長さん。アナタにはウォンさんの他に、もう一人倒さなければいけない人がいるんじゃありませんか？」

マッド「！？」

ビクッと反応するマッドをみて、ニッと笑うフォボス。

フォボス「聞きましたよ、市長さん。・・・あなた・・・半年前に一度、シドさんと闘ったそうじゃないですか」

マッド「・・・・・・」

フォボス「そして結果は敗北。今こうして我々の同志として加わってもらっている訳ですが・・・。ハデにやられたそうですね」

マッド「・・・ああ」

マッドは拳を握り締めながらも、フォボスの話を事実として肯定する。

フォボス「まあ・・・シドさんと闘って生きている、というのは流石というところですが・・・。ウォンさんのチカラはシドさんのチカラを大きく上回っていること、それを忘れないでくださいね。・・・

・それに、今・・・ウォンさんを守っているのはシドさんとミリアさんとボク『だけじゃない』ですからね」

マッド「・・・・・・」

フォボス「バカな気は起こさないことです」

フォボスが一頻り演説を終えたところでミルティアが割って入る。

ミルティア「フォボス君。そろそろ本題に入ってくれるかしら？」

フォボス「失礼、そうでしたね」

フォボスはマッドの顔を見て一度フッと笑う。

フォボス「3日後、首都オーケンシールドのグランセルタワー最上階の５０階。そこで、我々同志全員のサミットを開きます」

マッド「サミット？」

フォボス「ええ。ま、顔合わせみたいなものですよ。・・・ただ・・・一人、来るかどうかわかりませんがね」

ミルティア「問題のディース・ラムレッド・グォーゼルね」

フォボス「・・・ええ。そうです」

フォボスの表情が険しくなる。

ミルティア「どうしたの？そんなに怖い顔して」

フォボス「いえ・・・別に・・・」

フォボス（ディース・ラムレッド・グォーゼル！！・・・くっ、思い出しただけでも・・・）

苦い過去を思い出し、爆発しそうな感情をなんとか押さえ込む。

マッド「話はわかった。それでは、私はこれで失礼させてもらうよ」

フォボスの報告がそれ以上ないことを悟ると、マッドは控え室から退出することにした。

ミルティア「そうですが、それじゃあ市長」

マッド「ああ」

フォボス「3日後、忘れないでくださいね」

マッド「・・・わかっている」

バタン、と扉を閉め、マッドは控え室を後にした。

フォボス「フン、マッド・ヴォルギア。あの正義感・・・バカとしか言えませんよ」

ソファーから立ち上がりながら、吐き捨てるように言うフォボス。

ミルティア「あら、そう？私は好きだけどな。ああいう性格」

フォボス「変わってますね、ミルティアさん」

ミルティア「そうかしら？」

フォボス「そうですよ・・・」

自分と合わない感覚を持っているミルティアに内心呆れるフォボスであった。

## 013　スィールズガーディアンの少女

―アクチュエス市立　アクチュエス女子高等学校　校庭―

夏も本格的に始まろうとしている時期。今日はまだ春の余韻を楽しむかのように穏やかな日差しが射し込み、心地よい風が緩やかに草木や花を躍らせていた。雲は無く、鳥達が気持ち良さそうに空を舞っている。

とても気持ちの良い日であった。

そんな気持ちの良い日に、そんな日だからこそ、という理由で持久走をやらされる生徒達は、反ってそんな日を恨む気持ちを持っていた。

風がそよいでいても、身体は暑くなるし、日が照っている以上、それは暑さを更に加速させていくものである。

夏が本格的に訪れれば、逆にプールという極楽を与えられるのだが中途半端な気候のせいで持久走をやるハメになるのだから地獄という表現をする生徒もいた。

アクチュエス女子高校　２年Ｂ組の生徒達は５時間目の体育の授業で持久走をやらされていた。

今日の距離は３ｋｍである。

３ｋｍもあれば女子にとっては結構な距離で、ましてや昼食の後に走るのは少々厳しいものがあった。走りたくない、という想いから自分のサイクルを多少偽って、月のモノという理由で休む者が相当数いたとしても、それは全く不思議でもなんでもない話だった。

無事に見学に回れた生徒は和気藹々と気持ちの良い気候を楽しみながら、目だけは走っている生徒を追いつつ、思い思いにお喋りに花を咲かせていたが、上手くサイクルを誤魔化せなかったりして、

走っている方はただただ、それを羨ましげに見つめていた。
そんな中、一人張り切って走っている少女がいた。
少女「いっちばーん！ねぇ先生、記録は記録は？」
先生「あぁ、また少し早くなったな。いい加減陸上部にでも入ればいいものを」
体育の度に記録に拘る少女は、特に部活動に入っていない。
成績はそこそこ優秀で、運動神経はかなり良い部類の彼女がなんの部活動もしていない、というのは学校側にとっては非常に損失である出来事だったので、事あるごとに部活動を薦めていたり、生徒と協力して見学会や勧誘を半ば強引に行っていたのだが、どれも効果を上げず今に至っていた。
少女「さって、先生。着替えてきてもいいですか？」
先生「まぁ・・・構わんか」
少女「じゃ、そういうことで」
少女がその長いポニーテールを翻して、更衣室へ向かって全力で走っていく。
まだまだ元気が有り余っているようだった。
先生「あと2kくらい走れそうだなアイツ…」
教師はそう呆れたように呟いた。

ー更衣室ー

少女が更衣室に戻ると、見覚えの無い女性が立っていた。
更衣室自体は学年など関係なく共通に利用されるものであり、体育以外でも着替えが必要な場合や、制服が汚れてしまったりなどで利用する場合もあり、授業中の時間帯であるとはいえ、自分達のクラス以外の生徒がいること自体はそれほど疑問ではなかった。

少女（見たこと無い人・・・先輩か・・・新任の先生・・・かな？）

少女は少々気にはなったものの、特に声を掛けるでもなく着替えを始める。
着替えを始めて少し経った頃、不意に少女に声が掛けられる。

奈々「私の名前は竜堂奈々。貴女、ルーシア・アスクリエッタさんね？いえ、スィールズガーディアンとお呼びしたほうがいいかしら？」

奈々と名乗った女性から発せられた言葉に、ルーシアと呼ばれた少女の着替えの手がピタリと止まった。

ルーシア「貴女・・・何者？」

ルーシアは警戒心を強める。

奈々「警戒しなくていいわ。私は貴女の同志、と呼ぶべきかしら？ガーディアンと呼ばれる者の一人よ。アナタに話があってここに来たの」

ルーシア「私に？」

ルーシアは自分の能力を使って奈々を探知する。
奈々の言うとおり、彼女が自分と同じガーディアンの波長を持っている者であるとわかると警戒を解いた。

奈々「ええ。そうね、まだ授業があるでしょうから、学校が終わったら、アクチュエス市立公園まできてもらえるかしら？」

ルーシア「私は構いませんけど・・・他に誰かいるんですか？」

奈々「もう一人、ガーディアンがいるわ。多分、アナタのガーディアンとなる人が」

ルーシア「私の…ガーディアン…」

二人がそんな話をしていると、ガヤガヤと廊下のほうから生徒達の声が聞こえてきた。授業が終わったのだろう。

奈々「それじゃ、私はこれで失礼するわ」

奈々はゆっくりと窓に向かって、そこから外に飛び出るように走っていった。

ルーシア「またあとで」

聞こえているか聞こえていないかわからないが、ルーシアは奈々の背中にそう声を掛けた。

ほぼ同時に更衣室の扉が開き、女生徒達が入り込んできた。

女生徒「あれ、ルーシア、まだ着替えてなかったの？」

ルーシア「あ、うん、ちょっとぼーっとしてて」

女生徒「あぁ、またなの、気をつけなさいよね」

ルーシアは慌てず、ぼーっとしていた、という間抜けに思えるような言い訳をしたが、それはすんなりと受け入れられた。実際、ルーシアは授業中などにぼーっとしていることがよくあり、先生に咎められることも少なくない。ルーシア自身は考え事をしていたりするのだが、どうも途中で思考が脱線しだして、結果、回りからはぼーっとしているように見えてしまうのだ。昔からその傾向があり、最初はぼーっとしている、と言われることに腹を立てていたのだが、中学生に上がる頃には説明が面倒になったこともあってか、ぼーっとしている、というのをキャラとして確立させるようになっていた。

その甲斐あってか、今回もなんら怪しまれることもなかったのである。

ルーシア（さて…色々と手続きが面倒ですね…）

ガーディアンが自分のところにやってきた、という事実。それは日常からの別離を告げているのと同様であることをルーシアは理解していた。

今後、自分の身に安全があるかどうか、と考えるとちょっと気が滅入るかな、とルーシアは内心思ってしまうのであった。

ーアクチュエス市立公園ー

2時間後。

中央に位置する大きな噴水の前のベンチで、奈々とメッチェはルーシアの到着を待っていた。

メッチェ「そろそろだな」

奈々「そうね」

カップルのように見えなくも無い二人は、親密なようで、そうでもない距離感を持ってそれぞれベンチに座っていた。傍からみてもなんとなく不思議な感じがする距離感だ。

ルーシア「奈々さぁ〜ん」

遠くから奈々を呼ぶ声が聞こえる。

見るとルーシアが全速力で走りながら、こちらに手を振っていた。

ルーシア「はぁはぁ…お待たせしました！私、ルーシア・アスクリエッタです」

肩で息をしながら、奈々とメッチェに挨拶をする。

メッチェ「はじめまして。メッチェ・カルナークだ。メッチェと呼んでくれ。そして君のガーディアンとなるもののようだ、よろしくな」

そういって握手を求めるメッチェ。
それに応じるルーシア。
ピンという何かが弾けるような感覚を覚える二人。
ルーシア「確かに…私のガーディアンみたいですね。よろしくです、メッチェさん」
奈々「さて、自己紹介も済んだところで本題に入りましょうか」
奈々はルーシアをベンチに座らせると、今まで起こった事を説明する。
ルーシア「わかりました。それじゃ早速明日からにでも？」
メッチェ「話が早くて助かる。君の事情が許せば明日からにでも、と言いたいところだが…」
奈々「学校やご両親へのお話もあるでしょう？」
ルーシアは未成年だ。学校にも在籍している以上、じゃあいますぐ行こう、ということには出来なかった。
メッチェや奈々は社会的束縛がない状態だったし、既にある程度の財力もあった上に、家族に説明するという問題点はなかった。だが、ルーシアはそうもいかないのである。
ルーシア「それなら大丈夫です」
奈々・メッチェ「？」
ルーシア「私は両親も他界してますし…学校は今、休学届けを出し

てきましたから」

ルーシアは、ガーディアンが自分の下に訪れた意味を正しく理解し、放課後になるや否やその手続きを終わらせてきてしまっていた。

学校側からは突然の休学届けに不審と感じずにはいられなかったが、両親がいないことによる家庭環境の都合、という理由で突っ込めずに受理するしかなかったのだ。

奈々「フフフ、手回しの良い娘ね。それじゃ、ゆっくりと話をする為にホテルでも探しましょうか」

ルーシアの行動力の良さに感心する奈々。

ルーシア「それなら私の家で泊まっていってください。大したおもてなしも出来ませんけど、ゆっくりお話は出来るでしょうし」

メッチェ「いいのか？」

ルーシア「はい！さっきもいったように両親もいませんし…。一人ではちょっと寂しく感じる広さですから3人なら丁度いいと思いますよ」

奈々「そういうことならお邪魔させてもらおうかしら」

ルーシア「はい、是非！」

こうしてルーシアの家で一泊することになった奈々とメッチェは、ルーシアと共に公園を後にすることにしたのだったが…それは予想外の形で後回しになってしまうのであった。

「ほう、こちらの動きを察知してそちらも集団行動とは…少々侮っていた部分があるのは認識を改めないといけないですね」

鋭く冷たい気配と、冷ややかな声が辺りに響いた。

その声の主を奈々は一時たりとも忘れたことは無い。

奈々「出てきなさい。ディース・ラムレッド・グォーゼル！！」

それは忘れもしない、父の仇である男の声であったから。

## ０１３　スィールズガーディアンの少女（後書き）

ようやく外伝で主人公のルーシアが登場。
未登場のキャラはこれであと３人となりました。

## ０１４　氷の暗殺者（前書き）

戦闘回、ですが…色々あってかなり消化不良気味かも。

## 014　氷の暗殺者

奈々「出てきなさい。ディース・ラムレッド・グォーゼル！！」

奈々の声が公園内に響く。

気が付けば公園内には自分達以外の人影が見えなくなっていた。

ディース「たった一度、少し手合わせしただけでよく私の声を覚えているものですね」

ザッと草を踏む音が聞こえる。

3人は慌てて音のした方へ振り向くと、木陰から姿を現した長身の男が立っていた。

奈々「お父様の仇、簡単に忘れることなんてないわ」

ディース「そうでしたね…。私はアナタにとって憎き仇ですから」

ゆっくりと静かに近づいてくるディース。

ディース「それでは、私が現れた用件なども言わずとも、ですね」

奈々「みんな！彼は『敵』よ！！」

奈々の声に反応して戦闘態勢を取る、ルーシアとメッチェ。

ディース「そういうことです」

ディースのその声と共に、ディースの手から無数の氷弾が発せら

れる。
3人はそれを難なくかわすと、反撃するために能力を開放する。
メッチェ「こんなところで戦闘になるとはな！食らえ！」
メッチェは風の刃、所謂カマイタチを放つ。
ルーシア「いきなり厄介ごとですね…。えいっ！フォトン・レイ！」
ルーシアはその手から光のレーザーのようなものを放つ。
奈々「力の差はあるけど…3人なら！水龍陣！」
奈々がメッチェとルーシアの攻撃に合わせて、3匹の水龍を放つ。
ディースは慌てることなく、不可視のカマイタチを大気を凍らせることによって無力化し、氷の壁でフォトン・レイを拡散させ、水の龍を凍てつかせて粉砕する。
一瞬でこれら全てを防御されたメッチェとルーシアは驚きの表情を隠せない。
一方、奈々はある程度こうなることは予想済みだったが、それでも苦い表情を浮かべていた。
ディース「やはりこの程度、というところですね。少々拍子抜けですが…まあ仕事はやりやすいので良しとしましょうか」
奈々「流石に…氷の暗殺者と呼ばれるだけのことはあるわね。実戦経験もその能力も私達より断然に上…」
ディース「ほう。私のことを少しは調べたようですね。しかし…実

際、暗殺者と言われますが実態は少々異なりまして…。今回のように対象には堂々と正面から戦う事のほうが圧倒的に多いのですよ。あまりコソコソするのは苦手でしてね」

ディースはそう言いながら、奈々と同じように3匹の氷龍を作り上げる。

ディース「そろそろ無駄話を止めて…死んでください」

冷たい一言と同時に、冷気を纏った氷龍が菜々たち3人に襲い掛かる。

3人はそれぞれの攻撃手段をもってその氷龍を粉砕しようと試みるが、小手先の攻撃ではその能力の壁を打ち破ることは出来なかった。

メッチェ「くっ、いきなり強敵すぎやしないかい？」

メッチェの言葉に苦笑を浮かべるルーシア。

奈々「ルーシア、なんとか出来る？その隙に私が…」

実戦経験の一番豊富な奈々が近接戦闘で敵をひきつける。その後方から、ルーシアとメッチェが奈々の援護、またはディースへの攻撃や足止めを行うというのが現実的な案と考えた奈々は、ルーシアに氷龍の破壊・無力化を任せることにした。

メッチェではなかったのは、メッチェ自身、まだ能力に目覚めてから日が浅いということも理由にあったが、破壊力がある技がないというのも彼自身から聞いていた話であったため、仮に破壊できたとしても能力の大半を使用してしまう可能性があることから、自分達より巨大な能力であるはずのスィールズ・ガーディアンであるル

ーシアに任せることにしたのである。

ルーシア「わかりました、やってみますね」

奈々の意図を理解したのか、それともしていないのかはわからないが、ルーシアは奈々の提案に直ぐに了承する。メッチェは意図を理解してやや後方に下がる。

ルーシア「プリズム・レイ！」

7色の色彩をもつ光の束が、数え切れないほどの光条となり、氷龍に殺到する。

光条が氷龍に穿たれると、暫くの後、氷龍は粉々に砕け散った。

それを確認したルーシアはすぐさま、次の氷龍に向けて、プリズム・レイを放つ。

次々と破壊されていく氷龍を見ても、特に取り乱した様子もないディース。

そこに奈々が素早く間合いを詰める。

奈々「せやっ！」

水で作り出した刀剣で居合いのように胴へと切りかかる。

さすがにその攻撃は、というような顔で危なげも無くそれを後方に飛んでかわすディース。

奈々の方もそれは牽制だというように更に踏み込んで、袈裟斬りに剣を振り下ろす。

ディースの方も自ら剣を作り出してそれを受けると、軽く薙ぐように反撃する。

ビキビキビキッ！

体勢を一度立て直すために大きく後方にステップして横薙ぎをかわした奈々であったが、それはこの場合、運良く正解であった。薙がれた空間は凍り付いていたのだ。そのままそこで受けるなり、最低限の動きで避けていれば氷と共にその場に縫い付けられていた可能性があったのである。

ディース「剣を扱うのは得意ではないのですが…こういった裏技もありますから、これでいい勝負になるでしょう」

実際、ディースに剣術の心得は全くと言っていいほど無い。格闘のセンスはあることから、剣術のセンスが全く無いとは言い難いが、未だかつてまともに剣など振るったことなどはなかった。本人曰く、『メスなら思う存分振るえるんですがね』とのことである。

単純に剣の腕前という意味でなら奈々の方が経験も長く、実力としても圧倒的に上であった。しかし、能力者同士の戦いにおいて剣の腕前というのは能力が拮抗して初めて活きるものである。能力差が圧倒的にあるこの戦いにおける唯一のアドバンテージである剣術が、この戦い全体におけるアドバンテージになりうるか、というと残念ながらなり得なかった。とはいえ、ディースに能力で勝てない以上、少しでも上回れる可能性がある方法に賭けるしか勝つ可能性が薄くなるというのもまた事実である。

奈々「それなら！」

改めてディースに向かって大きく踏み込み袈裟から逆袈裟、そして切り上げ、真っ直ぐに振り下ろすという４連撃。

剣の心得がないといいつつも、それを冷静に捌いていくディース。

ディース「この程度では…むっ！？」

４連撃の最後の一撃を弾いたディースが反撃に出ようとした時、わざと遅らせた最後の５連撃目である突きが放たれる。突きの範囲ギリギリにいたこともあってか、横に避けるより後にかわすという選択肢をとったディースだが、それは奈々の予想通りに動くことになった。

奈々の手から水の刀剣が離れる。いや、放たれた。突きと同時に、その慣性のまま手を離したのである。当然のことながら、剣は真っ直ぐにディースに向けて飛んでいく。

ディース「小細工を！」

氷の剣でその水の剣を受ける。

バシャっという音が聞こえ、水の剣が元の水へと還元される。と、ディースは思っていた。

しかし、水は還元されず、そのまま形を変えて膨れ上がり、８匹の水龍に姿を変えてディースに襲い掛かる。

奈々「秘剣・八龍陣！」

突然発生した水龍に対して、ひとまず距離を置こうとするディース。

それを見たメッチェはそうはさせるか、と風を巧みに操り、ディースの足を絡め取る。

ディース「くっ！？」

拘束は一瞬で解いたものの、その一瞬でわずかに体勢を崩す。

その機を逃さず奈々が追い討ちをかけるようにディースへ向かっ

て突っ込んでくる。
ルーシアも最後の氷龍を破壊し終わっていた。すぐにでもこちらへ標的を切り替えて、追い討ちをかけてくることは容易にわかる。
ディース「フッ、仕方ありませんか」
自らの危機に対して、軽く笑いながら呟くディース。
そもそもこのような事態になったのは、一度圧倒した奈々に対して軽く見ていたことや、他のガーディアンの能力を無視していたことが原因でもあった。
ディースの笑みはそういった慢心した自身に対する戒めの笑いでもあった。
ディース「ならば少々本気でいかせてもらいましょう…時間凍結（クロノ・フリーズ）」
ギンッ！！
全てが凍ったような音。
その一瞬、世界が凍った。
素早く体勢を立て直すディース。次の瞬間には奈々が迫ってきていた。
奈々「！？」
驚いたのは奈々である。
確実に体勢を崩していたはずのディースが、たった一瞬の間に、直立不動している体勢に戻っていたのである。だが、もう既にここから止まる事は出来ない。反撃しづらい体勢からなんとか立て直した程度であることを祈るしかなかった。

だが、その願いは空しく、神には届かなかった。

ディース「完全なる凍結（パーフェクト・フリーズ）」

ディースから凄まじい冷気が周囲に放たれる。一瞬で地面や大気は凍り付き、水龍や奈々も同時に凍り付き、吹き飛ぶ。

奈々「ぐっ！？」

地面に投げ出される衝撃。

バリン！という音共に奈々に付着していた氷が割れる。

ディース「さすがに能力者に対しては完全に、という訳にはいきませんか」

眼鏡の位置を直しながら、奈々を観察するディース。

ディース「今回は結界で時間制限がないとはいえ…私も色々と忙しいのであまりお相手している時間も取れません。一気に決着としましょうか」

その言葉に3人はすぐさま集まり、能力を集中させる。

ディース「いいでしょう、抵抗できるものなら…やってみるといいでしょう！荒れ狂う氷雪の女王（ブリザード・クイーン）」

凝縮されたブリザード。

その内部はあらゆるものを凍てつかせ、氷弾がそれを砕いていく。

その範囲は徐々に広まり、簡単に公園全域を包み込むことが予想された。

奈々「これを回避するのは無理よ。なんとか返すしか方法がないわ」
メッチェ「なら全力でいくしかないな」
ルーシア「きますよ！！」
奈々たちの目の前に荒れ狂う雪と氷の舞いが迫ってきていた。
奈々「奥義！清華九龍陣（せいかくりゅうじん）！」
メッチェ「トルネードカッター！」
ルーシア「ホーリーピラー！」
風の竜巻が、巨大な光の柱が、花が咲くように生まれた９つの龍が、同時にブリザードを打ち破るべくその領域に入り込む！
ゴォォォォォォッ！
凄まじい音と風と共に、お互いがお互いを侵食するべく、力を押し合う。
奈々「くっ…！？」
メッチェ「おい、全然押せてないぞ！」
ルーシア「こんなにも能力の差があるなんて…」
３人はそれぞれが持てる最大の能力を使って、現状で繰り出せる最大の技を撃ち込んだはずであったが、ディースの技１つに対して押さえ込める雰囲気は微塵にも無い。逆にじりじりと押さえ込まれ

ていく感覚が伝わっていた。
ディースはそんな様子を冷ややかに見つめている。
メッチェ「くっそおおおおっ！」
メッチェが気力を振り絞って能力を更に引き出そうとする。
それが出来たのか、出来なかったのか。どちらにしても結果は変わらなかった。
奈々の水龍も徐々に凍り付いていき、ルーシアの光の柱も消えかかってきていた。
ディース「それでは、こちらも出力をあげましょうか」
奈々・ルーシア・メッチェ「！？」
まだ本気ではない、その言葉に3人は凍りつく。
そして、そのディースの言葉通り、じりじりと押されていた現状から一転、一気に侵食され、押し返される。
奈々「くっ、あぁ！？」
メッチェ「がっ！ぐあああ」
ルーシア「あ、あぁっ！？」
押されるばかりでなく、自らの放った能力が逆流してくるような感覚に、うめき声を上げる三人。
そして、完全にブリザードが全てを飲み込んだ。
奈々「きゃあああああ！！」
メッチャ「ぐあああああ！！」

ルーシア「いやあああっ！！」

激しい冷気と、乱れ飛ぶ氷弾に晒される三人。
その身体は徐々に凍り付き、打ち付けられ、切り刻まれる。
身体のあちこちから出血が始まるが、それは瞬時に凍らされ、冷たさなのか痛みなのかその判別すら付かなくなってくる。

ディース「これで終わりですね」

完全に勝負は決まったと思うディース。
ふと、その時に彼の携帯が鳴り響く。

ディース「はい、私です。・・・・・・ええ、たった今。・・・・・・そうですか・・・・・・所定のキャンセル料は頂きますがよろしいですか？・・・・・・わかりました」

電話でのやり取りの後、携帯を閉じるディース。

ディース「やれやれ…骨折り損のくたびれ儲けとはよくいったものです」

パチン、とディースが指を弾くとブリザードは一瞬で掻き消える。

奈々「うぅっ…」
メッチェ「・・・・・・・ぐっ」
ルーシア「・・・・うううう・・・」

3人がまだ息をしていることを確認するとディースは呟く。

ディース「彼らも運が良いのか悪いのか…ですね。ともかく仕事は

終わりですか」

そういい残すとディースは最後に3人を一瞥してから、消えるようにその場から去っていった。

それから3時間後、奈々が目を覚まし二人を起こすと、いつのまにか集まっていたギャラリーから逃げるようにその場を後にしたのであった。

## ０１４　氷の暗殺者（後書き）

原本にはない戦闘回でした。
それにしても、ガーディアンとその敵の戦力比がやばい。
現状でガーディアン勢は未登場や覚醒していないものもいる状態で、敵側は全員能力者として覚醒済みかつ、強大な能力を持つものが多数。そして組織力。

これを書いている当時は楽観視していましたが、後に展開があんなことになるなんて全く思いもしていませんでした。

## 015　ダレカの記憶

この記憶はある男の忘れ去られた記憶。
そう、遠い昔の記憶である。

この力は何の為に…？
僕は自分に何度もそう問いかけていた。でも答えは出ない。
ただ判るのは、この力はスィールズを守るためのものであるということ。

なぜ？どうして？

僕の彼女はある日殺された。
僕がスィールズ・ガーディアンであった、ということが理由だった。
なんで？僕はそんなもの望んじゃいない！

失意と絶望に打ちひしがれる日々。
そんなある時、同志を名乗る人々が僕の元へとやってきた。
彼らは僕と同じガーディアンであることを告げた。

そして僕は彼らと共に戦った。
奴らからスィールズ・ガーディアンを守るために。
少なからず彼女を殺した彼らへの復讐心もあったけど。

ある時は街で。
ある時は山で。
ある時は海で。

奴らと僕たちの戦いは短いが長いように感じられる、とても熾烈な戦いだった。
そして戦いの中で何人かの仲間が散っていった。
そしてそんな戦いの日々が続く中、とうとうスィールズが僕達の目の前に現れた。

それが何なのか？
それがどういう理由で存在するのか？
全く情報がないけれども、それを守ることが僕達の使命である。
ただ守るために戦った。生き残るために戦った。
だけど奴らの力は強大で、為す術も無く、次々とスィールズを破壊されてしまっていた。

そして、とうとう奴らの『目的』は達成された。
奴らの目的は・・・・・・。
いや、そんなことはどうでもいいか。もう、どうでもいいんだ。

今、この場にいるのは僕一人。
辺りには数人の『敵』と『味方』が倒れていた。
全員もう死んでいる。
確認するまでもなくわかっていた。
僕の腕の中には、僕を守るために死んでしまった女性がいる。
彼女はスィールズ・ガーディアンを守護する、ガーディアンの使命を果たした。
つまり、僕を守ることが彼女の使命だったらしい。
でもそれも無駄に終わってしまった。
僕一人を守ったところで、何も変わらなかった。

もう仲間はいない。僕一人だけだ。

そして敵は強大だ。力の差ははっきりと示された。
守るべき人も物ももう何も無い。

辺りは先程からシーンと静まり返っている。
まるで世界がこれで終わりかのように、虫の声も、風の音も、海から近いはずなのに波の音も、人の声も何も聞こえない。

実際、世界が終わる。
それがスィールズを全て破壊された時に起こると言われている出来事だ。
それ以上の情報は僕らにはない。それを防ぐために戦ってきたのだ。
でも防ぐことは出来なかった。だから世界が終わる。

僕は自分の最後の『能力』を振り絞って、右手にその力を集める。

これで全てが終わるんだ…これで…。

その右手を、
勢い良く、
自らの心臓に、
突き立てた。

ぐはっ。
僕の口から鮮血が零れ落ちる。
右手には鈍い感触と、確かな何かを潰した感触。
あっという間に右手は真っ赤に染まり、右手をゆっくりと引き抜くと、凄まじい勢いで血が辺りに噴出し、飛び散っていった。

目が急速にかすれ、脳が何も考えられなくなってくる。

これでいい。これで僕はもう、ようやく全てから解き放たれた。
運命からも、使命からも。

僕の目は最後の一瞬まで虚空を見つめていた。
星達が綺麗に瞬くこの夜の空を。

最後の瞬間に目に飛び込んできたのは、閃光と、一条のソラへと伸びる光の柱だった。
澱み逝く意識の中、僕はあることを思い出していた。

そうだ。そうだったんだ。

僕は微笑んだ。
いや、身体がそれに反応しているかどうかわからない。
ただ少なくとも、僕の意識では微笑んでいた。

そしてふと、思った。

また、始まるんだ。全てが始めから。
運命からも、使命からも逃れられず。また始まるんだ。

今度、また始まるのならば…。
今度、また会えるのならば…。

今度はきっと…。

そして僕はこの世界から消えてなくなった。

## 016　ルーシアの告白

―ルーシアの家―

ディースの襲撃から一晩明けて、現在は深夜である。
奈々が安全な人気の無い場所までメッチェとルーシアを運び、暫くしてなんとか目を覚ましたルーシアの案内で家に辿り着き、奈々の本格的な治癒を受けてから3人ともぐっすりと眠りに就いていた。先程、ようやく3人とも目を覚まし、居間でコーヒーを飲みながらくつろいでいた。

奈々「散々だったわね」

落ち着いたところで奈々がそう切り出した。
奈々は現在、服を着替えて寝巻きであるであろう和服を着て椅子に座っていた。

ルーシア「あんなに強い人が敵、なんですね…」

奈々の対面の椅子に座っていたルーシアが、思い出すように呟く。

ルーシアは一般的なパジャマを着ていた。
歳相応な格好が、この娘が少女であることを思い出させる。

メッチェ「いずれまたヤツと戦わないといけない、か…」

メッチェはソファーに深く座り、ため息をつきながら言った。
メッチェは着替えがなく、背広を脱いでワイシャツのままだった。

着替えを持ち歩いていた奈々とは違い、アクチュエス市に向かうことが決まってすぐ、必要な荷物を同市のホテルに送ったためである。これは仲間が見つかってもすぐに自分達を行動を共にするかどうかわからず、場合によっては能力に目覚めていない、または気が付いていない可能性や、能力に目覚めていてもガーディアンとしての自覚となる記憶が存在していないなどを考慮すると一日や二日でどうこうなる問題ではなくなると考えての行動である。奈々はそれほど荷物も無いということから配送を断ったが、奈々の荷物を見る限り、最低限過ぎる荷物にメッチェが妙な危機感を覚えてしまい、色々詰め込んだ結果、自分で運ぶには少々かさ張りすぎる荷物になってしまったのである。その為、荷物は今頃ホテルに届いているものの、予約したメッチェ本人も現れず、荷物だけが残されてホテルの従業員は困っているだろうな、とメッチェは考えたものの、現在は深夜だったし、自身も疲れていたので連絡をしていない体たらくであった。

奈々「能力はもちろんのこと、それぞれある程度、体術なども鍛えないといけませんね」

ルーシア「修行ですか？なんか漫画みたいな展開ですね」

メッチェ「確かにな。だが、自分の命がかかってるんだ。やるしかないだろう。それにあんな強さを見せ付けられた上に、こちらは手も足も出ないときたもんだ。男としては情けない結果をなんとか返上したいところさ」

場を和ますためか、メッチェが軽口を叩く。

如何程かには効果はあったようで、コーヒーの甘い臭いも手伝ってか、ある程度雰囲気はほぐれたように思えた。

奈々「メッチェさんとルーシアは武術の心得は全くないですか？」
メッチェ「ないな。毎日、運動程度なら欠かさないが、武術となるとな…」
ルーシア「運動は得意ですけど…ないですね～」
　メッチェとルーシアの答えを聞いて、奈々は頷く。
奈々「仲間探しはしていきますけれども、これからは合間合間で簡単な身体捌きや型なんかを私のほうで教えていきます。何も知らないよりは少しはマシになると思います」
ルーシア「奈々さん、何かやってたの？」
　ルーシアが興味深々に尋ねる。
奈々「基本的なことであればほぼ全部。応用になると私の家の独自のものが多くなります」
メッチェ「そりゃ…また少女らしくない少女時代だったんだろうな」
　メッチェは奈々の答えから過去を推測する。
　実際、想像通り少女らしくない少女時代であり、奈々の記憶には修行の毎日しかない。
奈々「ふふ、そうですね。ともかく、今日と明日はゆっくりしましょう。体力も能力も回復し切れてない感じがします」

優しく微笑みながらコーヒーに口をつける。
和服姿で洋物のカップを持ち、コーヒーを飲む姿というのは、なんとも異質なものを感じさせるが、その異質な中でありながらも様になっている奈々はとても綺麗である、とメッチェは思った。

ルーシア「あ、なんかメッチェさん、顔赤いですよ？」

奈々「具合でも悪いんですか？」

メッチェ「いや、なんでもない。大丈夫だ。それより…」

メッチェは視線を逸らしながら否定する。
そして会話の流れを変えようと言葉を続ける。

メッチェ「ルーシアは何時頃、能力に目覚めたんだ？戦闘は初めてだったろうが…能力の使用に関しては、結構、手馴れた感じで使えてたな」

ルーシア「ん～、実際に使えたのは小さい頃からですね～。本格的に使えるようになったのは中学生の頃なんですけどね」

奈々「ご両親は能力のこと知ってたの？」

ルーシア「はい。特に母が能力者だったので…」

奈々「えっ？」

ルーシアの言葉に奈々は驚く。
今まで竜堂家以外で能力を受け継ぐ家系があることを知らなかっ

たこともあるが、基本的に能力は受け継がれないものである、ということを父から聞いていたからである。
竜堂家は受け継ぐことが出来た特殊な例外であり、それ故に古くから退魔という仕事を請け負い、周りや国から認められることで、ようやく異質な存在と恐れられつつも一般の生活をすることが出来たのである。
そういった背景なしに能力を使える一族が無名のまま一般生活をしているという事実に驚くと同時に、自分の家以外にそんな家が存在するという事実に奈々は驚いた。

奈々「ルーシアの家は代々能力を受け継いでいるの？」

奈々は自らの疑問を解消すべく、そう切り出した。

ルーシア「違います。母の家は普通の家庭だったそうです。母がある時、能力が使えることに気が付いたそうです。確か２０代前半とか言ってましたね。その頃には父と付き合っていて、暫くして私を身籠った…、結果、私も能力を受け継いだ…みたいです」

メッチェ「じゃあお母さんも光の？」

ルーシア「そうです」

奈々「差し支えなければルーシアのご両親が亡くなった理由を聞いてもいいかしら？」

奈々はあえて踏み込んだ質問をした。
基本的に能力者ともなれば常人離れしたことが可能になる。それは体力や筋力だけに留まらず、病気や怪我に対する抵抗力や治癒力にも影響する。また、自身を傷つける行為に対しては、偶然・故意、

悪意のあるなしに関わらず、強い反発力が発生し、ちょっとやそっとのことでは大した怪我は負わないのである。自ら望んだ死や、能力ではどうにも出来ないほどの大惨事や自然災害に巻き込まれれば別ではあるが、ここ数十年、そういった大きな事件は聞いたことが無い。つまり、よほどの事がない限り、両親が、特に能力者である母親が死んだという事実は日常では老衰の他に考えがつかない。

高い可能性があるのは…同じ能力者絡み。

だから奈々は踏み込んで聞いてみた。

ルーシア「そう…ですね。多分、奈々さんの考えている通りです。私の母は…自然死なんかじゃないんです。殺されたんです」

メッチェ「なっ！？」

奈々「一体…誰に？」

メッチェは単純に驚き、そして奈々はやはりという表情を浮かべた。

ルーシアは軽くコーヒーを口につけてから暫くの後、呟くように言った。

ルーシア「それは・・・・・・・・私が・・・・・・母を殺したんです・・・・・・」

## ０１６　ルーシアの告白（後書き）

今回の話は実際はもっと短かったんですが、あまりにも唐突な話の入り方に、読み直した自分に「？」が浮かんでしまったので色々付け足しました。
その結果、この次の話も含めて１話だったのですが、長くなりそうなので切りました。

## 017　ルーシアの過去（前書き）

大筋はそのままですが、内容自体はほぼ書き直しでした…。

## 017　ルーシアの過去

奈々「ルーシアが…母親を殺した…の？」

ルーシアの告白に唖然とするメッチェと奈々。

ルーシア「はい。事の始まりは私が15にもうすぐなる、という時でした。父が仕事中の不慮の事故で亡くなり、私と母が深く沈んでいました。私は自分が悲しいというよりは、母が泣いているのが悲しくてなんとか元気になって欲しい。そう思って、なんとかしようと色々と手伝いや会話で母を助けようとしたんです」

ルーシアは一旦そこで言葉を切り、コーヒーを飲み干す。
カップから口を離すと、続けますよ？というようにメッチェを奈々を見てから、話を続ける。

ルーシア「そんな時、私はもっていた能力で何か出来ないか？と、思うようになったんです。結果的にそれがきっかけになって、完全に能力に目覚めることになりました。でも・・・・・同時にそれは能力が使えないことにも？がりました」

ルーシアの言葉に首を傾げるメッチェ。

メッチェ「能力に目覚めたのに使えないってどういうことだ？」
ルーシア「完全に能力に目覚めた時、私の中に『もう一人の私』が生まれました。私はその『私』から能力の使い方を教えてもらい、そしてその『私』を介することでしか能力を使いこなせなかったんです」
奈々「つまり、実際はルーシアの能力じゃなくて、そのルーシアの

中に住むもう一人のルーシアが能力者で、ルーシア本人は肉体を持つだけの媒介だった、ということかしら？」

ルーシアの説明を奈々が補足する。

ルーシア「そんな感じですね。私が幼い頃から簡単な能力が使えていたのも、内から溢れる能力の余波を受けての事だったみたいです」
メッチェ「そんなこともあるのか…」
ルーシア「そうして暫くした後、父が死んだ事故の原因がS・W社によるものと判明しました。S・W社は自らの保身のために父に濡れ衣を着せて、父の操作ミスが原因で発生した事故、ということに仕立て上げていたんです！」

ルーシアの声が、怒りによるものなのかわずかに大きくなっていた。

奈々「S・W社ならやりかねない話ね」
メッチェ「連中なら日常的にやることだな」

S・W社のやり方について同意するメッチェと奈々。
S・W社の黒い噂や、そうした闇に葬られた事実が多いという話はかなり広い範囲で出回っていたが、その真相を突き止めようとしたものは例外なく消されている。

ルーシア「私は母に喜んで貰いたい、そしてそれはS・W社に復讐すれば喜んで貰える、というように考えが向かっていきました。でも、私の能力は私の意志だけでは使えません。どうにかならないの？と私は『もう一人の私』に聞いてみたんです…」

ールーシアの過去ー

ルーシア「ねぇ、この能力は私の意志だけで使えないの？」
もう一人のルーシア「そうね、今のままでは使えない。でも、使えるようにすることは出来るわ」
ルーシア「ほんとうに！？」
もう一人のルーシア「ええ。実はとっても簡単なのよ」
ルーシア「じゃあ直ぐにでもやりましょ！！」
もう一人のルーシア「それじゃ、ちょっとお母さんを呼んできて」
ルーシア「お母さんを？」
もう一人のルーシア「協力してもらう必要があるの」
ルーシア「わかった！」

ルーシアは『もう一人のルーシア』の言葉を信じて母を呼んだ。
ルーシアの母「なあに？どうしたのルーシア」

ルーシアの母は急いで、というルーシアの声に着いてくる。
もう一人のルーシア「ふふふ、それでいいわ。それじゃあ始めましょう」

『もう一人のルーシア』はそういうと、能力を使い始める。
ルーシアの母「・・・え？・・・これは・・・まさか！？」
ルーシアの母の驚いた声。
ルーシアが簡単な能力を使えることは母親も知っていた。だが、本格的に使用できるというのは母親も知らない事実だったのである。今、目の前から溢れる能力は母親の持つ能力以上の力を感じさせるものであり、娘であるルーシアがこれほどの力を隠し持っていたというのは、信じられない事実であったのである。
ルーシア「これからどうするの？」
もう一人のルーシア「こうするのよ」
これから何が起こるのだろう？とワクワクするルーシアの目の前で、もう一人のルーシアは事を起こした。
ブシュッ！
ルーシアの手に鈍い感触。
その手に徐々に肉の温かさと血の赤が伝わってくる。
そう、ルーシアの光を纏った手は、母親の心臓を貫いていた。
ルーシア「・・・え・・・？」
予想もしなかった事態にきょとんとするルーシア。
ルーシアの母「ル…ルーシア…な、なぜ…？」

母の問いかけに我に返るルーシア。

ルーシア「いや・・・・・・なんで？・・・・なんでこんなことするの！？」

もう一人のルーシア「アハハハハハハ！これでいいのよ！私達の能力は枷がついている！この能力を完全な形で使うには、私自身か同じ能力を持つ誰かの魂を犠牲にしなければいけないのよ！ルーシア、貴女以外の能力者の魂でしか、この枷は外せないの！」

ルーシアの生まれ持った能力。それは光の能力だけではなかった。＜魂の束縛（ソウル・サクリファイス）＞、それが彼女に与えられた枷の名前。

自らが能力を振るうために、他の能力者を犠牲にしなければいけない。それをしないで能力を無理に行使すれば、自らの魂を削り、絶命する。

ルーシア「そ・・・そんな・・・」

初めて知った事実にうなだれるルーシア。

もう一人のルーシア「でも、これで能力は使える！そしたら私があなたのしたかった復讐をしてあげる！あなたは私の中で眠っていればいいのよ！これで私は自由なの！！やっと自由になれるの！アハハハハハハ」

ルーシアの中で狂ったように喜びだす『もう一人のルーシア』。

ルーシアは事態を把握できず、目の前で胸を貫かれた母だけを見つめていた。

ルーシア「お母さん…お母さん…死なないで…」

もう一人のルーシア「死なないで？貴女が願ったんでしょう？自ら能力を使うために、殺せって」
ルーシア「私はそんなこと願ってない！！だって…殺さないといけないなんて知らなかった！」
もう一人のルーシア「ふふふ、そうね。だって貴女…私に細かく聞かずに、直ぐやりましょっていったじゃない？説明する必要なんてなかったわ。貴女自身がそれを求めなかったんですもの」

その言葉に、ルーシアは少し前の時間の会話を思い出す。

ルーシア「あ…あ…」
もう一人のルーシア「うふふふ、思い出したみたいね。さぁ、もうすぐこの女は完全に死ぬ。そうすれば能力が解き放たれる。そうしたらルーシア、貴女はお休みの時間よ。その悲しいを抱いたまま、私の中で眠っていなさい」
ルーシア「いや・・・いやぁ！！」

これから起こる事態が感覚的に理解できたことと、母親が死んだショックで泣き叫ぶルーシア。
その声にルーシアの母がピクリと反応する。

ルーシアの母「ルー…シア…。あ…なた…存在が二つ…そう…だっ…たの…。なら…泣かないで…ルーシア…。……。私の最後の力…」

息も絶え絶えに母はそういうと、その身体が光り始める。

もう一人のルーシア「な、なんだ！？」
ルーシア「お母さん！！」
ルーシアの母「ルーシア…強く…な…り…なさい…。でも…それは…人として、人間として強く…なりなさい…」

その身体を光に変えた母は、少しずつルーシアの身体に溶け込むように入ってくる。

ルーシア「これは…お母さんの光…入ってくる…あったかい…」
もう一人のルーシア「わ、私を封印する光！？そんな！！仕込まれた魂の束縛を破るために…長い年月をかけて、ようやく自由になれるはずだったのに！！アイツのいうように…強く賢い者が…生き残る…ようやく私が私として生きれるようになるのに！！なんで！？やめて…やめ…きゃあああああ」

母が光となり、それが完全にルーシアに溶け込んだ頃、『もう一人のルーシア』はルーシアの中から消えてしまっていた。

ルーシアの母「私は…いつまでも一緒よ…ルーシア」

最後の一粒の光が消えると同時に、母の最期の声が聞こえた。

ルーシア「お母さーーーーーん！！」

ー時間は戻って現在ー

ルーシア「これが私の過去。その後は自分で能力を使うことが出来るようになりました。母の命と引き換えに…ですけれどね」

ルーシアは話し終えると、新たにカップにコーヒーを注ぎ、そのカップの水面を見つめていた。

奈々「そう…だったの…。ごめんなさい、思い出させて」
ルーシア「いずれ話さないといけないことだった気がしますし…いいんです」
メッチェ「しかし…なんだってもう一人の人格や、その魂の束縛とやらがあったんだか…」
ルーシア「詳しいことは…私なりに調べてはみたんですけど全くわかりませんでした。ただ…『もう一人の私』が残した台詞の中に、『仕込まれた魂の束縛』、『アイツ』というものがありました。誰かが…または何かが…私に何かをした結果、そういう風に…なったんだと思っています」

情報や手がかりが全くないことが悔しいのか、唇をかみ締めるように言うルーシア。

メッチェ「ひでぇことしやがる…」
奈々「本当になにも手がかりは？」
ルーシア「あるとすれば、『もう一人のルーシア』が、ずっと前に言っていた言葉だけ。『この能力の制限は、私達がスィールズを守るに相応しい力を持っているかどうか、その試験なのよ』というものです」
メッチェ「スィールズは守るのに相応しい力を持っているかどうかの試験だって！？」
奈々「そんなものが…」

ルーシア「それが本当かどうかは…もう確かめる術はないですけど」
重い雰囲気が辺りを包んでいた。
それを打ち破ろうとメッチェが口を開く。
メッチェ「一体…スィールズって何なんだ？」
奈々「私達が守るもの…でもその正体は…」
ルーシア「私が記憶している情報だと、それは兵器である、と。そしてその兵器は地球を守るためのものであり、言ってみれば地球のガーディアンだ、というようなものです」
奈々「５つのスィールズが兵器…それだけでも敵の手に渡れば大変なことになるわ」
メッチェ「そうだな」
ルーシア「５つ？６つではないんですか？」
奈々の言葉にルーシアが驚きの声をあげる。
奈々「え！？６つ？」
ルーシア「そうです。私の持っている情報では、５つのスィールズが全て破壊されたとき、６つ目のスィールズが現れる、と」
メッチェ「やれやれ。守るものが１つ増えちまった」
奈々「最後のスィールズ…ね。一体どんな力があるのかしら…」
ガーディアンの敵となる能力者は、一様にスィールズの破壊を狙ってくる。彼らがどんな目的で破壊することを願っているのかはわからないが、どうもその最後のスィールズが目的であることは奈々には想像できた。
気がつけば、外がうっすらと明るくなり始めていた。
３人はそれに気がつくとため息をつく。

メッチェ「朝になったか…」
奈々「そうね」
ルーシア「朝ですね」

メッチェ・奈々・ルーシア「・・・・・・・」

ルーシア「朝ごはんにしましょっ♪」

気分を切り替えるように切り出すルーシア。

奈々「そうね。ご飯と味噌汁がいいわ」
メッチェ「え、パンだろう？普通は」
奈々「ご飯に決まってるでしょ！ね？ルーシア」

キッ、とルーシアを見る奈々。

ルーシア「え、あのごめんなさい。パンしかないんです…」
奈々「・・・・・・」
ルーシア「えっと？」
奈々「・・・パンでいいわ」

渋々と答える奈々を見て笑うルーシアとメッチェ。

３人はまだ知らない。
スィールズを巡る戦いがどれほど大きなものになるのかを。
そしてその戦いの運命は、３人の人生を大きく変えていくことに

なるのである。

## ０１７　ルーシアの過去（後書き）

ヘビィな過去を持つルーシア。
その反動か、普段は明るいムードメーカー。
それは今後徐々に明らかになっていくことでしょう。外伝からでもわかります。

さて、また次は重い話。

## ０１８　シドの回想夢（前書き）

話自体は進みませんが、重要な話です。
今までの雰囲気とはガラっと変わる話です。

## ０１８　シドの回想夢

リティール郊外の大きな屋敷。
優しい父と母。大好きなお姉ちゃん。
…そうオレ…ううん、ボクはそこにいたんだ。

…ボクはいつも家にいるんだ。家にはなんでもあるから…。
沢山のオモチャ。優しい父さんと母さん。それにお姉ちゃんだって遊びに来てくれる。
だから外に出ない。…ううん、出たくない。
…外はすごくイタくて、コワイ世界だから…みんながボクをイヤな目で見るから…。
だから小学校もやめた・・・毎日がイヤだったんだ…。叩かれたり、蹴られたり、石で殴られたり…エンピツで刺されたこともあった…。イッパイ、イッパイ血が出た。…イタかった。怖かった。悲しかった。でも、父さんと母さんには言わなかった…言うともっとヒドイことされるから。
それでも…叩かれるよりも…蹴られるよりも…気持ち悪いとか、死んじゃえとか…

バ　ケ　モ　ノ

って言われるのが一番イタかった…。
でも父さんと母さんには言わない。…二人とも、ボクの事でイッパイ苦しんでるから…。

ボクがフツウトチガウカラ

これ以上、二人に悲しい思いをして欲しくない。

それからもう一人…お姉ちゃんにも心配させたくないんだ。
でもね、どんなに隠してもお姉ちゃんにはみんなわかっちゃうんだ。
お姉ちゃんはいつも、一人でガマンすることないよって、ボクのことを抱きしめてくれる。ボクはその度に大声で、イッパイイッパイ泣いてた。
お姉ちゃんは大声で泣くボクの身体のケガを優しく光る手で治してくれた。
『アナタは一人じゃないのよ』って、
『私がいつも一緒にいてあげるから』って言ってくれた。

嬉しかった、凄く、凄く。

それで余計に泣いちゃって、お姉ちゃんに笑われたこともあった。

たくさん、辛くて、悲しかったこともあったけど…ボクには父さんと母さんと、それにお姉ちゃんがいたからガマンできた。
だからガマンできたんだ…なのに…。

この頃、お姉ちゃんが来てくれない。
ケガでもしたのかな？　病気になっちゃったのかな？
凄く心配で…凄く気になって、母さんに聞いたんだ。
そしたら母さん、凄く悲しい顔して『お姉ちゃんはもう、来ないのよ』ってボクに言ったんだ。
どうしてって聞いた。
泣きながら何度も。
でも、母さんは何も教えてくれなかった。

その日の夜、ボクは父さんと母さんが話しているのを聞いちゃっ

た…。
お姉ちゃんは部屋に閉じ込められている、そう言ってた。
ボクに会いにこれないように…。
母さん泣いてた。あの子の唯一の友達だったのに、って。
周りの人達は…周りの人間達は…父さんと母さんを悲しませ、ボクから大切なものを奪っていくんだ。
ボクが普通の子供じゃないから。

・・・ゴメンね・・・父さん・・・母さん・・・

それから数日後だった…あの日が来たのは…

その日は凄く凄くコワイ夢をみて、その夢から逃げたくて…ボクは父さんと母さんの部屋に行ったんだ。真っ暗な廊下を歩いて…そして父さん達の部屋のドアを開けた。途端、「来ちゃダメ！」って母さんの声がしたんだ。
部屋の中には三人組のマスクをかぶった見知らぬ男達と、縛り上げられた父さんと母さんの姿があった。
次の瞬間、ボクは三人組の一人に殴り飛ばされた。
ヤメテって母さんの声と、息子に手を出すなって言う父さんの声が聞こえた。
頭がイタイ…血が、イッパイ血が出てる。立てないよ…ボクは倒れたまま、ただ父さんと母さんを見つめていた。
男達は『金庫の鍵を出せ』って怒鳴りながら、父さんを何度も殴りつけていた。
でも父さんは『断る』って…。
そしたら男達の一人が、母さんに鉄砲を突きつけた。
長い鉄砲。知ってる。ショットガンっていうんだ。
父さんは『わかった、だから撃つな』って言って、金庫の鍵の場所を教えた。

そしたら…男達は…『アリガトウ』って言って…

父さんの…

頭を…

撃ち抜いたんだ…

『いやあああああっ』って叫んだ母さん。

そしたらアイツら、今度は…笑いながら母さんの服を引き裂き始めたんだ。

暴れる母さんを、静かにしろって何度も蹴った。

母さんが男達に何をされているのか…その時のボクにはわからなかった。

母さんは泣きながら、時に叫びながら…辛そうに…悲しそうに…倒れたままのボクの瞳を見つめてた…。

その時、ボクは母さんが酷いことをされてるってわかった。

わかった途端、

ボクの中で、何かの糸が

プツンって切れた音がした。

アタマのイタミが薄らいでいく。

キョウフがキエテいく。

体中を…ドス黒いナニかが駆け巡る。

・・・立てる・・・

ボクはゆっくりと立ち上がった。

立ち上がったボクを男達は睨み付け、ナニか叫びながらショットガンを向けた。

でもちっともコワくなかった。負ける気がしなった。

ウッテミロ…ウッテミロヨ！コノカスガッ！

ボクの口から勝手に…言葉が出た。

母さんは

『ダメ！やめなさい！シド！！』

ってボクに何度も呼びかけてた。

…でもボクは…体中を駆け巡るドス黒い感覚…殺意を…

止めることは　出来なかった

・・・・・・・

気が付くとボクは、ガレキの山の上に座っていた。

家ごと吹き飛ばしたんだ…あの三人組を…そして…母さんをボクのチカラで…

ふと…手元をみると、悲しそうに涙を流した、母さんの頭が転がっていた。

うわあああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああ！！

ボクは泣きながら叫ぶことしか出来なかった。

傍にあった、割れた鏡には…。

黒かった髪が真っ白に…いや、銀色に変わったボクの姿が映っていた…。

その後、一年の間、ボクは親戚のウチを行ったり来たりしていた。

でもドコへいっても、『何でウチが…』とか、『あんな子供気持ち悪い』とか…。

ボクの居場所はドコにもなかった。

そうだ…基地に戻ろう…。ウチの裏山に造ったボクの基地に…。

ボクは親戚の家を飛び出して、裏山に向かった。

裏山の小さな穴倉。基地といっても単なる穴と同じだけど、それでもそこがボクの基地だった。

いつもいつもツライ事を言われて…傷つけられて…嫌な思いをするくらいなら…一人の方がマシだもの…。ボクは暗い穴の中で、ず

っとうずくまっていた…ずっと。

穴に光が差し込んできた。

朝だ。

お腹…空いたな…。何か食べたい…。

ボクは空腹からフラフラと山を降りていった。

でも…降りなければ良かった。

同い年くらいの子達に、イッパイいじめられたんだもん。

叩かれて…蹴られて…手のひらに釘を刺された。

そしてボクの髪の毛を引っ張って言うんだ。

『なんだコイツの髪、銀色だぜ？キモチワリー』って、

『やっぱりバケモノだったんだ』って…。

ボクは泣きながら山に戻った。

もういい…こんな思いをするくらいなら…何もいらない。

いっそ、このまま一人で…。

ボクはそう考えながら基地の中へ入ろうとしたんだ…でも…。

誰かがいる、ボクの基地の中に。

ボクは怖くなって逃げようとした。

そしたら

『シド』

って、優しい声がした。

ボクの大好きな声。

そこにいたのはお姉ちゃんだった。

『よかった！無事でよかった！』

お姉ちゃんはボクを抱きしめてくれた。
お姉ちゃん泣いてた…。
ボクも嬉しくて…そして今までのツライことを思い出して…ワンワン泣いた。

お姉ちゃんは家を抜け出して、ずっとボクのことを探してくれてたんだって。
でもボクはもうドコにも戻る場所はないし、戻りたくもない。
そう言ったら、お姉ちゃんは『わかった』って言って…それから毎日お姉ちゃんはボクに会いにきてくれた。いっぱい食べ物を持って。
夜は一人で怖かったけど、他の時間はずっとお姉ちゃんが傍に居てくれた。
ゴハンを食べさせてもらったり、お姉ちゃんの家でこっそり、誰もいないうちにお姉ちゃんと一緒にお風呂に入ったり…いっぱいいいっぱいお姉ちゃんに甘えた。
お姉ちゃんがいてくれれば…他にもう何もいらなかった。

その日は朝から雨が降っていた。
…お姉ちゃん遅いな…。
ボクは基地の中で両足を抱いて座り込んでいた。

いつも来る時間にお姉ちゃんは来なかった。
いつも雨でも、雪でも、強い風の日でも、雷のなるような日でも…必ず同じ時間に来てくれていたのに…今日はまだ来ない…。

もう待っていられない。
ボクは穴を抜け出し、裏山の麓までお姉ちゃんを迎えに行くこと

にした。

雨に濡れ、緑の香りが強くなっていた少し薄暗い山道を、ボクも雨に濡れながら、ピチャピチャと早足で歩いていた。

山の麓までは１０分くらいかかるんだ。

ボクはその間、お姉ちゃんのことだけを考えていた。

もう雨で全身ずぶ濡れで、下着まで水が入ってきていたけど、そんなことは気にならなかった。

あれ…ダレか、歩いてくる。

この裏山を誰かが登ってきてる。

お姉ちゃん？…ううん、違った。それは二人の若い男の人だった。誰だろう？

そう思っているうちに、その二人の男はボクの傍までやってきたんだ。

『このガキじゃねぇのか？』

『ああ、銀髪に青い目、間違いねぇよ』

ボクにはこの人たちが何を言っているのかよくわからない。

ただボクを探してたみたいだったことはわかった。

『しかし楽な仕事だぜ、こんなガキ一人を殺るだけで、大金が転がり込んでくるんだからな』

その言葉にえ！？と思った瞬間、二人の男達がポケットから小さい鉄砲を出して、ボクの左肩を撃ち抜いた。

左肩から血が噴出して、みるみるボクの服が真っ赤に染まっていく…。キズが熱い…。めまいがする…気持ち…悪い…。

『次は頭にいくぜ』

男の人はそう言って、ボクにまた鉄砲を向けた。

死…　殺される…？

足がガクガクと震えた。

う…うわ…うわあああああああああああ！！

いやだよ！…いやだよ！！死にたくないよぉ！！

ボクは森の中に向かって一気に走った。

助けて！お姉ちゃん！お姉ちゃん！！

木の枝や葉っぱで、身体の色んなところが切れた。

イタイヨ…でも立ち止まったら…。

振り向くと、二人の男は笑いながらボクのことを追いかけてきていた。

その顔はまるで楽しむかのように、いつでも殺せるのに逃げるボクをみて笑っているようで…。

二人とも本気じゃなかった。本気でボクを殺すつもりじゃなくて…本気じゃないのにボクを殺すんだ…。

そうだ、きっとそうだ。

きっと、誰一人本気じゃなかったんだ…。

ボクを引き取った親戚の人たちも…ボクの事をイジメた同い年の子達も…。

どうして？どうして！！

みんな、真剣じゃないのに…本気じゃないのに…ボクにつらい思いをさせるの？

本気じゃなければナニをしてもいいの？
ボクがひどい目に合うのが…ボクが傷つくことが楽しいの？
ボクは…ボクは…一生懸命…本気で…苦しくて辛くても必死で…

生きているのに！！

あっ！！
ボクは木の根っこに躓いて、その場に倒れこんだ。
両膝から血が流れる。
丁度、倒れた膝が石かなにかにぶつかったみたいで…物凄い痛みが響いてきた。
…ダメだよ…もう走れない…イタイヨ…イタイヨ…
振り返ると…そこにはさっきの二人の男が立っていた。

『へへへへへ。逃げ切れるわきゃねぇだろ、ガキ』
『ちょっと狩りでも楽しませてもらおうかと思ったが…まぁ金のほうが大事だからな』

男達が何か言っていたけど、ボクは自分に向けられた鉄砲に釘付けだった。

…ああ…これから死んじゃうんだ…
でも…それでもいいかもしれない…父さんと母さんに会えるもん…
もう、こんなにツライ思いをしないでいいんだもん…

ボクは覚悟を決めて、両目をギュっと閉じた。
そしたら…目蓋の裏に…お姉ちゃんの顔が映ったんだ。

…そうだ…死んだら…ボクが死んじゃったら…もう…
お姉ちゃんに会えないんだ……やだ…そんなのヤダ！！お姉ちゃ

ん…

ミリアお姉ちゃあああああん！！

気が付くとボクは大声でお姉ちゃんを呼んでいた。何度も、何度も。

『うるせえガキだな。ま、すぐに黙らせてやるぜ』

男は引き金を引こうとした。

その時、

『ヤメテ！！』って声がした。

お姉ちゃんだった。

お姉ちゃんは僕の前に両手を広げて立ってくれた。

『この子に…私のシドに、ヒドイことしないで！！殺すなら私にして！！』

途端に涙が出てきた。

怖いから？

お姉ちゃんが来てくれて安心したから？

ううん、違う。

今の言葉が…とっても嬉しかったから。

今まで父さんと母さん以外で…ボクのことを真剣に考えてくれた人がいることに…嬉しかったから…。

ボクは目の前に立つお姉ちゃんの足にしがみついた。

『もう大丈夫だからね…私がシドを守ってあげるからね…』

お姉ちゃんはそういって微笑んでくれた。

『おい…この女(ガキ)…』

『ああ、多分そうだ。一緒に殺っちまおう』

『へっへっへ。探す手間が省けたぜ。お前ら二人とも殺すことになってたからな…』

男達は鉄砲をお姉ちゃんに向けた。

『おいまてよ、どうせその女(ガキ)、殺しちまうんだからよ…タップリ楽しんでからにしようぜ？』

『それもそうだな』

男はニッと笑って再びボクに鉄砲を向けた。

『やっぱりはじめはお前からだ』

『ヤメテ！！』

止めるお姉ちゃんに男は『うるせえ！！』って左手で思いっきり…殴り倒しやがったんだ！

お姉ちゃんの唇から…赤い血が流れてた…。

…許せない…ユルセナイ…　コイツら…コイツラハ…

よくも…ヨクモ…お姉ちゃんを！！

ボクの体の中を、前に感じたあの…ドス黒いチカラが駆け巡った。

う…うう！！うおおおおおおおお！！！！！！

ドンッ！！

何かが吹き飛ぶような音がして、ボクはふと我に返った。
鉄砲を構えていた男は、ボクの目の前で…下半身だけを残して…粉々に吹き飛んでいた。
ボクも、お姉ちゃんも、もう一人の男も…飛び散った肉片と返り血で真っ赤に染まっていた。

…また殺った…また…

恐怖と不安が津波のように押し寄せ…ボクの体は凍えたようにガタガタと震えていた。

どうしよう…お姉ちゃんの目の前でこんな…

お姉ちゃんはただ呆然と、ボクを見つめていた。もう一人の男も。
ボクは首をふるふると横に振りながら言った。

『嫌いにならないで！ボクを…キライにならないで！！お姉ちゃん！！ボクから離れないで…ボクを……一人にしないでぇ！！』

ボクは半狂乱で泣き叫んでいた。
お姉ちゃんはたった今、目の前で人を殺したボクに…こんなボクに…ゆっくりと歩み寄り、そして…抱きしめてくれた。
そしてボクの耳元で、
『大丈夫、ずっと一緒にいてあげるから…。絶対に離れないから…だから泣かないで？』
ボクは両手でしっかりとお姉ちゃんに抱きついた。

その時、もう一人の男が、ポケットからナイフを取り出して歩み寄っていたんだ。

『よくもオレの親友(ダチ)を…このバケモンが！！』

男はナイフを振りかぶった。

だが…

ドキューン！

一発の鉄砲の音がした。

ナイフの男はフラフラと歩き、ドサリと倒れた。

男の頭からは血が流れ出てた。

ボクとお姉ちゃんの目は鉄砲を撃った男の人に釘付けだった。

真っ白のスーツを着た、若い男の人。

黒く、綺麗なストレートの長髪。

『大丈夫かい？』

その人はボクとお姉ちゃんに、真っ白な手袋に包まれた右手を差し伸べてくれた。

そして…

『二人とも、一緒においで…。私には君達が必要なんだ』

そういってニッコリと微笑んだ。

ボクの目には…その人の姿がとても眩しく…輝いて見えた。

きっと、お姉ちゃんの目にも。

ボクは気が付くと、その人の手を両手で握っていた。

『君は？』

その人はお姉ちゃんに聞いた。お姉ちゃんは…

『私は…』

そういって少し口ごもった。
お姉ちゃんには父さんも母さんもいるもの…仕方ない…、そう思った。でも。

『私は…シドから離れません』

そう言ってくれたんだ。
スーツの男の人は、お姉ちゃんを見てニッコリと微笑んだ。
そして、ボクとお姉ちゃんは、その人と一緒に歩き始めたんだ。

…そう…これがボクとお姉ちゃんの…

いや…オレとミリアの、ウォンさんとの初めての出会いだったんだ…。

・・・・

―アルドナーダ中央区　アルドナーダ高級ホテル　ロイヤルスウィート３０階―

広く美しい部屋。真っ赤な絨毯、巨大なシャンデリア。美しい座

り心地の良いソファーに、大きな天蓋のついたベッド。大きな窓の外には近くのネオンと、雄大に流れるイッデグリア川。その奥には首都オーケンシールドの美しく色鮮やかな摩天楼が見える。

シドはその部屋のソファーに腰を下ろしていた。

シド「・・・ん・・・」

シドは浅い眠りから目覚めた。

シド「・・・・・・・・・夢か・・・・・・・・・・。チッ、今更、ガキの夢を見るとはな・・・」

シドはそういうと、右肩に少し重みを感じ、振り向いた。
そこにはシドの右肩に体を預け、スースーと寝息を立てているミリアの姿があった。

シド「・・・・・・」
ミリア「ん・・・あ・・・！」

シドの微かな動きを感じたのか、ミリアは目を覚まし、ハッとして体を起こした。

ミリア「ご、ごめんなさい！私…眠ってしまって…ごめ…」
シド「・・・・・・」
ミリア「…シド？」
シド「・・・・・・」
ミリア「どうかしたの？具合でも悪いの？」

黙っているシドを見て、途端に凄く心配そうな表情を浮かべるミ

リア。

シド「なんでもない」

シドはスッと立ち上がると、廊下へ通じるドアに歩き出した。

ミリア「でも！」

シド「なんでもないって言ってるだろ！」

ミリア「キャッ！」

シドは心配して駆け寄ってきたミリアの右頬を右の甲で引っ叩いた。

その場にドサリと倒れこむミリア。

ミリア「ご…ごめんなさい…」

ミリアは唇を切ったらしく、血が少しにじみ出ていた。

それを見た瞬間、シドの頭の中で、過去の映像と今の映像が重なって感じられた。

過去、オレをかばって殴られ、唇から血を流したミリア。

その時、オレは怒り狂った…。だが…今オレはそれを自分の手でしている。

ズキンッ！！

頭に一度、イタミが走った。

…いつからだろう…人を殺すことに何も感じなくなったのは…

…いつからだろう…ミリアが…

……あんなに悲しい目でオレを見るようになったのは……

ズキンッ！！

頭に二度目のイタミが走る。

シド「う・・・」

シドは右手で頭を押さえ、2、3歩よろめいた。

ミリア「！？」

慌てて駆け寄るミリア。

ミリア「大丈夫！？ねぇ、大丈夫！？シド！」

シド「なんでもない！・・・大声を出すな」

シドはミリアを払いのける。

と、ガチャリとドアが開き、真っ白のスーツとコートに身を包んだ男が姿を現した。

ウォン「どうした？」

ミリア「シドの具合が…」

シド「なんでもないですよ」

ミリア「なんでもなくなんかないわ！今、ふらついてたじゃない！」

シド「お前は黙ってろ」

心配そうに寄り添ってくるミリアを片手で払いのけるように振り

払うシド。

ミリア「きっと疲れてるんだわ、少し休…」
シド「黙ってろと言ったんだ！！」

怒鳴るシド。
ミリアはビクっと反応し、次の言葉を飲み込んだ。

ウォン「・・・・・・・・・シド」
シド「はい」

ウォンはシドの目を見つめると、シドの右頬に、真っ白の手袋に包まれた手のひらをそっと当てた。

ウォン「明日は一日、体を休めた方がいい」
シド「ウォンさん…」
ウォン「わかったな？」
シド「・・・・・・はい・・・・・・」

シドは暫くの後、そう返事をした。

ミリア「ありがとうございます。・・・良かったシド・・・」

ミリアはウォンに一礼すると、その顔が少しほころんだ。

シド「ところでウォンさん。どうしてここに？今日は確か…」
ウォン「ああ。P・Sのことでちょっと君達に報告したいことがあってな」
シド「P・S？まさか・・・」
ウォン「ああ・・・完成しそうだ」

シド「そうですか。おめでとうございます！」
ウォン「ありがとう、シド」

微笑むウォン。
シドの目には、ウォンは今でも輝いて見えた。

・・・そうだ・・・オレは過去を捨てた・・・
今はただ・・・ウォンさんのために・・・

ウォン「それじゃあ、私は行くよ。二人とも、ゆっくり休んでくれ」

ウォンはそう言うと、シドとミリアの部屋を後にした。
床とドア以外、全面ガラス張りの高速エレベーターに乗り込み、
一階に降りていく。
ガラスの外で、上へ流れ見えなくなってゆく都市のネオンを見つ
めるウォン。

ウォン（・・・シド・・・まさか感情が・・・）

ウォンはガラスに映った自分を見つめる。

ウォン「フッ、今更な…」

エレベータのドアが開いた。
そしてウォンは、夜の大都市へと消えていくのだった。

## ０１８　シドの回想夢（後書き）

今までアップしてきた中では一番長い話。
ですが、今後、これくらいが短いくらいにボリュームアップしていく感じになっていきます。
一話では書ききれないことも多々出てくるでしょう。

そして暫く重い話は…ない…はず…。

## ０１９　炎の能力者（前書き）

随分と時間が掛かってしまいました。
仕事の方が非常に忙しく…申し訳ない。

## 019　炎の能力者

―カルキュリス市南部　ファイレミエスサーキット―

男「アルベルト、聞こえるか？今日も良い調子だ、そのままの状態をキープだ」

男がマイクに向かって大声を上げる。

アルベルト「ＯＫ！！任せときな！」

アルベルトと呼ばれた男は現在、このファイレミエスサーキットの中で自分のマシンを走らせている。そう、彼はレーサーだった。幼い頃からレーサーになる事を夢見て、才能と血の滲む様な努力の結果、若くして見事プロレーサーの仲間入りを果たし、戦歴を重ね、一流と呼ばれる結果を残し、今日もまたレースに挑んでいた。

アルベルト・レナンジェス。

その戦歴は輝かしい。今までの戦績は２５戦２３勝２敗。その２敗もマシントラブルが原因であり、他は純粋に腕だけで勝ってきた。その負け知らずともいえる強さは、周囲からの妬みを受けることも多かったが、結果が全てをねじ伏せてきた。妨害や露骨な嫌がらせも未だに絶えないが、それでも徐々に周りはアルベルトを認めざるを得ない状況になってきている。

彼は運も良かった。偶然とはいえ、何も知らなかった彼がマシンを預けることになったメカニックは、過去に一流レーサーのパートナーとも言える存在であった。色々な事情が重なって現役を引退していたが、彼の才能と腕、そしてレースに賭ける情熱と真剣な態度を見ていくうちに心惹かれ、再びメカニックとして、彼のパートナ

ーとなるべく現役復帰した。

彼は今、最高の状態にあった。

恵まれた才能、恵まれたチームメイト、多くのファンの声援。全て彼を見て期待し、その期待に応えた彼を更に絶賛した。

デビューして数年であるが、彼は既にこの業界で3本の指に入る位置にいた。実際にはほぼ敵なしとも言える強さを持っている。

そんな彼は今日も勝つべくしてレースに挑んでいる。

アルベルトは現在3位。しかし目前には1位と2位のマシンを捉えており、あとはタイミングがあればいつでも抜けるといったような状態である。

アルベルト「ちんたら走ってるんじゃねぇ！走りってのはこういうことをいうんだ！」

ヘアピンカーブとその後のS字カーブで発生した一瞬のインの隙、そこをついてアルベルトは強引にマシンを割り込ませるようにして滑り込み、あっさりと抜き去っていく。

アルベルト「そんな腕じゃ俺には勝てねぇよ」

コーナーを曲がり、ストレートに入る。次がラスト一周となっていた。

アルベルト「今日も優勝はいただきだな」

アルベルトが若干つまらなさそうに呟く。

男「アルベルト！！油断するな、後に一台くっついてきたぞ」

イヤホン越しに声が届く。
アルベルトがミラーをみると、後に黒いマシンが一台、ぴったりとアルベルトのマシンの後にくっついてきていた。

アルベルト「ほぅ、久々に張り合いがあるってもんだ」

アルベルトは少し嬉しそうに声をあげた。
良くも悪くも彼は強すぎた。故に、敵と呼べるような好敵手が殆どいない。それが彼を退屈させていた。
今回のレースも大した相手はいないと思っていた。だからこの展開には少々驚きつつも、アルベルトの気分は高揚していたのだった。

男「気をつけろ。今回が初出場のやつだ。予選タイムはお前より若干遅いが…他に情報がない。」

アルベルト「ちったぁ骨があるやつだといいがな。どれ、試してやるか」

直角に近いカーブが続くコーナーに差し掛かる。
アルベルトは殆どスピードを落とさずにそのコーナーを次々と突破していく。
チラリとミラーを確認すると、後のマシンもそれにぴったりとくっついてきて離れる様子はない。

アルベルト「その腕前は認めてやるが…これならどうだ？」

3連カーブを絶妙なラインで進みつつ、後方の相手を牽制するように嫌なタイミングでブレーキをかけ、衝突の恐怖心をわざと煽る

アルベルト。
しかし、黒いマシンはそれをものともせずぴったりとくっついてくるどころか、徐々に間を詰めてきていた。

そしてストレートに入る。
アルベルトは迷わずアクセルを踏み込むが、差は一向に縮まらない。それどころか既に横に並ばれていた。

アルベルト「なんだと…！？」

アルベルトは思わず自分のメーターを見る。文句なしの最高速度だった。
レースは最高速度も重要だが、最高速度が速ければ勝てる、というものでもない。物理的に曲がれなくなる速度が存在する以上、どちらかというと最高速度よりも、最高速度まで何秒掛かるか？ということを短縮する方が有利と言える。だから業界的にはマシンの最高速度は横並びで差は殆どない。コーナーで速度を落とさない、コーナーを抜けた瞬間のアクセルの踏み込みなどの選択が重要になってくる。無論、それを行うだけの腕も重要だ。
しかし、この黒いマシンは最高速度はこちらを上回り、アルベルトと同等くらいの腕を持ち、更に最高速度までの加速もこちらを遥かに上回っていると思われた。無茶な改造をしているかと思いきや、挙動を見る限り、非常に高いレベルで安定している機体であることがみてとれた。
この業界内の技術はそこまで差がなかったはずである。だが、現実に目も前に存在している。

アルベルト「なんてマシンだ…。このままだとまずいな…ん？なんだ？」

どう攻めるか？そう考えていた時、横に並んだ黒いマシンから、こちらのマシンに向けて何かが放たれるのが見えた。恐らく、アルベルトが特殊な人間でなければ見えなかったであろう速度でである。

アルベルトがその正体が何であるか、と頭の中で詮索を始めたその刹那、

ズドォォォォン！！

アルベルトのマシンが突如、爆発したのである。

男「アルベルト！？」

アナウンサー「おおっと！！ここでアルベルトのマシンが突然の爆発だ！優勝間違いなしのこのタイミングでまさかのマシントラブルか？チームメンバーが慌てて現場に駆け寄ります。彼は無事なんでしょうか？」

突然の事態にざわめく会場。悲鳴と怒号で混乱するピット内。

激しく炎上するマシンの中、アルベルトは生きていた。

アルベルト「くそっ、あのマシンは何なんだ？俺が能力者じゃなかったらやばかったぜ」

アルベルトはひしゃげて開かなくなったドアを強引に蹴破った。マシンは予想以上に燃え上がり、その炎と煙で外の様子はわからないが、事故による喧騒だけは聞こえてきていた。

アルベルト「ちくしょう！！こんな負け方、納得できるか！」

単なるマシントラブルなら良い。だが、これは明らかに故意の事故であると確信できる。黒いマシンから放たれたものが一体なんだったのかはわからないが、何らかの爆発物であったことは、この結果から容易にわかることである。

憤りを隠さず、炎を自身の能力で退けながらゆっくりと車から降り立つ。まったく炎上の被害を受けていないというのは怪しいので適度に自身を焦がす。

アルベルト「アチチチ！しまった、長すぎたか！」

自らを焦がすということは熱を通すことになり、炎の能力者とはいえども熱さは伝わってくる。適度に熱くない程度にスーツを焦がすつもりだったが、色々と思考していたせいか加減と時間を見誤り、軽く半身が炎上していた。

アルベルトは急いで炎の外に身を投げ出す。

それを見つけた救護班が消火器でアルベルトの炎を消す作業を行うと同時に、タンカが運ばれてくる。

アルベルトは自らの体についた火が消えると同時に立ち上がった。

男「おい、アルベルト！無事なのか？」

チームメイトが話しかけてくる。傍目にはどう見ても大火傷を負っていてもおかしくないようにみえたが、目の前のアルベルトは平然としていた。

アルベルト「タンカはいらねぇ。俺は無事だ！それよりあの黒いマシンのレーサーを出せ！」

アルベルトは大声で怒鳴った。

その声を聞いたメカニックチーフがアルベルトに駆け寄ってくる。

チーフ「アルベルト、いいから医務室へ」

アルベルト「あ？それどころじゃねぇ！あの黒いやつに乗ってたヤツを…」

チーフ「いいから！その話も含めてお前に言うことがある」

アルベルトの怒声を遮って、初老のチーフはそう強く言い放った。
アルベルトはその気迫に押されたのか、押し黙ると素直にチーフと共に医務室へ向かった。

念の為、体中を調べたが、アルベルトに特に外傷という外傷はなかった。
爆発の時のものか、ふくらはぎ辺りに若干の擦り傷らしきものがあったが、簡単に包帯を巻いておけば良しとされた。
形式的な治療が終わると、部屋から全員を退室させ、アルベルトとチーフだけが残った。

アルベルト「で、話ってなんだ？」

チーフ「あの黒いマシン。出所はＳ・Ｗ社だった。」

アルベルト「なんだと！？」

Ｓ・Ｗ社は以前からこの業界では嫌われていた。
レギュレーション違反などはお構いなし。下手すれば金に物を言わせて、そのレギュレーションすら直前に変更させるような真似を

してくる。場合によっては他のレーサーを直接金で買収したり、チームそのものの経済力を奪うことや、人質をとってレースから降ろさせるような真似をした、というような噂まである始末である。技術力は間違いなく高いことは認めるのだが、それを活かせるだけの使い手がおらず、アルベルトのような腕のあるレーサーの前には今一歩及ばなかった、というのが今までの彼らであった。

チーフ「今回はかなり気合の入った新作のお披露目会だったらしい。レーサーも公表されず、表彰台にも立たなかった。代わりに営業部長が満面の笑みで立っていたがな…会場どっチラケだよ。何にしても俺たちは勝ってはいけないレースってことでウラで話がついてたんだ今回の件は」

悔しそうに語るチーフ。その悲痛な想いは理解出来るアルベルトであったが、アルベルトは声を荒げた。

アルベルト「だったら！何故、それを俺に伝えない！？最初にそういやぁ、少なくとも勝負はともかく、わざわざマシンを犠牲にする必要はなかっただろ！俺も死ぬような目に会うことはなかった！」

実際、アルベルトはあの程度のことで死ぬ要素はないのだが、周りから見れば充分な大惨事であり、ダレもがアルベルトの生死は絶望的と思ったほどの爆発であった。常人なら間違いなく無事では済まなかった。

チーフ「知っていたら教えたさ」

アルベルト「なんだと？」

チーフ「他のチームには事前に連絡があったようだが…。ウチは…

ついさっき、つまりお前が事故にあうまで誰もそんなこと知らなかったんだよ」

アルベルト「一体どういうことだ？」

チーフ「細かいことはわからん。連絡ミスなのか…それとも…故意なのか…。だがこれだけは判っている。この件で何を言っても誰も聞く耳を持たん。もう既にマスコミからもマシントラブルということで詳細を聞きたいとしか言ってこない。幸い、見舞金とやらが送られてきているのがチームにとっての救いだがな」

アルベルト「ちくしょう…これがあいつらのやり方か…」

アルベルトも、そしてチーフもうつむいて拳を握り締めていた。

アルベルト「くそっ！！」

アルベルトはやり場のない怒りを近くにあったゴミ箱にぶつけた。ガン！という音と共に吹き飛ぶゴミ箱には、大きな凹みが出来ていた。

チーフ「すまない。俺たちにはそこまで大きなチカラがない。押さえてくれ。そうとしか言えない…本当にすまない…」

立ち尽くすチーフに、アルベルトは何の言葉もかけられなかった。

## ０１９　炎の能力者（後書き）

唯一、作者達の中でＣＶが決まりきっているキャラであるアルベルト。

能力的に劣勢であるガーディアン勢の中では強キャラなのですが…。

## ０２０　破壊と炎と土と（前書き）

遅くなりました。
地震やら色々ありすぎて大変でした。

## ０２０　破壊と炎と土と

―やつらは…多分、俺を狙って…―

アルベルトは医務室を出て、廊下を歩きながらそう考えていた。
同じ能力者の一人が死んだ。その事実は自らの感覚が告げていたから、それを素直に受け止めた。
だから彼にはわかっていた。

―やつらが動き始めた…戦いが始まるのか…―

アルベルトが少し憂鬱そうな顔をし、ため息をつく。
ふと、廊下の先に一人の男が壁を背に立っているのが目に付く。
男はこちらを気が付いていないようにうつむいている。
アルベルトはそのまま、その男の前を通過した。

男「よう。災難だったな。どうだ？ウチのマシンは？」

アルベルト「！？」

通過する瞬間、男は小さくそう呟いたのをアルベルトは確かに聞いた。

アルベルト「ふざけるな！キタネェ手を使いやがって！」

アルベルトは感情のまま、男の襟首を掴みあげる。

男「くっくっく。俺の名はシド。お前を殺す男の名前だ。覚えておけ」

アルベルト「上等だ…こっちもハラワタ煮えくり返ってたんだ！！」

シドはアルベルトの手を振り払い、虚空に向かって声を掛ける。

シド「フォボス、例の手を頼むぞ」

フォボス「了解ですよ、シドさん」

ドコからともなく声がしたかと思うと、辺りの景色は歪み、霧か霞が掛かったような視界になったかと思うと、真っ暗な空間へと姿を変えた。

アルベルト「な、なんだ！？」

地面の感覚はしっかりとある。真っ暗な空間、といっても周りが黒一色なだけなようで、シドの姿ははっきりと確認できる。しかし、先程まであった辺りの壁は最初から存在していなかったように無くなっていた。

フォボス「ここはお二方の為だけのバトルフィールドです。能力者以外は入れませんし、逆に中から外への干渉は出来ません。つまりどれだけ暴れても大丈夫です。心ゆくまでバトルを楽しんでいってください。ボクの役目はここまでです。それでは失礼」

この空間を作ったと思われる能力者の声はそれっきり聞こえなくなった。

完全に居なくなったのか、それとも成り行きを見守っているだけなのかはアルベルトには判断がつかなかったが、まず目の前にいる男を倒さないといけないと気持ちを切り替える。

シド「と、いう訳だ。邪魔も入らないことだし…精々楽しませてくれよ？」

シドはそういってニヤリと笑うとアルベルトに向かって駆け出す。

アルベルト「上等だあああああっ！」

アルベルトも負けじとシドへ向かって駆け出す。

シドの手には灰色の光。アルベルトの手には赤い炎。

お互いのチカラを右の拳に収束させて、それがぶつかり合う。

バシッと乾いた音がする。単純にお互いの拳と拳がぶつかった時の物理的な音だ。

シド「まぁ、この程度は相殺してくれるよな？」

アルベルト「やるじゃねぇか…」

にやりと笑いあう二人。

挨拶は終わりだというようにお互い距離を空け、仕切りなおすかのように自らの能力を開放する。

シド「さぁ、ここからが本番だ！デモリション・ウェイブ！」

アルベルト「ぶっ潰してやる！オーヴァー・フレイム！」

シドの手から破壊の波動が放たれ前方の空間を侵食し、突き進ん

でいく。
アルベルトの手からは炎が放たれ、地を這うように進み、触れたものを炎上させていく。
両者の放ったチカラは、お互いの丁度中央でぶつかり合い、はじけて大きな光を生む。

シドもアルベルトもそれは織り込み済みであったかのように、閃光の中、次の行動を起こす。
そしてその行動は、全く同じものであった。
突進してからの右ストレート。
またしてもお互いの拳がぶつかり合う。

シド「いいぜぇ。まともに戦えるのは久しぶりだ」

アルベルト「憂さ晴らしには丁度良いじゃねぇか、お互いな！」

アルベルトがそう言い放つと同時に、拳の連撃がシドに襲い掛かる。シドは口元に笑みを浮かべたまま、それらを全てかわし、お返しとばかりに連撃を浴びせ返す。アルベルトもその程度、と言わんばかりにそれらを華麗に回避する。
攻撃の隙をついてアルベルトが炎で反撃に出る。渦となった炎がシドを包み込む。本来はそのまま渦の力でその場に縛りつけ焼き尽くすのだが、相手は単なる能力者ではなく、強力な能力者である。炎の渦を力任せに打ち破ると、まだ体に炎が纏わりついたまま、破壊の波動を繰り出す。咄嗟に、シドの手を振り払うアルベルトだが、能力の発動を完全に防ぐことは出来ず、力の余波を受けて軽く後方に弾かれてしまう。
第一ラウンドは双方損害軽微といったところであった。

シド「さて…それほど時間がある訳でもないのでな。少し本気を出すぞ？」

アルベルト「へっ、俺もいい加減、野郎の相手は疲れたんでな。俺もそうさせて貰おうか！」

シド「デモリション・ウェイブ！」

アルベルト「フレア・エクスプロージョン！」

破壊の波動と、激しい熱の爆発がぶつかり合う。

今度は直ぐに弾けずに、お互いの能力がぶつかり合ったまま、押し引きを始める。

アルベルト「くっ、焼かれちまえ！」

シド「ふっ、その程度か？」

アルベルト「なんだと！？」

今、アルベルトは全力でこの技をぶつけており、かなりのチカラを込めていることや、今もなお、押されまいとチカラを込め続けていることから、短時間とはいえ、汗が流れ始めていた。

一方、シドを見ると汗一つ流していないどころか、良く見ると片手で現状のチカラを維持していた。

アルベルト「馬鹿な！」

シド「なら…チカラの差を自分の目で確かめるんだな！デモリション・ウェイブ！」

シドのもう一方の手から破壊の波動が放たれ、均衡状態にあった力の場に注がれる。
倍化したともいえる力の流れにアルベルトの力が押され始めた。

アルベルト「くっ、こなくそおおおっ！」

シド「この勝負は俺の勝ち、だな」

ズドオオオオン！

力の流れに耐え切れず、アルベルト側に流れたエネルギーは大爆発を起こした。

シド「これで終わったか？」

やや呆気ない幕切れに詰まらなさそうに呟くシドだったが、それはすぐに訂正することになった。

シド「そうこなくっちゃな」

再びにやりと笑みを浮かべるシド。

爆煙の中にアルベルトが立っていた。

アルベルトは押された力が自分に戻ってくる前に、自分の技を爆発させ、力の拡散を図ったのだった。結果として、自分の能力のダメージと上乗せされた相手の力の余波をその身に受けることになってしまったが、まともに全ての力を受けてしまうよりは遥かにマシな状況だった。

アルベルト「ハァハァ…ちっ、しくじったぜ」

ダメージと能力の行使でかなりの体力を削られたのか肩で息をするアルベルト。

―どうやら単純な能力は向こうの方が圧倒的に上、か―

シドと自分の差を一発で認識できるほどに見せ付けられたアルベルトは、悔しさを感じると共に冷静さを取り戻していた。

―さて、この状況をなんとか切り抜けないとな―

このまま力比べをしていたのでは、ダメージを追った状況では不利であった。

それでなくとも、ここまでの力の差を見せ付けられては、今、まともに戦っても勝つどころか、生き残ることすら難しい。少なくともアルベルトはここで死ぬつもりなど毛頭なかった。幸いにも今の一撃で怒りは消え去り、冷静に判断出来る。なんとか逃げ切る、または相手を退けるだけの状況に追い込まなければいけない。その為に今、何が出来るか…。

アルベルトはそう考えつつ、シドの次の攻撃に備えて周囲を警戒する。

しかしシドはこの隙を襲っては来なかった。

シド「いいぞ、上々だ。もう少し頑張ってから殺されてくれよ?」

アルベルトの無事を確認してから、嬉しそうな声を上げるシド。

そしてゆっくりとアルベルトに近づいてくる。

ユラっとアルベルトの姿が揺れる。
シド「ほぅ、まだ何か出来るのか？」
シドは興味深く眺めるが何も起こらない。
ゆっくり、ゆっくりと近づき…そして、横合いからシドの顔面に衝撃がきた。
シド「ぐっ！」
アルベルト「へっ、殴り合いならまだ負けてねぇ」
アルベルトがそういうと、正面にいたはずのアルベルトの姿は燃え尽きて消えた。
シド「炎の変わり身、という訳か」
アルベルトは自らの出した炎を自分の姿にして配置していた。自らは爆発の際にダメージを負ったものの、その場から瞬時に移動し、シドが変わり身に近づくのを息を潜めて待っていたのだった。
シド「くっくっく、気配を辿るなどと基本的なことを忘れていたな。しかし…お前が死ぬことに変わりはない！」
そういうと一気にアルベルトに向かって距離をつめるシド。
アルベルトはそれに対応すべく構えを取るが、ダメージの影響か、それともその速さに反応出来なかったのか、完全に構えを取ることは出来ず、突っ込んできたシドのタックルを受けて吹き飛んだ。

吹き飛んだアルベルトが体勢を立て直すよりも早く、既にシドの第二撃が彼に向かって放たれていた。

シド「デモリション・ウェイブ！」

アルベルト「ぐぁっ！！」

辛うじて炎の障壁を出して威力を減少させることに成功するものの、大きな効果はなく、破壊の波動による激しい衝撃を受けて、体中に傷を負うアルベルト。体の傷からは少量ながら血が噴出し、全身は筋肉痛を激しくしたような痛みを受けていた。

シド「まぁ、粘ったほうか？」

今までにシドが倒してきた相手は、その殆どが能力者ですらなかった。能力者とまともに戦うというのはウォンとの訓練以外になかったし、先日、始末した能力者は覚醒前であったか一撃で死んでしまった。

シドはウォンには敵わないことは判っていたものの、実際、自分の実力がどの程度、能力者相手に通用するのかは把握していなかった。しかし、自身の能力がとても強力であることはウォンからも言い聞かされており、実験のデータとしてもその強さを数値としてみせられ把握していた。その為、相当な強い能力者相手でもない限り、苦戦する可能性は少ないことはわかっていた。だから、アルベルトがここまで戦えたことに素直に驚いていたのであった。

もっとも、アルベルトからしてみれば、微塵も驚いているようには見えなかったが。

アルベルト「ちくしょう…ま、まだ終わってねぇ…」

全身に走る痛みに耐えつつ、よろよろと立ち上がるアルベルト。
実際、能力はまだ全力で何度か扱うことは可能であると判断出来ていたし、全身の傷や痛みで動きは衰えるものの、体力的にはまだ戦うことが出来た。ただ、あのシドの攻撃をあと何回か受けてしまえば、立ち上がることさえも出来なくなることは容易に想像できていた。

シド「まだ戦うのか？諦めてさっさと死ね」

アルベルト「こんなところで、はいそうですか、って死ねるか！」

シド「くっくっく、確かにそうだな」

シドは軽く笑うと、アルベルトの体勢が整うのを待った。

アルベルト「舐められたもんだな」

シド「お前の力では俺には勝てない」

シドはそういうと、軽く指先でかかってこい、というように手招きをした。
その安い挑発に黙っていられるアルベルトではなかった。

アルベルト「なら…これでも余裕をかませんのかぁぁぁぁっ！！」

アルベルトの全身から炎が立ち上る。

シド「ほう、まだここまでのチカラを出せるのか」

凄まじい炎の火力と、溢れ出る能力の強さを目の当たりにしても、

余裕の表情を全く崩さないシド。

アルベルト「くらえっ！！インフェルノ・バースト！！」

炎を纏ったままシドに特攻していくアルベルト。

炎は次第にアルベルトの右の拳へ収束していく。

シドは瞬時にそれが炎の力を打撃力に変え、最大限の一撃を繰り出す技であると見切る。だが、あえて逃げることはせず、それを受け止めるように待ち構えた。

シド「死に際の最後の抵抗、受けてやろう」

自らの周りに破壊の波動で障壁を作り、自らはアルベルトから繰り出されるであろう拳を受け止めるために構えを取る。

全ての力を能力に回し、火力を上げながら迫ってくるアルベルト。

アルベルトの拳が届くまであと３ｍほどに迫ったその時、変化は起きた。

？？「ガイア・スプラッシュ！」

何者かの叫びと共に、地面が激しく揺れたかと思うと、シドの足元から槍のような突起をもった岩が噴出してきたのである。

シド「なに！？」

突然の事態に、咄嗟に障壁をその岩からの防御に回す。

その数秒後にアルベルトは目の前に迫ってきていた。

シド「ちっ」

舌打ちするシド。

純粋に自らの防御だけで防ぎきらなければならなくなった為、倒される心配はしていないものの、多少のダメージは負うことは覚悟しなければならなかった。

アルベルト「うぉぉぉっ！！」

内心、アルベルトも突然の事態に驚きを感じつつも、この絶好のチャンスに戸惑いなどしている場合ではなかった。

アルベルトは渾身の力で拳を突き出した。

突き出された拳は、シドの右手の掌に受け止められるが、威力を殺すことが出来ず、そのまま硬直状態となってしまう。

シド「くっ」

ここにきてシドは少し後悔する。

受け止めてみて初めて、拳に込められた力が思いのほか強いことがわかったのだ。障壁が機能していれば、それを突き破るのにもう少しチカラが抑えられていたかもしれないが、このまままともに食らえば、余りよい状況になるとは言えない。その上、未知の要素が加わっているのである。

そして、その未知の要素である第三者が、アルベルトを支援するかのように、防御にまわったシドに追い討ちをかける。

??「マグナ・ストリーム！」

土砂の竜巻のようなものが突如地面から湧き上がり、シドだけを包み込む。
石や砂が激しい流れにのってシドに容赦なく打ち付ける。
シドにとっては、この程度の攻撃はダメージとして非常に少ないものであったが、どんなに少ないダメージであっても集中力の阻害に？がり、それはアルベルトの攻撃に対する防御へ割ける力が分割してしまうことになった。

徐々にシドの掌が圧される。
咄嗟に左手で破壊の波動を放ち、土砂を吹き飛ばす。
土砂はあっさりと吹き飛び、視界が晴れると、目の前にアルベルトと見知らぬ青年の姿があった。そして、その青年は既に攻撃を繰り出す体勢に入っていた。
瞬時に左手を、その攻撃からの防御に回す。

？？「アース・インパクト！」

アルベルトと同じように能力を拳に込めるタイプの技だった。
アルベルトよりも弱いチカラであったが、アルベルトの攻撃を防ぐためにチカラを割いていたことや、土砂を吹き飛ばすためにデモリション・ウェイブを放った直後であったため、左手は完全な防御対策が出来ていない。恐らく、この侵入者の攻撃を受けたとしても、アルベルトに比べたら大したダメージは受けないことはわかっていたが、受けてしまえばその瞬間、能力の均衡が崩れ、アルベルトの攻撃も同時に受けてしまう可能性がある。そうなってしまえば大ダメージは避けられない。

ストン、という軽い音。
シドが軽く身を震わせ、懐からナイフを落とす。
ナイフは地面に突き刺さると、鈍い輝きを放ち、そして破壊の波

動を撒き散らしながら爆発した。
アルベルトの技と青年の技、そしてシドの技。3つの技はそれぞれ同時にはじけ飛び、そのエネルギーを周囲に撒き散らし、形あるものを破壊しようと暴れまわる。

アルベルト「ぐおおおおおっ！？」

？？「ぐぅぅぅっ！？」

シド「ぐあああああっ！！」

3人はそれぞれの後方に吹き飛ばされる。
全員、体中に傷を負い、致命傷とはいかないまでも決して軽くはないダメージを受けてしまっていた。

シド「くっ、こうまで手傷を受けるとは…」

シドは本来、敵の中心に投げつけて爆発させる技を自らを中心に引き起こすことで、アルベルトと謎の青年の技を相殺しようと試みたのだ。結果として相殺することは出来なかった。まともにアルベルトの技を食らってしまうよりはダメージを軽減できたが、予想よりも大きなダメージを負ってしまった。戦闘は継続可能だが、この後の仕事に差支えが出来てしまうほどのダメージは大きな失態であった。

アルベルトと謎の青年は既に体勢を整え直している。しかし、アルベルトの傷はかなり深いものになっていて、戦闘を継続した場合、それほど長くは持たないだろうと予測できる。ただ、謎の青年は守りの力に優れるのか、途中から戦闘に参加したためか見た目のダメージは遥かに少なかった。

―このまま戦闘を継続するべきか？―

シドは冷静に考える。

アルベルトはもうそれほど戦える力は残っていない。謎の青年の攻撃力はたいしたことはなく、単体の攻撃であれば問題はない。だが、どうも搦め手に優れている節がある上、アルベルトは感情がそのまま攻撃に出るタイプであることが今までの戦いで判っている。つまり、このまま仕留めそこなうと、更に攻撃力を高めた一撃が繰り出される可能性があり、そこに搦め手が発生すると最悪、シドが敗北する可能性もあった。加えて、今回の抹殺指令は「ついで」なのである。可能であれば殺害する、という前提なのだ。

このまま無理をして次の仕事や今後の仕事に支障をきたす方が一番の問題である。

だが彼のプライドとして、痛みわけとは言っても「勝てなかった」という事実が残ることは非常に不快であり、あってはならない事態でもある。何よりウォンの期待を裏切ることになる。

そして、シドは判断する。

シド「時間だ。まだ遊び足りないが、仕事は時間通りにこなさないとな。次の機会までそのチカラ、磨いておけ」

クルリとアルベルト達に背を向けると、強引にフォボスの結界を引き裂いて通常空間に戻す。

その顔は誰にも見せないが、苦痛と怒りで歪んでいた。

シドは決断した。

プライドを優先して戦った結果、勝ったとしても大きな傷が残り、

他の仕事が出来なくなることでウォンに失望されることは避けたかった。
今回はあくまで、アルベルトの殺害であり、謎の青年という不確定要素が出来た以上、一旦撤退し、様子を見るのは悪手ではない。まだ現在の傷の状況であれば、ミリアにすぐ完治してもらえるだろう。もっとも使用した分の能力は回復しないが、後の仕事はそれほど能力を使用するようなものでもない。
彼は自らのプライドを汚された怒りと憎しみを必死に押さえ込んだ。
―次に戦う際は…粉々にしてやるっ！―
そう心に誓い、一先ずこの場は撤退することにしたのだった。

あっさりと引き下がったシドを見て、アルベルトと謎の青年はホッと胸を撫で下ろす。
アルベルトは言うまでもなく限界に近い状態だったし、青年も怪我はそれほどではないものの、能力での戦闘をこれ以上続けられるほど余力はなかったのである。この事実を知っていれば、シドは戦闘を継続したであろうが、全く情報の無い能力者であった青年に対して必要以上の警戒があった。今回はそれが彼らにとって良い方向に働いたのである。
完全にシドの気配が去ったのを感じ取ると、アルベルトはその場に倒れこんだ。
??「アルベルト！」

アルベルト「へっ、大丈夫だ。ちと、疲れちまったが。で…お前は何者なんだ？」

アルベルトは倒れたまま、青年にそう声を掛けた。

？？「僕はエルド・シェンプート。貴方のガーディアンです」

アルベルト「そうか…。俺の相棒って訳だな。何にしても助かった」

エルド「いえ、なんとか間に合って良かった」

アルベルト「助けついでに医務室まで運んでくれねぇか？」

エルド「僕もけが人なんですが…」

エルドは自分の傷ついた身体を見回す。

アルベルトよりは浅いとはいっても、一般人だったら重傷といってもいい傷である。

アルベルト「俺のガーディアン、なんだろ？」

エルド「それじゃあ、しょうがないですね」

エルドは苦笑すると、アルベルトを担いで医務室へを向かうのであった。

## ０２０　破壊と炎と土と（後書き）

ようやくエルド登場です。

## 021　暴発（前書き）

もうちょっとで序章が終わる…はず…。

## 021　暴発

―アルディアム区リバーサイド倉庫軍―

立ち並ぶいくつもの巨大な倉庫。
その中の一つにウォンはいた。いつもは数十人のボディガードを従えた上に、傍にシドが控えているのだが今日は一人きりである。
倉庫内の窓、正面のシャッターは閉じられ、密閉された空間だった。

？「さすがに真の大物は違うな。約束の時間よりも早く来るたぁな」

薄暗い倉庫の中に、そう声が響いたと同時に一筋の光が降りた。正確には倉庫内の照明がたった一つだけ、スポットライトのように灯されたのだ。
その光の中に、まるで芝居の役者のようにゆっくりと男が姿を現す。その左右にはボディガードと思われる男達を従えている。

ウォン「私は何事も完璧にしたいものでね。予定の時間よりも早く動くことにしているんですよ。ザンジバールさん。」

ウォンはニコリと微笑んだ。

ザンジ「へへへ、そりゃご苦労なこった。……それよりブツは？」

ウォンはザンジに言われると、スッと横に動いて、背後に積んで置いていた3つのケースを手のひらで示した。

ザンジ「よし、開けて中を見せろ」

ザンジの言葉にウォンは指を弾く。パチンという指の音と、ケースの鍵の音が同時に重なる。同時にウォンは数歩後方に下がっていった。
その行動の意味を把握したザンジはあごで左右のボディーガードに指示を送る。
ボディーガードの二人の男はケースを一つ一つ開け中を確認していく。
ケースの中にはビニールのような透明な袋に包まれた丸いものが詰められている。『デッド・ラウンド』と呼ばれる強力なドラッグであった。

暫くするとボディーガードの二人がケースをしまい、ザンジの元へ運び出す。

ザンジ「へっへっへ。どうやら本物のようだな」

ウォン「勿論です。しかし、一度にこれだけのドラッグを買い付けるとか…私もこれだけのドラッグを一度に売るのは久しぶりですよ」

ザンジの言葉にウォンはそう言葉を返したのだが、ザンジはウォンの話を聞かず、キョロキョロと辺りを見回していた。

ウォン「どうかしましたか？警察などの類ならこちらで押さえていますから問題ありませんよ」

ザンジ「アイツはどうした？」

ウォン「アイツと言いますと？」

ザンジ「いつもアンタの傍にいる銀髪のガキだよ」

ザンジは薄暗い倉庫の中をきょろきょろと見回したり、ウォンの背後を遠目に見透かそうとしているが、変に演出じみた照明をつけたことで逆に倉庫内をみることが出来ていなかった。

ウォン「シドのことですか。彼は今、別件の仕事に出ていましてね…」

ウォンがそういうと、ザンジはニヤーッと笑みを浮かべる。

ザンジ「へっへっへ。そいつは楽でいいやな」

ウォン「と、いいますと？」

ザンジ「ウォン…テメェを始末するのになぁっ！！」

ザンジが叫ぶと倉庫内の照明が全て点灯する。

突然の明るさに目を細めるウォン。目が明るさで眩むものの、倉庫内の様子がどうなっているのかは簡単にわかった。

ウォン「これはこれは…盛大なおもてなしですね」

ウォンはそう言って、倉庫二階のギャラリーを見回す。

ギャラリーにはマシンガンやライフルをもったザンジの部下と思われる男達がズラリと立ち並び、その重厚はピタリとウォンに向けられていた。

ザンジ「テメェはよぉ、前からむかついてたんだよお。ガキのクセして調子に乗りやがってよぉ」

ザンジはウォンを睨み付けながら言葉を続ける。
ザンジ「テメェが妙なチカラをもってんのは知ってるぜ。だがなぁ…これだけのマシンガンやライフルと、この…」
ザンジは背後のドラム缶の影から銀色の巨大なライフルを取り出す。
ザンジ「対戦車ライフルがありゃよぉ！」
ニヤァーと笑い巨大なライフルをウォンに向ける。
だがウォンの表情は変わらない。それどころかため息をつくように肩を下げる。
ウォン「まぁ…わかっていたことですけれどもね。罠だということは」
ザンジ「なんだとう？」
ウォン「このドラッグは全てアナタ方に差し上げますよ」
ザンジ「へっへっへ、当然だろう」
ウォン「ただ…冥土の土産…として、ですけどね」
ウォンはニッと笑った。
と、同時に、

ドンッ！！

一度大きな音が倉庫内に響き渡った。
何事か？とザンジが辺りを見回すと、信じられない光景が広がっていた。

血の海。

何が起こったかはウォン以外理解できていない。だが、ギャラリーにいた男達は持っていた武器ごと、上半身が吹き飛ばされていた。
血と肉片が滝のようにギャラリーから流れ落ちる。

ザンジ「え？え？」

ザンジは今起こった現実の光景を理解できず、目玉をむいて震えながらウォンを見つめていた。
怯えるザンジに微笑むウォン。

ザンジ「お…お前達！何をしている！撃て！撃てーっ！」

ザンジは怯えながらも、かろうじて思考を少しでも働かせ、左右のボディーガードに命じた。
ボディーガード達も現状が全く理解出来ておらず混乱していたが、ザンジの声で我に返ると、お互いの顔を見合わせコクリと頷く。そして急いで懐の銃に手を掛け…その瞬間、

ドン！！

爆発音。
ザンジのボディーガード二人は、ギャラリーにいた男達同様、上半身が吹き飛んだ。残された下半身からは噴水のように血が噴出し、噴出した血は雨のようにザンジに向かって降り注いでいた。

ザンジ「ひっ…ヒィィィィィ！」

ザンジは手に持ったライフルはそのままに、血の雨から逃げるように後退する。

ザンジ「なにが？何が起こったんだ！？ええ！！なにがあああ！！」

ザンジは半狂乱で誰にと無く叫ぶ。

ウォン「最近手に入れた第三の能力でしてね…」

ウォンはゆっくりとザンジに歩み寄る。ザンジはフルフルと首を横に振り後ずさる。

ウォン「暴発、させることが出来るんですよ。爆発力のあるもの、エネルギーの流れているもの、それに変わる気や風水の流れ…。簡単に言ってしまえば、例えそれがコンクリートのビルであっても、死火山であっても、暴発させることは容易いんです。…今の私にはね…」

ウォンの台詞の意味が全く理解出来ないザンジは、更に怯えつつウォンに銃口を向ける。

ウォン「ほう、それを撃つ気ですか？フフッ、いいでしょう。撃っ

てみてください」

ウォンはそういうと両手を広げる。

ザンジ「！？」

ウォン「さぁどうぞ。能力は使いませんから遠慮なく」

その言葉の意味するところを理解して、恐怖から多少開放されたザンジが笑みを浮かべる。

ザンジ「へ…へっへっへ！バ、バカ野郎がぁ！この至近距離から対戦車ライフルだぞ！ひ、ひひっ。バカヤローがっ！！しねええぇぇ！！」

ザンジがライフルの引き金を引く。

ガォォォン！

獣の方向のような銃声が響く。

だがウォンは無傷だった。

たった2～3mほどの距離から放たれた弾丸はウォンには届いていなかった。

ウォンの数10cm手前で、対戦車ライフルの弾丸はまるで飛んできたボールを掴み取るような素振りで、少女の手に掴まれていたのだった。

綺麗なブロンドのセミロング。年の頃は12～13といったところだろう。色白の誰が見ても可愛らしいと思える少女だった。

少女はザンジにまるで天使のように微笑みかけると、手のひらからカツーンと、対戦車ライフルの弾丸を落とした。

ザンジ「う…うそだ…だ、弾丸を、対戦車ライフルの弾丸を…手で…素手で…？ハハハハ、手品かい？おじょうちゃん、そうだろ？ハハハ」

ザンジは引きつった笑いを浮かべ、油汗と共に失禁していた。

ウォン「フッ、ザンジさん。見えますよ…数秒先の未来。無残に死にゆく、アナタの姿がね」

ウォンがそう言うと少女は突然、ニィッと笑った。

ザンジの目に最後に映ったのは少女の顔。

だがそれは歳相応の愛らしい天使の顔ではなく、悪魔そのものだった。

## 021　暴発（後書き）

ようやくノート一冊目の終わりが見えてきました…。

## ０２２　シドの怒り（前書き）

短いクセにお待たせして申し訳ないです。

## ０２２　シドの怒り

―アルドナーダ中央区　アルドナーダ高級ホテル３０階　ロイヤルスウィート―

ウォンがザンジと取引、もとい虐殺を行っていた頃。

シド「くそっ！くそぉ！！」

ガッシャアアアン！！

シドは美しいガラスのテーブルを蹴り割った。

ガラスの破片がキラキラと舞い散り、豪華な絨毯の上に飛び散っていく。

ミリア「落ち着いて！落ち着いてシド！」

シド「五月蝿いっ！！」

シドは止めるミリアを払い倒す。

既にシドが暴れ始めて小一時間が過ぎている。能力者であるうえ、シドクラスの能力者が本気で暴れ始めたら小一時間で都市が一つなくなってしまう。そこまで理性が利かないシドではなかったが、その怒りは未だ収まらず、常人の暴れる範囲でモノに当り散らすことを続けていた。

シド「このオレが…仕事をミスって…このオレがっ！！」

ドン！と大理石の柱を叩く。

その顔は怒りと後悔の入り混じった表情を浮かべ、ギリギリと耐えるように歯を食いしばっていた。

ミリア「仕方なかったじゃない。あのまま二人の能力者を相手に闘っていたら時間が掛かりすぎて次の仕事に…」
シド「うるさいっ！！！」

ダン！と今度は壁を叩く。

シド「うるさい！うるさい！！うるさいっ！！！」

ダン！ダン！ダン！と立て続けに壁を叩き続ける。

ドォン！！

一際大きな音を立てて、壁を打ち抜く。
感情が高まりすぎたか、能力を使った一撃を放ったため、壁などはあっさりと打ち抜いてしまったのだ。しかし、多少の理性は残っていたことが仇になったか、抑えようとするチカラと発動しようとするチカラ、加えてシド自身の能力である『破壊の波動』が内部で暴発し、腕からは多少の血が噴出していた。

ミリア「あっ！？」

シドのその傷をみて、ミリアの表情が曇る。まるで自分が瀕死の重傷を負ったような悲痛な表情を浮かべているのである。現実、シドの怪我は大したことはない。彼にしてみればかすり傷にもならないような傷であり、出血量にしてみても軽く鼻血が出た程度のものである。気にすることでもなかった。だがミリアは違った。すぐにシドに駆け寄ると、拳や腕から出る血を止めるため、自らの能力である『治癒』を行使する。
能力の発動と同時に、瞬きする瞬間程度の時間でシドの傷は完全

に塞がった。

シド「ミリア…何を勝手に行動してんだ！？」

シドはそんなミリアをギロリと睨む。

ミリア「だって…血が…」

悲しい、とても悲しい瞳がシドの目に映った。

ズキン！！

前と同じイタミが頭に走った。

シド「っっ！？…その目はヤメロ！！その目でオレを見るな！！」

シドはミリアを振り払うと近くのソファにドサッと座り込んだ。

ミリア「シド…」

心配そうに歩み寄るミリア。

シド「…一人にしろ…」

ミリア「で…」

シド「一人にしろ！！」

ミリアの言葉を遮り怒鳴るシド。

ミリアは一度何かを言おうと口を開きかけるが、キュッと一度下唇を噛むと部屋を出て行くのだった。

シド（殺してやる…次に会ったときは絶対に殺してやる！！）

シドは口惜しそうにただ正面の空間を睨むのだった。

## 023　サミット

―首都オーケンシールド　グランセルタワー５０階―

首都オーケンシールド。
リティールの中心部であるこの都市は不夜城の如く、深夜であっても煌びやかに輝き続ける。その中心に近い位置に一際高い建物がある。それがこのグランセルタワーだった。

Ｓ・Ｗ社の本社ビルであるグランセルタワーは階数が５０階と小さく思える規模であるが、実際にその高さは１５０階、いや２００階に届きそうなほどの高さとなっている。その理由としては、全ての機能をこの１つのビル内に収めようとした結果という一言に尽きる。つまり一般的なオフィスだけに留まらず、宿泊施設や娯楽施設は言うに及ばず、実験室や研究施設なども同時に内包している。その為、やたら天井の高い階や、上下階との間隔が大きく開いている階なども存在することから、実際の階数より高いビルになっているのであった。

これだけ聞くと安全を無視した無茶苦茶な造りと思えてしまうが、その安全性は非常に高い。何せ世界安全基準など論外と思えるほど高い技術と数百年は先を行くような見たことも無いシステムによって安全性を確保しているからである。実際に、同様のシステム設計を用いた実験で、核攻撃ですらも耐え切り、その放射能すら通さない外壁や遮断システムは世界で賞賛を浴びた。もっとも、このシステムはＳ・Ｗ社以外では扱われていないし、そもそも外部へ販売しているシステムでも、公開しているシステムでもなかった。世界的に公開されたのは安全基準確認の実験の時のみで、細かい設計や素材など全ては秘匿とされていた。社内でもその詳細を知る者は数人しかいない。

そんな最先端の安全性を誇るグランセルタワーの最上階の大会議室で、とあるサミットが開かれた。
ウォンを中心に集まった能力者達全員の顔合わせサミットである。
とはいっても、実際は殆ど顔を合わせている面子である。表の顔があるためにあまりこういった場所にでてこれないミルティアやマッドに顔を直に会わせる機会というのと、何かと雲行きが怪しいと噂されるディースとの顔合わせがメインの目的である。
加えて、今回はもっと大きな目的もあった。

ウォン「さて、皆さん。お忙しい中、お集まり頂き誠に申し訳ありませんね」

大きな窓ガラスを背にウォンは集まった皆にそう告げた。
背後の窓ガラスからはオーケンシールド全てを見渡せるような光景が広がっており、その窓の前に立つものが全てを支配しているかのような錯覚を感じてしまう。

ウォン「今日皆さんをお呼びしたのは他でもありません。『スィールズ』がとうとう姿を現しました。場所はリティール外れの第四都建設予定地。過去の呼び方をすればフランスと呼ばれていた場所です。スィールズの名前は『ジャスティス』。これがどんなチカラを持っているのかはまだわかっていませんが…」

スィールズの出現、その言葉に一同は息を呑む。
彼らが同志たる所以、それは『スィールズの破壊』という目的を皆が持っているからである。それに明確な理由はない。本能というほど強い指示があるわけでもない。ただ皆、この能力を持っているのはそのためであることと、全てのスィールズを破壊することで彼らの望みが叶うということだけが判っている。そしてそのために障

害となるガーディアンと呼ばれる能力者を排除しなければならないことも。
　ガーディアンがどのような理由でスィールズを守っているのかはわからない。しかし、この能力に目覚めてから２０年以内にスィールズが破壊されない場合、その願いを叶えるチカラはガーディアン達の手に渡ってしまう。何故このような条件があるのか、そもそも何故このようなことを知っているのか？それはこの場にいる全員がわからないとしか答えられない。だが、各々に願いを叶えたい理由があった。だからこうしてこの場に集まっているのだ。

ウォン「フォボス、ミルティア、シド、ゴルディアス。君達４名はジャスティスの元へ向かって欲しい。目的は前に話した通りだ。ミリア、それにディースは最近わが社のやり方に反発するレジスタンスなる者達へ攻撃を行い、これを殲滅してもらいたい。マッドはアクチュエス市長としてこれまで通り、別命あるまで待機してもらいたい。」

　ウォンの指示を受けたものは皆一斉に頷いた。が、一人だけこれに異を唱えるものがいた。

ディース「少しお待ちいただけますか？」
ウォン「ふむ、なんだね？」

　ウォンはゆっくりとディースの方を見る。

ディース「ウォンさん、私はまだアナタ達と正式に手を組んだ訳ではありません。今回は同志として顔合わせと伺って来ているはずです。まぁ…ここに着た以上、協力することに異議はありません。ですが、アナタの会社の事情を解決する為の駒になるのは遠慮させて頂きたいですね。同志であっても仲間ではないのですから」

ディースは淡々とそう言い放つと、会議室は巨大な殺気に覆われる。
殺気の主はシドとフォボスである。
フォボス「貴様！」
最初に声を上げたのはフォボスだった。先を越された形になるシドは一先ずその場をフォボスに譲る。
フォボス「ウォンさんに向かって…」
ウォン「フォボス、やめなさい」
フォボスの怒声はすぐウォンの穏やかな声にかき消される。
ウォン「ディース、貴方のいうこともっともだ。むしろそれを失念していた私の非礼を詫びるべきだった。すまない。それで…どうするつもりですか？」
ディース「先程も言ったように同志としては協力しましょう。つまりスィールズ絡みの件ということです。貴方の会社の事情には今後も手を貸すことはしません。第一、レジスタンス程度、能力者を使うまでもないでしょし、貴方一人でも事足りることでしょう？敵に多く手のうちを晒す必要を感じません」
ゴルディアス「敵、だと？」
ディースの言葉にゴルディアスが反応する。
ディース「そう、敵です。明確に言えばガーディアン達ですね。ま

だ未熟な能力者ばかりで我々の相手にならないとは思いますが…そのチカラ、いつ開花させるかわかりません。私達の能力の出所、つまり何故、こんな能力を持っているのか？そして何故、ガーディアンという敵対する存在がいるのか？それは全く不明です。しかし、それらのことから逆に考えれば、『ガーディアンは私達に対抗するだけの能力は持っている』ことになります。ならば早いうちにその芽を摘むのが得策ではないのですか？」

フォボス「何をバカげた事！！やつらがどれほどチカラをつけようと、ウォンさんの敵になるわけじゃないないか！！」

フォボスが声を荒げるが、ディースはそれを冷たく受け流す。

ディース「当たり前です。ウォンさんの能力は無敵といってもいいでしょう。しかし貴方は彼らと戦うときにウォンさん一人にお任せするんですか？」

フォボス「それこそバカげた事を言うな！シドさんや僕がいる。ウォンさんの手を煩わせる訳にはいかない」

ディース「くっくっく。では、相手が能力を開花させて一致団結して攻めてきたとして…。何人が無事で済みますか？」

フォボス「全員返り討ちにするさ」

ディース「おや、先日は私一人に梃子摺っていた貴方がですか？聞けば先日、シドさんも能力者二人を相手に仕留めそこなったとか…」

フォボス「ディース！！」

シド「貴様！！」

フォボスの激昂と共に、今まで黙っていたシドも激昂する。

ウォン「やめないか！！」

一触即発の中、ウォンの一言で再び場が静まり返る。

ディース「少々大人気ないことをしましたね。失礼。要するに私が言いたいのは、彼らがチカラをつけてきた際、こちらも完全に無傷でいられる保証はない、ということです。無駄に同志を危険に晒したいというのなら話は別ですが」

ウォン「もっともな話だな。では貴方はガーディアンを狩りに行くということになるのかな？」

ディース「そのようにお話したつもりでしたが…他の意味に聞こえましたか？」

シド「いい加減にしろ！！」

ディースのウォンをおちょくるような態度に今度はシドが怒声を上げる。先程の任務失敗の件を掘り返されたこともあって、シドのディースに対する印象は最悪なものになっていた。

ウォン「いい。シド下がっていろ。ではマッド。ディースと共にガーディアン狩りにいきなさい。よろしいですね？」

マッド「…了解した…」

ウォンの言葉にマッドは小さくそう呟いた。

ウォン「他に意見はあるものはいるか？」

ウォンが辺りを見回すが反応は無い。

ウォン「ふむ、では話はまとまった。各自今日はゆっくりとしてください。明日からの仕事の為に。

そして、私によって踊らされるために、ね」

最後の台詞は口の中で呟くように言ったため、周りに聞こえることはなかった。

たった一人、ウォンの真横で控えていたミリアを除いて。

ミリアはただ怯えるだけであった。

ウォンのそうした台詞に。

そしてこれから起こるであろう事に。

## 023　サミット（後書き）

ようやく一冊目が終了となります。
実は一冊目はまだ続きがあるんですが…
ちょっと展開的に二冊目扱いにしようと思います。

ともかく、ようやく序章が終わりそうです。
そろそろ動きが出てきて面白くなる…はず！

## ０２４　スィールズ（前書き）

色々あって全然更新できずすみませんでした（土下座）
正直、明日食べるのにも一杯一杯で…（汗

## ０２４　スィールズ

その日、世界は驚愕した。

何の前触れもなく、突然に。

その巨大な物体は姿を現した。

その物体の大きさはおよそ３０ｍほど。奥行きはあまりなく、２～３ｍほどの厚さしかない。形状は言葉にし難い形状をしており、独特のデザインをしたものであった。表面は金属のような光沢を放ってはいるのだが、時折、鼓動のように脈を打っている。右手？というのかはわからないが、剣の様な突起物があり、剣であれば刃に当たる部分がうっすらと蒼く輝いていた。

そんな物体がリティール第４都と呼ばれる都市の上空２０ｍほどの地点で浮いていた。

第４都自体、建設途中の都市であったことが幸いしたのか、それほど高い建築物が無かったため、その謎の物体が出現したことで被害を受けるような事態はまだ発生していない。

だが、近辺に住む人々の心は不安で支配されていた。

アレは何なのか？

アレはどこから来たのか？

アレは何の為にあるものなのか？

出現から一時間も経たず、各報道機関でこの謎の物体の出現を報じると共に、各専門家を招いての解説や考察などを行っていたが、どれも憶測の域を出ないものばかりであった。

それが余計に人々の不安を掻き立てていた。

何らかの地球外生物の可能性や、地球外知的生命体から送りこまれてきたものである可能性なども踏まえて先程から軍のヘリから呼びかけが行われているが返答はない。

そうこうしているうちに2時間が経過した頃、リティール軍部の発案により攻撃対象とすることが提案された。会話が出来ない存在、放置しておけば住民の不安は募るばかり、このままでは近い選挙に影響を及ぼす。ざっくりとそんな話が出ていた。

話は二転三転したりと紆余曲折をして、結果、更に3時間後には攻撃開始命令が下された。

住民1「おい、あれは戦闘機じゃないか？」
住民2「攻撃するのね…」
住民3「このまま不安に過ごすよりはマシだ」
住民1「おい、始まるぞ」

住民達は避難命令を出されていたが、避難の全工程の完了をまたず攻撃が開始されたため、現在は都市から5ｋｍも離れていない地点で移動しながら事の様子を見守っていた。

5機の戦闘機が謎の物体目掛けて飛行する。

パイロット1「こちらアルファチーム、目標補足。射程に入り次第、攻撃に移る」
司令部『了解。ミサイル全弾発射後、各機は一時退避せよ」

パイロット1「了解」

リーダー「いいか、ありったけのミサイルをアイツにぶち込んだら帰還する簡単な仕事だ。だが手を抜くなよ。確実に全弾を撃ち込めよ。いい女にアタックするつもりで気張れよ！」

パイロット2「既にアタック成功した俺はどうすればいいんですかね？」

パイロット3「嫁さんに子種を打ち込むつもりでやればいいじゃねぇか？」

パイロット4「子供が出来たら大当たりってか？」

リーダー「へっ、不倫も男の甲斐性だ。今から一人の女に縛られてちゃ、いい男にはなれんぞ。っと、そろそろ攻撃に入るぞ！」

パイロット達「了解」

5機の戦闘機は射程に入るや否や、全てのミサイルを謎の物体に撃ち込み一斉に離脱する。

ズドォォォォン！！

数百という弾頭が打ち込まれ一斉に爆発する。

パイロット1「全弾命中しました！！」

喜びの声を上げるパイロット達。

しかし、数秒も経たないうちに、その声はぱたりと消える。

リーダー「無傷…だと…！？」

まだ爆煙は収まっていないものの、この日は風が強かったため、煙は既に消えかけ始めていた。
その消えかけている隙間から物体の表面を除き見ることができたのだが、結果は変化なしに終わっていた。

だが、状況を変化させることには成功した。

謎の物体がゆっくりと右手の突起物を持ち上げる。

パイロット3「動いたぞ？」
リーダー「いかん、全機離脱だ！！」

謎の物体の行動が何に起因するものかは不明であったが、攻撃した後の行動として考えられる行動は限られる。

？？「ジャスティス起動」

パイロット2「しゃ、喋った！？」

？？「敵性攻撃を確認。損害、損傷なし。敵勢力の影響度：最弱。但し、周辺地域に不要物多数確認。同時に殲滅が効果的であると判断。実行プロセスに移行」

パイロット4「なんだ？何をいっている？」

？？「正義（エクス・カリバー）による滅びの威光起動。使用時間：０．０３秒」

リーダー「全機、全力で退避！！」

長年の経験からの勘なのか、彼はそう叫んでいた。だが、もう遅かった。

??「発射」

一瞬、謎の物体の剣のようなものが光っただけだった。
爆音も何もない。ただの光だった。
だが、たったそれだけで。

謎の物体を中心に周囲１０ｋｍの範囲が何も無い更地になっていたのだった。
建物も、草木も、人も、何もかも無くなっていた。

??「排除確認。索敵・凍結モードに移行」

誰もいなくなったその場所で、その物体は現れた時と変わらず、ただ静かに空に浮かんでいたのだった。

## ０２４　スィールズ（後書き）

本話で序章が終了になります。
次話からはようやく第一章の開始です。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3308q/

題名の無い本編

2011年5月22日08時17分発行